

春日市の民俗

むかしの生活誌

(総集・補遺編)

春日市郷土史研究会

序 文

春日市は、福岡平野のほぼ中央に位置し、かつては青々とした水田が広がり、赤松の台地の間には無数の池や沼が点在するのどかな農村地帯でありました。

しかし、昭和三十年代頃から始まった急速な都市化の波は、私達の生活様式を急速に変えつつあり、これに伴い、先人から代々伝えられてきた民俗習慣や生活用具などが私達の身の回りから次第に姿を消し去ろうとしています。

時の流れが伝統的なものを徐々に押し流していくことは、或る意味では仕方がないことかも知れません。ただ、今日まで綿々として引き継がれてきたものが私達の代で消え去ってしまうと言うことは、余りにも寂しいことではないでしょうか。

何らかの形でその記録保存を図らねば近い将来には、人々の記憶が薄れ後世へ語り継ぐことさえ出来なくなるおそれがあります。

このため昭和五十六年から当教育委員会が補助事業として、春日市郷土史研究会に市内各区（春日、須玖岡本、小倉、上白水、下白水）ごとの民俗調査、及びその記録保存をお願いしてまいりましたが、このたびそのまともとして本「総集編」を刊行していただきました。

本書がただ単に昔の懐古にとどまることなく、先人たちの心の豊かさ、地域のふれあいのあたたかさを今一度見直し、今後の豊かなまちづくりの一助になれば幸いに存じます。

最後に本書の編集にあたり、その調査、編集を快くお引受けいただき、昼夜を問わず資料収集に駆け回られ、他に誇れる冊子を刊行していただきました春日市郷土史研究会の皆様のご苦勞に対し、心よりお礼を申し上げます。

昭和六十二年一月十六日

春日市長 亀谷長榮

二、はしがき

春日市郷土史研究会は、昭和五十四年（一九七九年）春日区を手初めに須玖・岡本、小倉、上白水、下白水と毎年旧大字毎に地区世話人、公民館、古老の方々を煩わして、大正時代の習俗を中心に「民俗調査」を行ない、その結果をつとめて平易にとりまとめて『むかしの生活誌』を刊行してきた。

また、古老から聴きだした面白い話で『むかしの生活誌』に登載できなかったものは、春日市報『かすが』の一部を借りて、約八十数回にわたって連載してきた。

大字毎の民俗調査は、昨年度をもって一応終了したので、本年度はこれまでの各大字毎の調査事項を整理して、春日市域全体という視点からみた場合の特色や共通点、特異事項を探り、さらに調査洩れや錯誤事項の点検を行うため再度各村落を一巡して取りまとめ『むかしの生活誌』（総集、補遺編）として刊行することとした。

なお、『むかしの生活誌』の各編は主として民俗部門、大正時代の習俗を対象としたものだが、将来刊行されるであろう『春日市史』の基礎資料となり、あるいはその一翼をなすものと考えられるので、不備、誤謬については引続き補足していきたいと考えている。

終りに、指導、援助をいただいた春日市、教育委員会をはじめ、各地区の世話人、古老の方々に深甚の謝意を表すものである。

昭和六十二年三月

春日市郷土史研究会

会 員 一 同

目次

一、序 文	
二、はしがき	
三、春日市の沿革と地誌	1
1、地理的環境	2
2、史的生活環境	(1)旧石器時代
代 (2)縄文(新石器)時代	(3)弥生時代 (4)古墳時代
代 (5)律令、莊園(飛鳥・奈良・平安)時代	(6)鎌倉・室町時代 (7)江戸時代 (8)明治時代以降
四、村落のたたずまい	5
1、むかしからの名字(姓氏)	2、自然景観の変貌
(1)巨木と樹林	(2)溜池と水遊び場 (3)三辻と竹藪
五、村落共同体	16
1、相互扶助的活動	(1)生活共同活動 (2)生産共同施設
2、集団組織	ア、年齢集団 (1)子供組 (小供中)
(2)若者組 (3)その他の年齢集団	イ、信仰集団 3、その他の集団
六、村落氣質	27
1、団結力の強い春日	2、誇り高い須玖
3、俠気に富む小倉	4、手職の多い下白水
5、働き者揃いの上白水	
七、歴史的伝承と地名	29
八、農事曆	31
九、農作業と農具	43
1、整地作業	2、育成作業
3、防除作業	4、收穫作業
5、調製作業	6、収納・加工作業
7、運搬	8、家畜の飼養
十、家族の呼称	47
十一、住 居	53
1、屋敷と付属屋、屋敷(敷地)付属屋、牛小屋、蔵	タキモン小屋、トビツ、ミノ蔵、灰屋、鶏小屋、便所
2、家相、方位	3、垣根と庭木
4、建築のはじめに	5、母屋、地鎮祭、礎石、柱
畳、湿度、調節、屋根、座敷、納戸、中居、ママク	イドコ、ニワ、クド、風呂場、屋根、天井、採暖、照明、井戸、棟上げ、ヤウツリ、新築祝い、
6、相互扶助	

十二、衣生活……………66

- 1、日常生活の衣類
- 2、テクリ
- 3、ポンチン
- 4、ビヨウビヨウ
- 5、オコシ
- 6、マエカケ
- 7、オビ
- 8、ナガギ
- 9、手甲と脚半
- 10、カブリモノ
- 11、ハキモノ
- 12、フトン
- 13、タンゼン
- 14、ネンネコ
- 15、タビ
- 16、ハタオリ
- 17、染め物
- 18、縫イ物

十三、食習……………71

- 1、平常の食事 (1)主食 (2)副食 (3)買って食べたもの (4)オ茶ノコ (5)ませメシ (6)保存食 (7)漬ケモン
- 2、暗れの食事 (1)餅 (2)赤飯 (3)ダゴ
- 3、トリモン
- 4、精進料理
- 5、食器

十四、信仰……………75

- 1、月光山長円寺
- 2、良岳院
- 3、東慶院、豊川稲
- 4、春日市の寺社の所在地図
- 5、春日市祭歳時記
- 6、絵馬
- 7、石造物 (1)猿田彦大神、庚申尊 (2)十六仏 (3)狛犬 (4)お大師様 (5)路傍の地藏

十五、年中行事……………80

- 一、暮から正月の行事
- 1、餅搗き
- 2、クレノモ

ン 3、栗ハイバシ 4、薪取り 5、お寺参り

- 6、支払い
- 7、絵馬
- 8、オカザリ
- 9、年越し
- 10、一月元日
- 11、二日
- 12、三日
- 13、四日
- 14、七日
- 15、七草汁
- 16、十一日
- 17、十四日
- 18、嫁ゴの尻叩き
- 19、左義長
- 20、十四日のチカラ餅
- 21、モグラ打ち
- 22、十五日正月
- 23、二十日正月

二、春から夏の行事 1、二月丑ドン 2、三月

- 3、四月
- 4、五月
- 5、六月 (1)土用の丑の日
- (2)十五日
- 6、盆 (1)墓掃除 (2)十三日 (3)十四日 (4)十五日 (5)十六日
- 7、盆ヅナ引き
- 三、秋から冬の行事 1、七月 (1)田ボメ (2)七夕節句 (3)虫追イゴモリ
- 2、八月 (1)八朔
- (2)十五日 (3)社日マイリ (4)秋の彼岸
- 3、九月
- (1)十五日 (2)オクンチ
- 4、十月
- 5、十一月

四、通年 1、荒神坊サン 2、時刻 3、夜ナ

- ベ 4、雨乞い

十六、産育の儀礼……………94

- 1、出産予定日
- 2、安産祈願
- 3、生産前後の禁忌
- 俗信
- 4、オビ祝イ
- 5、出産
- 6、産婦の食物
- (1)食べていいもの (2)食べてはいけないもの (3)薬

(4) 毒クダシ	(5) 母乳の代用	(6) ウブ見舞	7、ミツ
メ 8、オヒチャ	9、トコアゲ	10、宮参り	
11、モモカ	12、初誕生	13、初正月	14、初節句
15、八朔の節句	16、オゼンスワリ	17、ヘコカキ、	
ヒモトキ	18、預ける子	19、一人前	
十七、厄 年	101
十八、婚姻の儀礼	102
1、初婚期の年齢	2、通婚圏	3、仲立ちニン	
4、見合い	5、婚約成立	6、婿入り	7、嫁入り
8、嫁盗ミ	9、里アルキ	(1) 一番アルキ	(2) 二番アルキ
(3) 正月アルキ	(4) そのほかのアルキ		
10、オハグロ			
十九、葬送の儀礼	105
1、死後の処置	2、同齡感覺	3、納棺	4、葬式
組 5、野辺送り	6、埋葬	7、水カケ着物	
8、法事	9、年忌	10、俗信	
二十、民間療法	119
1、病氣祈願	2、民間薬療法	A 薬草類	B 手輕
につくり利用した民間薬療法	C そのほか物理的療法		
二十一、家畜の民間療法	113
1、牛馬のツクロイ	(1) ツクロイ	(2) ツクロイの方法	
(3) 病氣	(4) 病氣の手当	(5) 安全祈願	
2、鶏	(1) 病氣	(2) 病氣の世話	
二十二、妖怪の話	115
二十三、民 謡	116
二十四、春日市関係生活史年表	118
二十五、あとがき	124

三、春日市の沿革と地誌

1、地理的環境

春日市は福岡平野のほぼ中央に位置し、地形はおおむね円形、南高低の緩傾斜をなし、中央部は牛頸山塊から北走する風化花崗岩の春日台地（比高二十一―三十メートル）で、その東側に牛頸川、西側に諸岡川の小河川が南から北へ貫流している。

東部は春日原の黒ボク台地で大野城市に、西部は河岸段丘で那珂川町に接し、北部は福岡市の南区、博多区を経て博多湾に連なる沖積平野である。

面積はわずか十四平方キロ余と狭いが、有史以前から豊かな湧水と樹林に恵まれて、多くの遺跡をもち、歴史時代になっても西日本の政治、経済の中心であった太宰府や博多とはいずれも十キロ以内の至近距離にあるため、その影響をうけやすい農村であった。

近年は福岡市の膨張にともない、そのベッド・タウンとして急速に都市化が進み、現在人口およそ七・七万人、平方キロ当たり人口密度五四〇〇人という過密住宅都市に変りつつある。

2、史的生活環境

（春日市遺跡地名表・年表参照）

(1) 旧石器時代

福岡地方の旧石器時代の遺跡は、相対的に少ないとされているが、そのなかでも那珂川河岸段丘の新幹線基地一帯の門田^{モンデン}・柏田^{カシワダ}・原^{ハラ}などからは一万年以前の旧石器が大量に出土している。このことからみても、春日市の西南部は、背後に牛頸山塊の樹林地、前面には那珂川の平地を通じて博多湾に接しており、採取、狩猟、漁撈など古代の原始的生活を営むにはきわめて好適な環境にあつたことがうかがわれる。



春日市の位置図

(2) 縄文(新石器)時代

春日市の南部の上白水から春日付近にかけて門田・原・東浦・柏田・白水池・平田・春日原基地から縄文時代の各種土器、住居跡、石器、石組炉など定住生活を示唆する出土品が多い。

このことは、このあたり一帯に散在する大小の溜池にみられるように、山麓から湧出する清冽な生活用水に恵まれていたからと思われる。

しかし、縄文時代に農耕が行われていたかどうかは確証はないが、門田・柏田出土の多量の打製石斧はもろくて木材の伐採用よりは上を握る農耕用のものではなかったかといわれている。

(3) 弥生時代

須玖・岡本遺跡によって弥生時代の奴国の中心地に比定された春日台地一帯は、多数の甕棺墓(既に調査されたもの七五五棺)、各種青銅器、鉄器、木製農具、楽器、住居跡、貯蔵穴、青銅鑄型、ガラス器などの出土が相次ぎ、弥生遺跡の数は、市内で約五〇を数え、「弥生銀座」と呼ばれている。

わが国最古の水田稲作遺構で知られる板付遺跡(博多区)を真近にもつ春日丘陵周辺は、わが国農耕の先進地として他にみられない高い文化水準を形成してい

たとみられるが、さらに最近の永田、唐梨の青銅器の工房跡など、その文化は農耕のみならず、工芸面の役割も大きかったことが確認されて注目を浴びつつある。

(4) 古墳時代

農業生産力の上昇とともに階級分化も進み、三世紀ころからは各地の豪族が地方を支配し、領地を見下す場所に墳丘が築かれ、春日市内にも独立の古墳八カ所、古墳群九カ所がみられる。

なかでも畿東といわれた那珂川流域の福岡平野を見下ろす段丘上には、多数の出土品をみた日拝塚をはじめ五基の前方後円墳がある。

しかし一般庶民の生活を知り得る遺跡は少ないが、土師器、須恵器の破片などは市内各所に散布しており、原村、徳府(春日公園地区)には住居跡がみられるが、なかでもここから出土した獸脚付円面鏡はその文化水準の高さを暗示している。

(5) 律令・荘園(飛鳥・奈良・平安)時代

わが国が統一国家となつて、九州を統括する大宰府政庁がおかれた時代は、これを支える縁の下の下積み

の役割を果たしたのが太宰府周辺の農村である。たとえば、春日丘陵の谷間の春日上居屋敷、小倉

池の下、大土居、天神山にあった小水城は、大宰府防衛のために流された農民の血と汗の結晶ともいえるし、多数の大宰府官人のための建築物や生活資材を提供した窯跡群（平田・ウトグチ・堂園・浦の原・社池・惣利）の工人の住居跡の貧弱さなどはこれを裏付けしているようである。

しかしながら、神護景雲二年（七六八）とされる春日大明神の創建は、春日という由緒ある地名とともに、庶民の精神的支柱となったものと思われる。

(6) 鎌倉・室町時代

八世紀以降、大陸と日本とを結ぶ貿易基地であった博多は、十三世紀から十六世紀にかけて探題の所在地として政治・経済上の重要性を加えたが、それとともに中央政權はもちろん九州の守護大名の争奪の対象となり、建久三年（一一九二）に初見の白水庄も、宇美八幡、石清水八幡、鎮西探題、大友氏などと幾度か領主を変え、その庄官と思われる小土豪の白水氏も苦難の日々を送ったのであろう。

また、この時代に建立された乳峯寺（上白水）、大光寺（春日）などの廢寺の状況を明らかにするすべもない。

室町時代の末期までには、春日市内には春日、須玖、

小倉、白水の四カ村落が成立していたが、これらの村々は、博多の聖福寺、承天寺、宇美八幡、住吉宮などに細分化されて収奪されていたようである。

(7) 江戸時代

黒田藩の江戸時代、春日は朝倉郡三奈木黒田氏の知行地となり、寛永一五年（一六三八）御旗組屋敷が福岡から移転して幟（昇）町の地名が生まれ、宝永五年（一七〇八）には下白水、上白水は給地（知行地）としない藩の直轄地に指定された。

藩は財政確立のため農民を督励して耕地面積の拡大、農産物の増収に努めたが、市域にはその立地条件を生かして、白水大池をはじめ約六〇に達する溜池群が、庄屋と農民の血と汗によって構築され、現在みられるような山紫水明の景観がづくりあげられたのである。

(8)

石高の推移 (単位石)

村別	時代	天正年間	慶長年間	天保年間
春日	口	1039.0	942.1	1289.1
小倉		391.0	631.0	792.8
須玖		656.1	1165.9	1378.3
白水		1287.5	1248.4	1601.1
計		3373.7	3987.4	5062.5

田畑面積の推移 (単位町)

村別	時代	天正年間			明治5年		
		田	畑	計	田	畑	計
春日	日	69	23	93	80	23	103
小倉		41	4	45	55	14	69
須玖		54	18	72	92	23	115
白水		94	29	123	103	25	128
計		258	74	333	330	85	415

白水昇「筑紫の歴史と農業」から

明治時代以降
明治維新によって行政区画の変更があり、明治六年(一八七三)には、旧筑前国が福岡県、旧那珂郡と席田郡が第一三大区となり、上白水、五郎丸、松木、中原で第四小区、下白水、須玖、横手、井尻で第一〇小区、春日、小倉、井相田を第一一小区とした。
明治九年(一八七六)には席田、那珂、御笠郡を第八大区に変更し、明治十一年には九区の調所を廃止して郡役所と改めるなど、朝令暮改がつづいたが、明治二十二年(一八八九)に現在の市域と同じく春日、小倉、須玖、上白水、下白水の五カ村が合併して春日村

戸数の推移

	明治5 (1872)	明治22 (1889)	昭和45 (1970)
春日	78	81	424
小倉	74	71	531
須玖	114	129	716
上白水	57	57	180
下白水	73	78	586
計	396	416	2437

前掲書から

明治6年(1873)の行政区画



凡例

- 福岡県(筑前国)
- 第13大区(那珂郡)
- 第4小区
- 第10小区
- 第11小区

となった。
藩政時代に培われた農業基盤は、明治になって開花し、福岡市周辺の農村は水田二毛作と牛馬耕技術によって全国的な先進地となり、住民のほとんどが農業に従事する純農村であった。
しかし、大正時代末期の九州鉄道(現西鉄大牟田線)の開通、春日原の行楽地開発にはじまり、住宅地の開発は地域の東北部から西南部と全域に波及した。

四、村落（ムラ）のたたずまい

大正時代までの春日市は、大字（江戸時代の村）が春日、須玖、小倉、上白水、下白水の五つで、明治二十二年（一八八九）の合併で、当時の面積の最も大きかった春日村の名称をつけることとなった。

これらの大字は、密居（集居）村落を形成し、互に肩を寄せあうようにかたまり、村落をいくつかの組や小組に分けて結束していたが、本村からやや離れて枝村をもつていた。

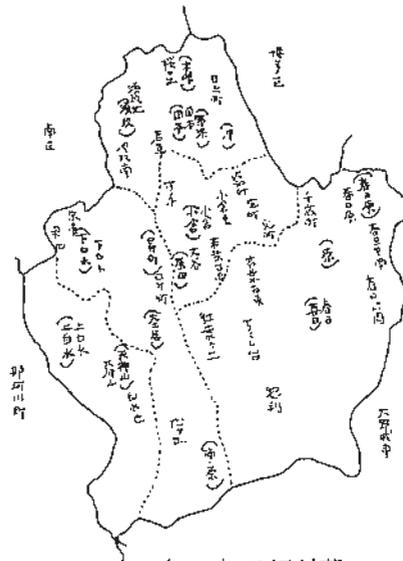
現在の春日市の行政地区と旧大字、村落の関係を表示すると次のとおりである。

旧村落と現在地区の関連表

大字	旧村落	戸数	現在地区名
春日	本村	82 (4組)	春日、惣利、若葉台東、ちくし台、紅葉ヶ丘、春日公園
	春日原	8	千袋町、春日原、春日原南
須玖	本村	57 (3組)	須玖北、須玖南
	岡野本 本添 沖	10 5 7	岡本、日ノ出町、若草
	木時	13	桜ヶ丘
小倉	本村	53 (4組)	小倉、小倉東、大和町、虫町、竹ヶ本、光町
	原田	8	大谷、若葉台西
上白水	本村	56 (4組)	上白水
	天神山	8	天神山、白水池
下白水	本村	41 (5組)	下白水、泉東、泉西
	昇町 火土居	13 7	昇町
	浦ノ原	7	松ヶ丘

(註) 1. 組数、戸数は聴取りによる大正末期のもの
2. 小字名、地番を照合したものではなく、おむねの位置によった。

大正末期の村落のたたずまい（住居、公共施設、自然景観など）を古老の記憶を辿って図示したものが別図の通りである。



() は旧村落
----- 旧大字界

1、むかしからの名字（姓氏）

本村は、おそくとも室町時代までには明らかに村落の形態を整えていたものと思われ、天正年間の村高差出帳には、旧大字名としてあげられている。

したがって、本村の住人は地付き（地下人・ジゴロ）の者が多く、同一の名字（姓）を名乗ることが多く、別表に示すように、大正末期の三七五戸のうち五戸以上の同姓を名乗る家が二五八戸（六九%）に達している。

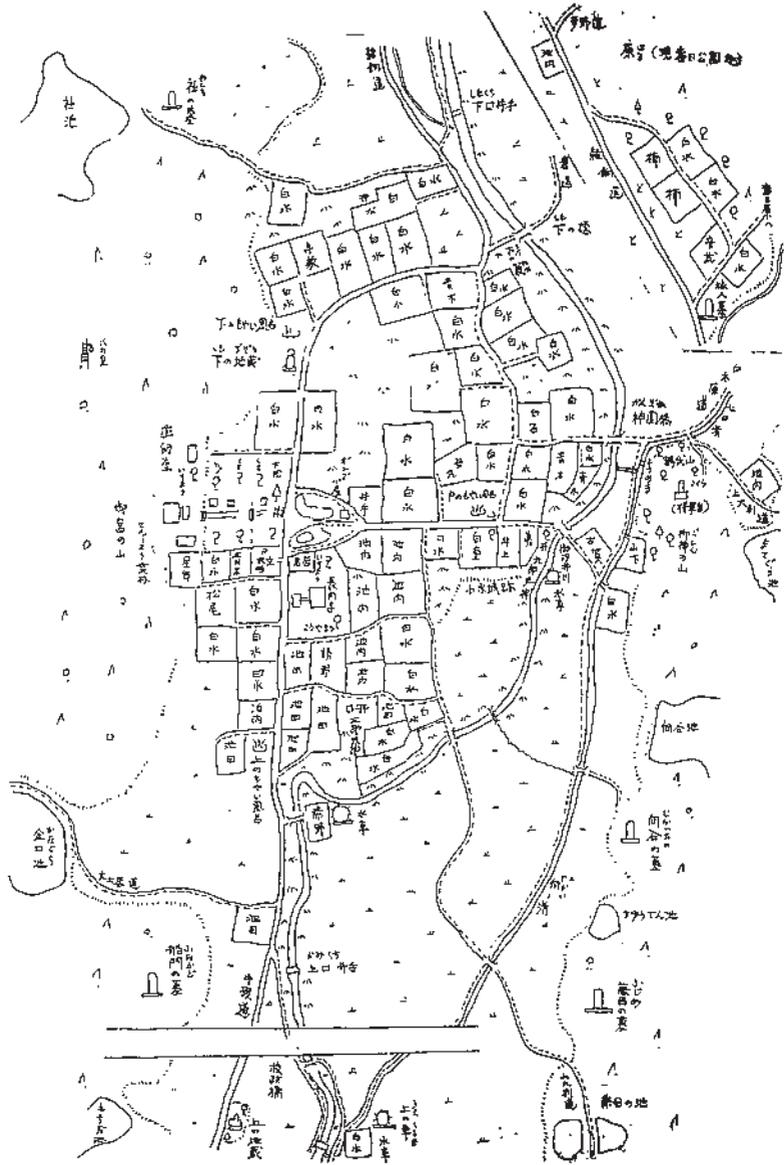
これに対して、枝村は本村よりおくれで村落を形成しおそらく江戸時代以降に移転してきたものと思われ、岡本鼻町、原田以外の枝村には同姓者は少ない。

むかしから多かった地元の名字（みょうじ、姓氏）

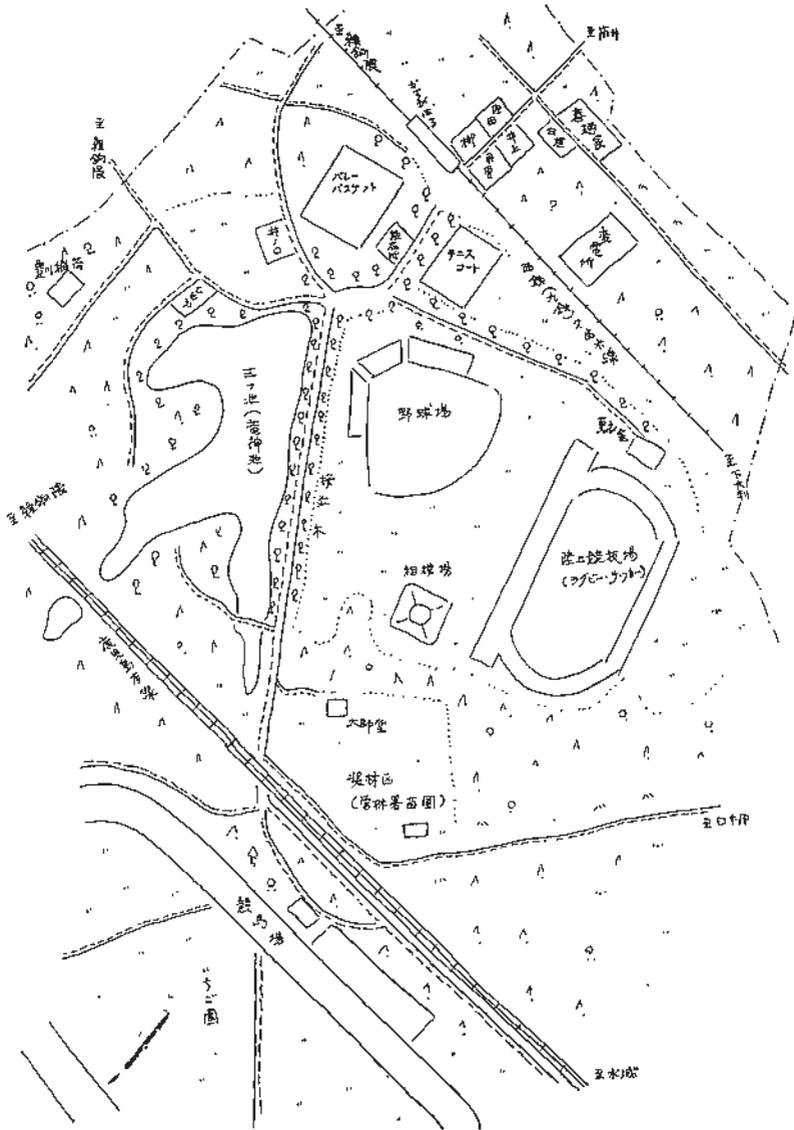
村落 姓氏	春日		須 秋				小 倉		上白水		下 白 水			計	
	存 日	存 日	須 秋	岡 本	野 添	本 村	小 倉	原 田	上 白 水	大 神 山	下 白 水	外 町	大 石 居		船 の 原
白 水	42						8	2			1			53	
松 尾	1						12	1			7	1		23	
竹 末			12			2					1	1		16	
築 田									2		10	1		13	
箱 永							12							12	
西 村							11				1			12	
水 田								5				5		10	
藤 田	1		3				1				5			10	
池 内	9													9	
池 田	7						1							8	
井 上	1				2						3		2	8	
井 糸									7		1			8	
金 堂									7	1				8	
河 野									7	1				8	
谷 村									8					8	
八 宮									7	1				8	
高 田			7				1							8	
高 野			1					3		1		2		7	
岩 村				6	1									7	
藤 野	2								5					7	
鬼 倉														5	
森 山										2		2	1	5	
高 橋	1		2				1	1						5	
その他	15	8	27	4	2	9	3	13	11	3	12	1	4	5	117
合 計	85	8	57	10	5	13	9	53	8	56	8	41	13	7	375

(註) 1、本表は大正時代末の状況を古老からの聴取りによつて作成した。2、登載の姓は同姓5戸未満の姓の戸数合計である。3、その他は同姓5戸未満の姓の戸数合計である。

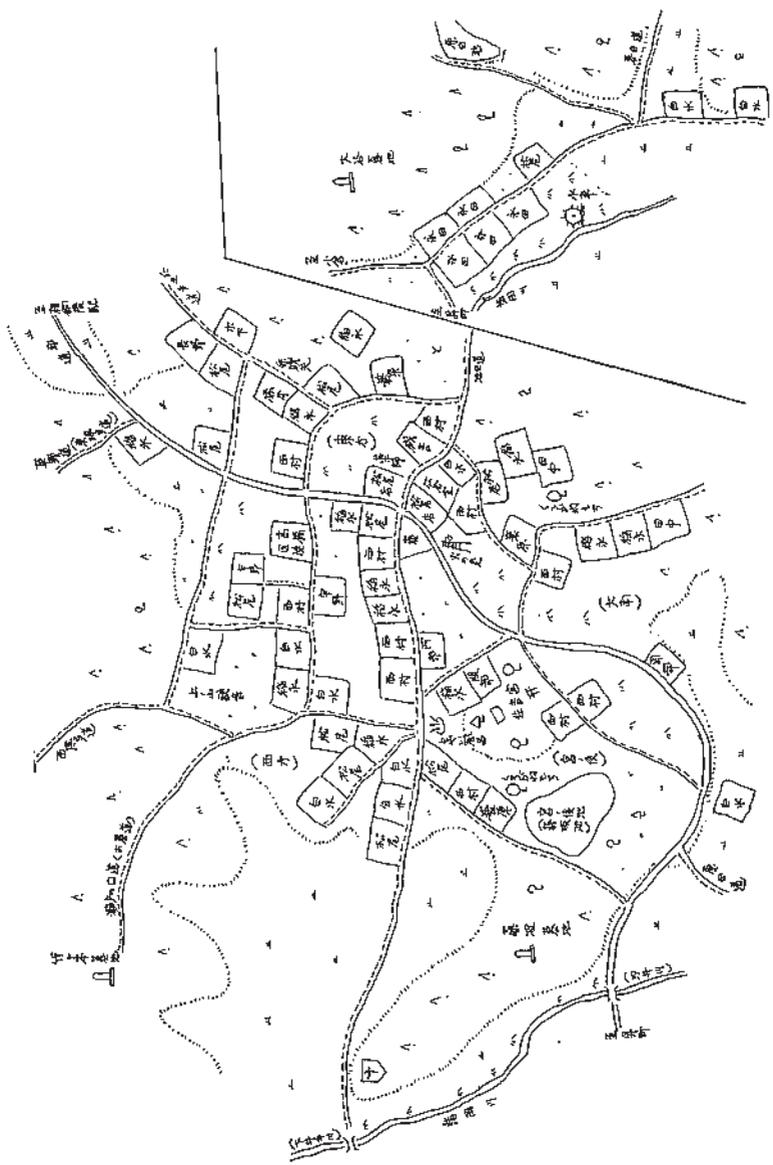
大正末期の春日村落要図



昭和10年ころの春日原要図

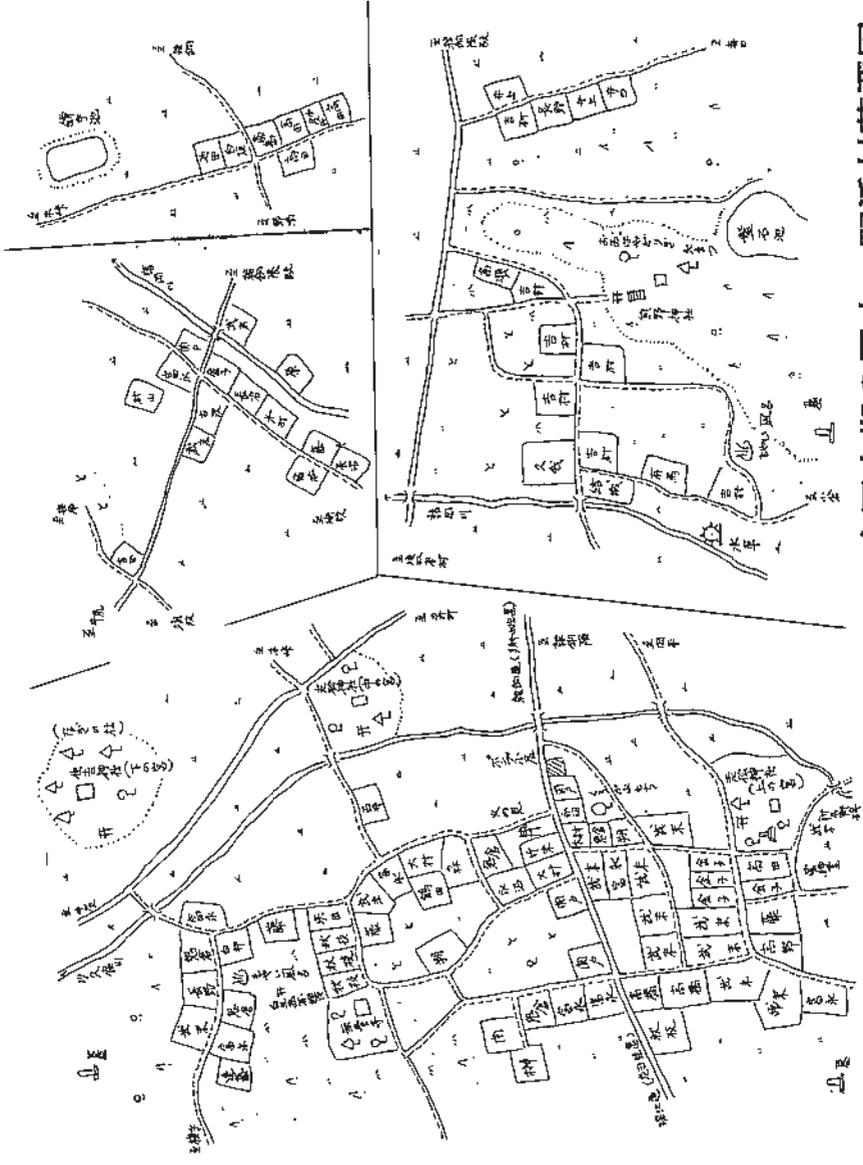


大正末期の原田村落要図



大正末期の小倉村落要図

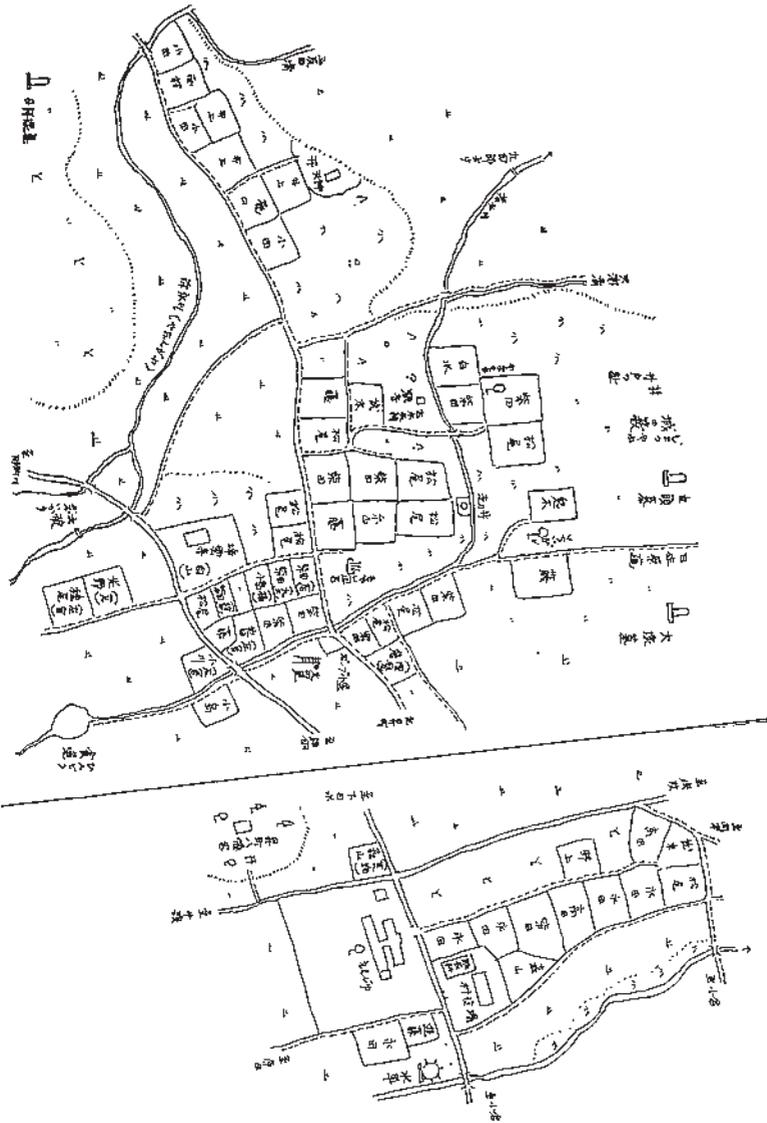
大正末期の須玖村落要図 大正末期の木峠村落要図 大正末期の沖村落要図



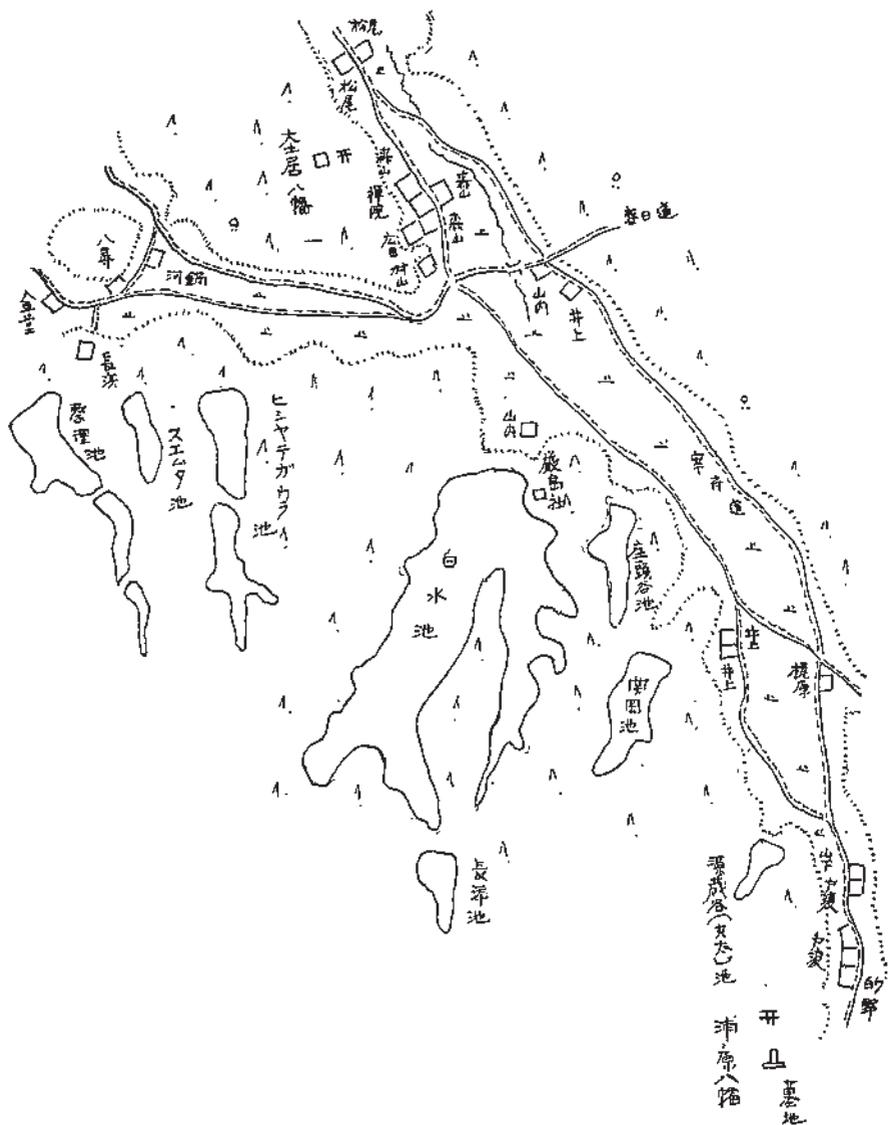
大正末期の岡本・野添村落要図

大正末期の下白水村落要図

大正末期の昇町村落要図



大正末期の天神山・大土居・浦ノ原村落要図



2、自然景観の変貌

太宰府に近い旧筑紫郡出身者は、宝満山頂の巨岩と天拝山頂の巨松は誰でも知っている。

このため思い切り決断することを「清水の舞台から降りる」と言わずに「宝満山から後ろ飛び」と言い、天拝山の松を眺めては、配所の月を眺めた菅原道真の心境を偲んだものである。

春日市内の小学校の遠足は、釣垂深谷（筑紫耶馬溪）、観音山、白水池、春日原、天が岳（牛頸下の滝）で、子供たちの遊び場は各村落の氏神の境内、溜池、井堰での水あすび、木登りと果物ちぎり、山野草の採取などであった。

このような自然景観と遊び場が人々に郷土愛と友情を育むものであるが、大正時代以降、失われた景観や遊び場をあげておこう。

(1) 巨木と樹林

- | | |
|---------|-----------|
| 春日神社の大松 | 岡本熊野神社の大松 |
| 小倉伯玄社の森 | 春日原桜並木 |
| 春日鶴我山 | 昇町八幡の森 |
| 日押塚の森 | |
- なお、現在春日市が文化財、保存木として指定してい

るものは次のとおりである。

文化財指定

- | | | | | | | |
|-------|------|-----|-----|-----|------|-----|
| 1. オエ | ハジュウ | ドリギ | 熊春日 | 野春日 | 神小神社 | 社学社 |
| 2. エセ | オンリ | ウ | 春日 | 春日 | 春日 | 神社 |
| 3. セ | 春日 | | 春日 | 春日 | 春日 | 神社 |
| 4. ナ | ナ | | 住 | 住 | 住 | 神社 |
| 5. ナ | ナ | | | | | 神社 |

保存木指定

- | | | | | | | |
|------|---|---|---|---|---|---|
| 1. ク | ス | 上 | 水 | 河 | 鍋 | 氏 |
| 2. ヤ | モ | 下 | 水 | 柴 | 田 | 氏 |
| 3. イ | チ | 下 | 水 | 鬼 | 木 | 氏 |
| 4. コ | イ | 春 | 日 | 長 | 円 | 寺 |
| 5. イ | チ | 春 | 日 | 長 | 原 | 氏 |
| 6. ク | ロ | 小 | 倉 | 長 | 中 | 氏 |
| 7. ク | ス | 小 | 倉 | 長 | 中 | 氏 |
| 8. ク | ス | 春 | 日 | 長 | 中 | 氏 |
| 9. ク | ロ | 須 | 須 | 長 | 中 | 氏 |

(2)

溜池と水遊び場

春日市内には大正時代に六十一の溜池があった。

これらの溜池はすべて灌漑用として築造されたもので、自然の湖ではない。したがって、その修築や管理には村人たちの多くの犠牲がはらわれてきた。

しかしながら、反面では松林のなかに点在する溜池群は山紫水明の美しい景色をつくり出し、かんがい期が終ると、池を干してコイやフナを獲り、夏は子供たちが泳いだり魚釣りを楽しむなど多大の恩恵を与えた。

大字	現在地区	名称	存続・廃止
下白水	昇町	金塚上池 金塚中池 金塚下池	埋立、宅地 〃 〃
小倉	大谷	小池 どんぼう池	〃 埋立、学校
〃	〃	原田上池	〃
〃	〃	原田下池	〃
〃	〃	雪ヶ浦池	〃
〃	若葉台	地藏子上池 地藏子下池	〃 〃
〃	〃	藤波(宮ノ後)池	〃
〃	小倉	(不明)	〃
〃	〃	きわどの池	存続
須玖	岡本	上散田池	〃
〃	〃	盤石池	〃
〃	〃	袖木池(ひし池)	埋立、基地
〃	〃	鎌手池	〃

溜池のほかの水遊びの場は、河川や用水路(溝)に設置された井堰(イデ)であり、ここでは子供たちの水泳、主婦たちの洗濯、牛、馬洗いなどが行われ、各用水路溝は魚取りの場であった。春日市内の井堰は、牛頸川の石

井手以外はいずれも松材や粗梁ソウゲを使用した簡易堰であったが、夏の洪水の度毎に流失したり、損傷したりするで、村民は毎年かんがい期の前に補修せねばならずその労苦は大変なものであった。

春日牛頸川の石井手は、明治年間に石造りに改築されたが、この石材は近くにあった古墳の石室の石を使用したという。

春日市内にあった井堰(イデ)と用水路(溝)の主なものは次のとおり

春日 日 牛頸川井堰

主な溝

須玖

諸岡川の井堰

川久保川の井堰

へチゴ(境)川井堰

小倉

諸岡川の井堰

沖(馬入)川井堰

上白水

用水路にある井堰

溝

下白水

用水路にある井堰

溝

用水路(溝)はすべて素掘りで、一部は石垣で補強したところもあったが、コンクリート張りはなかったので、

雑草が茂ると通水が停滞するので、かんがい期前には公役でミゾサライが数日行われた。

藁掘り溝は漏水があつて、水の節約上は不利のようと思われるが、各溝はつとめて山裾や樹林の裾をめぐるように設置され、樹林からの湧水を有効に利用する配慮がなされていた。

(3) 三辻(ミツガノ、ミツガナ)と竹藪(タケヤネ)

旧村落の大正時代復原図を、古老からの聞き取りで作製してみたが、村落内道路の交叉点は、ほとんどT字形の三辻(三叉路、ミツカノ、ミツガナ)となつており、たまたま四辻の十字路があつてもそれは明治以降の新道の新設によるものであつた。

春日村落は、村落内を新道が貫通することがなかつたので、十字路は皆無で、すべてミツガノである。

このミツガノ発生の理由は、人為的なものか地理的条件によるものかはわからないが、春日の場合には、主な三叉路には竹藪(タケヤネ)があつたり、巨木があつたり、モヤイ風呂があつたり、盃状穴石があつたりするので、それなりに意味があつたものと思われる。

竹藪(タケヤネ)は、村落内の旧家の屋敷内と川土手にあつて、日常の農具、生活用具の材料を採取

するとともに、屋敷内の藪は地震のとき地割れがないし、川藪(カワヤネ)は洪水のとき決潰を防ぐものとされたが、近年の都市化に伴い蚊の発生が多いとか、痴漢が出没するとかの理由でほとんど消滅している。

竹藪の消滅とともに、竹塀も消滅して、ブロック塀に代つた。竹塀は竹の生垣ではなく、松の柱を等間隔に挿し、笹竹を結びつけた簀の子垣で、毎年正月前には笹竹を替えて新春を迎えた。

村落内は樹木や竹藪が多いので、夏季は繁茂して道路の見通しが悪く、通行の障害となるので、夏籠が終ると、公役で道路にはみ出した枝を切払つた。これを「当払イ」といった。

同様に、田畑に樹林が覆うと作物の生育がわるくなるので、春日では「田畑八間」といい、農地から約十五メートル以内には植林をしないという不文律があつた。

村落外の村境に近い三叉路には、高さ一メートル二〇センチ角くらいの花崗岩の道標(ミチシルベ)が建っている。「春日」以外の村落には庚申塔があるが、「春日」には庚申塔は一基もなく、また春日神社の氏子は、子供の名前に「彦」という字をつけ

ない習俗がある。これは大昔、彦山権現の山伏が春日神社で狼籍をはたらいたので、それ以後、春日では「彦」や「申」を忌むようになったといわれるが、詳らかではない。

五、村落共同体

大正時代までは、各村落は共同体の名残りを残している、生産活動も生活を単位として行われてはいるが、家と家はさまざまの形（親族、近隣、信仰集団、組合など）で結びあつていて、相互に助けあいながら暮らしていた。

1 相互扶助活動

道路、橋、溜池、溝、入会山などの村落全体の共有物の管理、運営、築造に要する労働力は、どの村落でも公役という出役労働で実施してきたが、病気などで出役できない家は、労賃に見合う金額が定められていて清算していた。

しかし、戦後になつて兼業農家や転入の非農家が多く

なると、公役ができなくなり、村落が人を雇つて昔の公役に相当する仕事をするようになりつつある。

神社や寺院の信仰行事やその運営、管理は氏子、信徒の総代の合議によつて、氏子信徒の経済的、労力的奉仕という形態をとつた。

村落内の災害予防、通報は、村落で定めた担当者が順番であたるのが通常であつたが、今では市町村公共団体の仕事となつている。

「雨乞い」「虫送り」などの農事の祈願、祭礼は、村落全員が打揃つて実施するが、その計画は村落の年齢階層によつてきめられた。

以下「生活共同活動」と「生産共同施設」に分けて相互扶助の実態をみよう。

(1) 生活共同活動

○モヤイ風呂―最寄りの家々が順番を定めて掃除や釜焚きを担当していたが、各戸毎に浴場が新設されるようになって、昭和の初めごろには消滅した。
(上白水)にはモヤイ風呂がなかったが、その理由はわからない。

○共同井戸―泉が生活に密接な関係のあることは、多くの村落が山麓の湧水を中心に成立、発展してきたことでわかる。

ひとつの泉を中心に人々が集って生活共同体を形成している例は（下白水）の「走り井」（上白水）の「生水」が好例で、白水という地名、姓氏の起源も、泉という字を分解して呼んだものと思われる。

春日市の地質は、花崗岩で、いたるところ良質の地下水があるので、農家毎に井戸を掘り飲用水にあて、牛頸川、諸岡川その他の用水路には各所に洗場があり、衣類、野菜、農具、牛馬を洗っていた。

○共同墓地

大正末期の聞き取りによる戸数は三七五戸で、墓地の数は三一を数えたので、一墓地当り平均十二戸くらいの共同墓地ということになる。

共同墓地は、近隣のいくつかの姓の家々が埋葬場所を共にしているだけで、墓地の管理に特別の定めなどはなかった。無縁墓は、小倉、上白水、春日にあるが、共同墓地の一隅に葬ることもあった。

○火の見ヤグラとポンプ小屋

むかしの村落には、ワラ屋根、薪小屋、ワラコズミなどの燃えやすいものが多いので、火災には特別の注意を払い、江戸時代には煙管のくわえ煙草は禁じられていた。

各村落には火の見櫓（ヒノミ）があり、半鐘を打

つ担当者が定められ、火事の遠近や緊急度によって打ち方があり、連打（早鐘）は村落内などの至近距離、三つ鐘は消防団の出動の範囲を示し、一つ鐘は遠隔地や鎮火出動の必要のないことを示した。



火の見ヤグラ

○水車小屋（クルマ）

ポンプ小屋には、大正時代まで手押ポンプとホース、手カギ、提灯などの火災道具が収納されていた。

春日市内の水車小屋は牛頸川と諸岡川に七カ所あって、主として米搗きをしていたが、これは共同施設ではなくて、個人営業であった。

水車のことを村民はクルマと呼び、諸岡川の一部に水車があるので、これをクルマ川と呼ぶ人もあった。

生活共同施設一覽表

大字	春日	須玖	小倉	上白水	下白水	計
モヤイ風呂	3	5	2		1	11
モヤイ井戸					1	1
墓 地	5	8	4	9	5	31
火の見ヤグラ	1	1	1	1	1	5
ポンプ小屋	1	1	1	1	1	5
ア コ ヤ		1				1
水 車	3	2	1		1	7
公 会 堂 (集会所)		1	1		1	3
夜 学 所				1		1
若 者 宿	1					1
分 教 場	1					1

(註) 1. アコヤとは屍棺運び台のこと
2. 春日の若者宿は神社の御供屋
堂

若者宿という名称の家は見当らないが、春日神社の中の段に「御供宿」または「御供堂」と呼ばれる家があり、祭礼の準備などに使用されていたが、大正時代には「青年クラブ」と呼んで若者の集會、宿泊などに使われていた。

○集会所―村民が會合する場所として、漁村や山村には番屋とかタバコ屋とか呼ばれる家があり、一般農村では神社の拜殿、寺の本堂、庄屋の家などが使用された。
上白水と小倉では「夜学所」があつて、兵隊検査前の青年の教育の場があり、後には公会堂、集會所として使用された。下白水、須玖にも公会堂があつたが、春日では小学校の分教場の一部が使用されていた。

○冠婚葬祭―村落内部の一族(昔から同姓で親戚ツキアイをしている家々)や組合(村落内の組織)の人々が集り、男は行事の準備、後始末などの一切を仕切り、婦人は調理、お膳サライなどの裏方の役割を果すので、当事者の家族は、客の応待に専念することになる。

死亡の際の通知の使者は必ず二人で同行し、墓掘りの順番は「地取帳」に記載され、年内に二度も墓掘りをするとはなかつた。

○その他―全国各地に見られる産小屋(別棟の出産所)、茶堂(遍路の接待所)、舞台(歌舞伎、能)などは春日市には見られないが、春日原の太師堂は「接待日」を定めて参詣人をもてなし、各村落は村芝居を催すときは、仮設の小屋掛けをして行った。

(2) 生産共同施設
① 手間替、催合、加勢

農家の生産活動は、家を単位に家族労働力を主として行われるが、田植え、稲刈りなどの農繁期、家の増改築、屋根葺きなど多数の人手を要する仕事には「手間替え」「催合い」「加勢」という三つの方

法が農家の実情に依じて採用された。「手間替え」は労働力の交換で、人手に余裕のある家が、不足の家の仕事に従事し、後日、反対給付をうけることであるが、反対給付の期日などを同じ村落内では指定することはなかった。

「催合」は、共同作業、共同利用のことで、苗代の適地を共同で使用したり、田植作業を数家が共同で行ったり、主として労働能率や経済効果をあげることにねらいがあった。

「加勢」は応援、手伝いの意味で、棟上げ、屋根葺きなど短期間に完成する必要があつて多数の人手を要するときは、親戚や近隣や恩義のある人々が無償で働きにきた。

② 共有林野

春日市では、共有林野（入会山）のことを、野山、村山、秣山などと呼び、これから採取する草木は秣（牛馬の粗飼料）、馬屋肥（厩堆肥）、薪炭（タキモン、スミ）、農具材料、建築材料に使用した。

春日市内五カ村の共有林野の多くは、大野城市牛頸、那珂川町梶原にかけて、牛頸川支流の平野川、那珂川支流の梶原川の源流付近に設置されているが、このことは春日市内の溜池群は流域面積

が狭いので、前記の林野資源の獲得のほかに、水源涵養の配慮が大いにあつたものと考えられる。

したがつて、共有林野の使用については、村落内部で種々の内規（不文律）があり、須玖村落では、梶原山のタキモン採集の期間は一月二月の二カ月間で鉈と鎌は携行してもよいが、鋸を持こむことは禁じていた。このことはバイラ（小枝のタキモン）の採取はよいが、幹を切らないという森林資源の保全の配慮があつたようである。

また、「山アガリ」という言葉があるが、むかし凶作や戦乱のとき村民が周辺の林野に逃避し山芋、ワラビ、山モモ、キノコ類などの自然の資源を食料として難をしのいだことを指していた。

しかし現在では、春や秋にレクレーションで林野資源を採取することを「山アガリ」と呼ぶ古老もある。

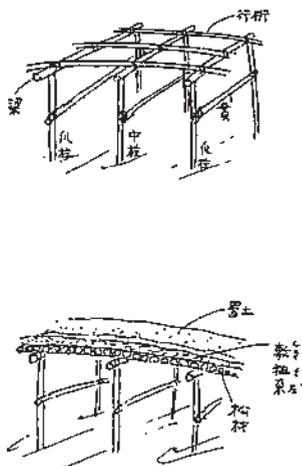
③ 道路と橋

県道、郡道などの幹線道路は、往還と呼ばれ、春日市内を通っていたのは、次の五道路で、他は村落をつなぐ村道、農道であつた。

雑餉隈——木峠——井尻

雑餉隈——岡本——須玖——老司

土橋の構造



井尻——須玖——昇町——大土居——牛頸
 雑餉隈——小倉——昇町——下白水——上白水
 雑餉隈——春日——牛頸

農道の補修は村落の公役で行ない、車方や荷馬車の車輪で凹んだ轍(ワダチ)を農繁期前に埋めるのが主な作業であった。

これらの道に架けた橋は、春日市内に、春日十三、須玖十五、小倉九、上白水二、下白水六、計四十五を数えたが、春日の牛頸川の橋以外はいずれも長さ二〜三メートルの小橋であった。

牛頸川の橋六つのうち石橋は一つで、残りはいずれも図のような構造の土橋で、毎年夏の洪水でたびたび流失したので、春日村落では橋の架替えは村落総出で大変だった。

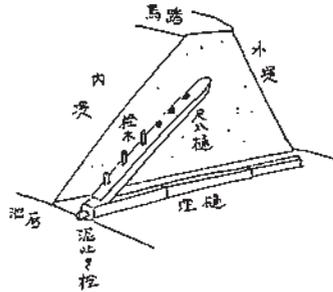
④ 溜池と水路

春日市には大正十年(一九二二)ころ約六十の溜池があったが、その築造年月や工法が明らかなものはいくつか、大部分は江戸時代に「村請新田」といって、村民の総意を庄屋が結集して藩に出願し、開発した新田は工事に従事した村民に分配するという方法をとったものと思われる。

池の堤防は土堤で、取水口は尺八樋か小型坎樋であった。土堤の内側には粘土を練って厚さ五〇〜一〇〇センチほどに塗り固め、池底をよく搗きかためて漏水を防いだ。

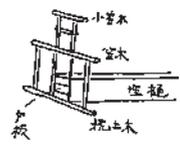
尺八樋は、図のように堤防の底の埋樋の溜池側に樋を取り付け、これに三〇〜四〇センチ間隔に孔をあけ、栗木の栓をうったもので、この孔が尺八に似ているのでこの名がある。池水を取水するときは、水面に近いところから順次栓を引き抜いて暖まった水用水路に流すのであるが、白水池や大牟田池の尺八樋は長大で熟練を要するので専門職をあてていた。古老によれば、専門職は世襲で、数分間潜水ができ、深い栓を抜くときは立竿を池中にたて、それを伝って作業をしたという堤(土手)の下に水管を通す工作物を以樋(イ

（ビ）と呼び、牛頸川の井堰や小さい溜池の取水口に使用されていた。



尺八樋の構造

お鉢（いひ）、構造

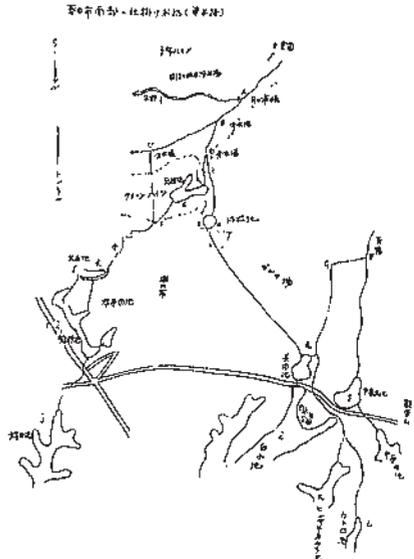


春日市の南部は丘陵が多く、池に水を貯えるための仕掛水路（導水路）や池水を水田に配る配水路には、各所にトンネルを掘り、木製の樋を掛け「持ち土手」（小倉区編P11参照）を築くなど種々の工夫がこらされていたが、これら農業技術の詳細については不明で、今後の研究調査が期待される。

2 集団組織

近世のムラは、耕地が約五十町歩、村高約五百石、戸数約五十戸が平均とされていたので、春日、須玖はかなり大きいムラで、小倉、上白水、下白水はまず普通のムラであったといえる。

ムラの共同体を維持しているものは各種の集団で、血縁集団、地縁集団、信仰集団、経済集団などが縦横に重なりあっていた。したがって各個人はそれぞれの集団の構成員であったから、現代のように個の確立とはほど遠い社会であった。



春日市南部の仕掛け水路（導水路）

ア年齢集団

(1) 子供組（小供中）

春日は小学校六年生まで、須玖、小倉は高等科二年までが組織されて活潑な活動をしたが、上白水、下白水は活発でなかった。

祭礼への参加として、「ムコオシ」「春日」「盆綱引き」「春日、須玖、小倉」「嫁ゴノ尻タタキ」「小倉」などがある。

奉仕活動として「お宮掃除」「絵馬奉納」「春日、須玖、小倉」「提灯トボシ」「殺虫灯トボシ」「須玖」「メイ虫取り」「全村」など。

集団訓練として試胆会（須玖）、功労者の墓マイリ（須玖、小倉）寺の日曜学校（春日、須玖）などが行われていた。

(2) 若者組

明治の中ごろまで、若者組といわれた年齢集団は、大正時代は青年団に改組されていた。

春日は三期組合のうち下の組、上の組、世話役が若者組に相当し、小倉では前髪ゾウ、中ドコとい、須玖では若連中と呼んだ。上白水、下白水の名称は明らかでなく、青年団の名称しか残っていない。

若者組の役割は、祭礼の奉仕としてムコオシ、オコモリ、オクンチ、お通夜などの世話をし、須玖では盆綱ないを受けもった。

村の年行事では、虫追イ（上白水）養鯉、殺虫灯トボシ、水番、夜警、救急など（小倉）を担当した。

集団訓練として、夜学（須玖、小倉、上白水）小旅行として英彦山マイリ（半参宮ともいう）

（須玖、小倉）新四国マイリ、芥屋大門マイリ（上白水）があり、小倉では力石クラベ、上白水では青年マラソンなどの競技が行われた。

若者組は親睦組織の意味が大きく、月一回の親睦寄合のほか、春秋の寄合（上白水）や近隣村との親睦（須玖）芝居、活動写真、演芸会の主催

（須玖、上白水、小倉）や近隣各地の相撲行事などへも参加した。

以上のように須玖、上白水、小倉は訓練や慰安の行事が多く、春日は祭礼行事を中心とし、下白水の活動は活潑でなかった。

(3) その他の年齢集団

若者組を卒業した二十六歳以上の男性は次のように組織されていた。

春日 二期(中老)二六〜二九歳

年寄組(三〇〜四五歳)

須玖 正義会(矯正会・二六〜三〇歳)

愛矯会(三二〜四五歳)

小倉 年長組(二六〜三〇歳)

元老(三一歳以上)

以上のように二十歳後半が村落運営の中心となり、農事、祭礼などの行事を定め、若者組を監督指導し、三十歳以上は長老的存在で紛争接衝の仲介、調停を主な任務とした。

なお、大正時代には主婦会が結成されたが、自主的に行った活動としては植林地の下草刈りや競馬の駄の水販売などがある。

娘たちの組織は「処女会」と呼んだが、特に活動はなく、小倉では「娘札打ち」(お国札、郡中札)といつて、旧那珂郡内の観音三十三カ所を二〜三日で巡礼する行事があった。

イ、信仰集団

村落を単位とする地縁集団の象徴であり、かつ守護神となる氏神(鎮守、産土神)は、大正時代氏子三三八戸、宮座二二三戸と推定され、この氏子の数がむかしから村落に在住していた地元出身者(ヂケ

の人、ヂゴロ)であるといえる。

大正時代の氏神と氏子・宮座戸数

村落	神社名	氏子数	宮座戸数	備考
春日	春日神社	74戸	74戸	
岡本	熊野神社	20	20	
須玖	老松神社	42	14	(上の宮)
〃	〃	12	12	(中の宮)
〃	住吉神社	10	8	(下の宮)
小倉	〃	20	20	
〃	八龍神社	10	10	
〃	弁財天神社	15	15	
白水	白水八幡	105	20	
昇町	昇町八幡	12	12	
大土居	大土居八幡	10	10	
浦の原	浦の原八幡	8	8	
計		338戸	223戸	

春日市における信仰形態とその数(氏神、寺院を除く)

大字区分	村落行事	特定信仰集団	不特定路傍神	個人屋敷神	計
春日	2	3	5	4	14
須玖	2	2	4	9	17
小倉	4	2	0	10	16
上白水	2	3	10	24	39
下白水	0	2	10	15	27
計	10	12	29	62	113

これらの家には、村落全体として催される信仰行事に参加し、また特定の人々が講組織や寄合いをす
る信仰集団を形成し、あるいは不特定多数の人々が

信仰する路傍の神佛に参詣し、自分の家に屋敷神を
祀るなど重層的に信仰面でつながりをもっている。

村落全体とした行われた信仰行事は、伊勢参宮講
を組織し、二〇〇三〇名くらいの参加者が一カ月く
らしいの旅をしてあと同行者として終生の親睦を深か
めた(春日、須玖、小倉)

また伊勢まで行けない人たちが英彦山マイリ(須
玖、小倉)をした。上白水、下白水は伊勢参宮はな
く、上白水では新四国マイリ、愛宕マイリをした。
特殊の行事としては、春日の乃木祭、小倉の火タキ
ゴモリ、水瓶山雨乞の行事があった。

特定信仰集団は、春日の三つの天神、須玖の大師、
岡本の庚申講、小倉の大師講、上白水の庚申講、大
師講、下白水の古水、西村天神などで、集団の家数
も固定し、定期的に行事が行われているものである。
不特定路傍神とは、地藏など路傍の小祠で、信者
も一定せず、病災除けの信仰としてまつられている
ものである。

3 その他の集団

春日市には、春日の長円寺、須玖の無量寺、下白水
の浄雲寺と三つの佛寺があり、檀徒のうちの有力年輩
者が檀徒総代となって、寺務の計画、推進を援助した。

また、下白水には信仰とは関係なく「藤しやん講」というのがあつて、純経済的な金融が行なわれていたという。

六、村落氣質（ムラカタギ）

長い年月にわたつて同じ生活環境のもとで暮してきたし、そのうえ、時代時代の支配者は、農民が結束して集団反乱を起すことを防ぐため、戸数が数十戸くらいのの村落に地域を分断したから、これらの村落にはそれぞれ特有の性格、氣質が育ち、そのうえ自分の村をよしとし、他村を非とする閉鎖的社會が形成されてきた。

これらの性格、氣質は、その村落の古老から聞くことはできないが、隣の村落のことになるとたびたび耳にすることができた。

1 団結力の強い春日

春日村落の住民は、すべて春日神社の氏子という考えがあり、他からの転入者が村落に融けこむには長い年月がかかる。

この団結は神社の祭礼を中心に代々の若者によつて承

継され、大正時代に盛大だった村落對抗の部伍リレー、消防団の提灯落し（放水競争）、競掣會（牛馬耕の田すき競技）などでは、競争心が強くて練習に励み、常に上位を占めていた。

これは、春日村落が旧那珂郡の最東南部に位置して旧御笠郡と隣接し、現大野城市、太宰府市との縁組みも多く、しかも藩政時代は三奈木黒田氏の知行地であつた關係で、旧那珂郡のなかでは特別の村落であつたことによるものと思われる。

また、春日党は「酒呑み」といわれ、わずか九十戸の村落に三戸の酒店があり、神社の祭礼には際限なく酒を振舞うなどの風習からいわれたものであろう。

2 誇り高い須玖

須玖岡本遺跡で知られる須玖は、古代から生産力の高い耕地を持つて繁栄し、すぐれた指導者、有識者を輩出したため、他の村落よりも自尊心が高いといわれ、須玖より大きい村落の春日や、かんがい用水の水源がある上下白水とはあまり仲がよいとはいわれなかつた。

しかし、須玖より下流村落の笹原、井尻の人々を「夏客」として招待したり、現在の自衛隊基地一帯に移住入植してきた鳥栖市付近出身の「基養父党」と呼ばれた人

々を受容するなど、包容力に富んでいる。

3 俠氣に富む小倉

小倉は春日丘陵内にあつて、弥生時代からの甕棺墓などの遺跡は多いが、水利の便に乏しく、平坦肥沃な水田には恵まれず、相対的には貧しい村落であつた。そのため、氏神の宮座の構成員もしばしば変るといふ状態で、村落の役員は「算用寄り」と称して集るが、実際は決算の帳尻が合わず、花札などとして遊ぶこともあつたので、「小倉のバクチ打ち」などと有難くない呼称を貰つた時期もあつた。

明治以降は雑餉隈駅（現南福岡駅）に最も近いため、都市風潮の流入も早く、いわゆる俠客肌の村民を輩出することが多い。

4 手職の多い下白水

下白水は農村でありながら、その一部の昇町（轅町）は藩政時代の御旗組の居住地といわれ、本村には大工、左官、馬喰（牛馬商）、産婆、桶屋、瓦屋、屋根フキ、鍛冶屋、水車など手職をもつ職人が十数人も居住するなど都市的色彩の強いところで、昇町のことを、「春日銀座」などと呼ぶこともあつた。

そのうえ、枝郷の昇町、大土居、浦の原を抱えていたため、村落としての結束がむつかしく、個人主義の気質が多かつたためか、諸種の村落対抗の競技などで上位を占めることが少なかつた。

5 働き者揃いの上白水

上白水は一戸当りの耕地面積は広いが、土質は必ずしも良好ではなく、その生産力が低いので、一人前の収入を得るためには人並み以上に働かねばならなかつた。

そこで「上白水に嫁に行こうか、ダラの木に登るか」という言葉が生れたほどだつた。ダラの木とは楸（幹に刺のある木）のことで、上白水に嫁に行くのはとてもつらいことを表現したもので、尊敬の念と軽べつを兼ねた諺である。下白水の子守唄に「春日カスリ飯、小倉コンコン飯しと食べ物の悪いことを語り合わせているが、上白水は「仕着せの悪いところ」と待遇の悪いことを強調しているのも面白い。

以上のように、旧五大字村落の気質を古老の話から総合して考察してみたが、博多に最も近い距離にある須玖の農民が、他村に対して包容力があつて、戦後の無秩序の都市化が最も早く進んだのに対して、農民の団結の強い春日や、働き者の多い上白水の都市化が最もおくれ、現在において秩序のある都市区画整理が進行しているのも興味深いことである。

七、歴史的伝承と地名

過去の歴史上の事実、または歴史的事実と信じられていることが、その土地の地名となつて遺つていているものがある。

われわれはその地名によつて、土地の歴史を考ふる手がかりとすることができる。

それは、むかしの人たちがこれを地名として「後世に遺すべし」とした心情のあらわれであると解したいのである。

その一例を市内における地名に見れば

地名	地区	伝承されている事項
塚原	春日	古墳
日拝塚	下白水	〃
御陵	須玖	〃
御供田	春日	春日神社の宮田か
神田	〃	春日神社。御供内の南に隣接
散給	須玖	員数外の官吏に給された土地
大土居	上白水	小水城跡
大土居	下白水	〃

地名	地区	伝承されている事項
寺屋敷	上白水	乳峰寺、威徳庵跡か
寺屋敷	小倉	
天カ浦	下白水	中世の天カ浦城は小城だが、白水氏の居城（屋形）と考えられている。
ジョウのヤネ	下白水	〃
ウトグチ	上白水	天カ浦城に係る城戸 <small>キド</small> といわれている。
立ノ口	下白水	〃
浦屋敷	須玖	繁栄した須玖の集落をあらわした地名か。
屋形町	須玖	〃
柿木屋敷	須玖	〃
奥小路	須玖	〃
中小路	須玖	〃
射場の	須玖	天カ浦城に係る地名か。
昇町	下白水	江戸時代、御旗（幟）組の移住による。
重久	下白水	白水重久の所領といわれている。
久四郎ヨケ	下白水	松尾久四郎の作った溝による。

右の地名のうち、たとえば御供田、神田、土居、寺屋敷、ウト口、馬場、新屋敷、小路、射場などの如きは、他の地方にも多くある地名で、ひとり当市にのみ限ったものではないが、それが史実であろうと否とにかかわらず、史実として信じられて今日まで地名として遺っていることに意義がある。

それはあたかも同じ姓氏（たとえば中村氏とか木村氏とか）が全国的にあつても、それぞれの中村氏は独自の歴史をもっているのと同断である。

八、農事曆（新曆による）

一		月	
下 旬	中 旬	上 旬	旬
	12 / 1		11 / 11
	1 / 21 大寒		1 / 5 小寒
	1 / 17 土用		1 / 1 正月
	1 / 15 小正月		正月 年賀 元日
	1 / 14 左義長		宇美八幡参り
	ムコ押し、嫁ノ尻タ タキ。モグラ打ち。		1 / 7 七草ガユ
			（節句初） 人日節
			ホンゲンギョウ
			1 / 10 十日エビス
			（エビス市買物）
			1 / 14
			カラシ田 中耕
			除草 施肥
			麦田 中耕
			施肥
			麦田 麦フミ
			大根、ネギ、春菊
			ホウレン草、白菜
			ミズナの収穫
			屋敷畑の除草
			エンドウ豆、トウ豆
			（ソラ豆）中耕
			年始廻り、初詣
			仕事始め（ワラ細工）
			四日から農事、平常
			に復す。
			帖綴（チヨウトジ）
			山ザラエ、タキモン
			トリ、下肥取りなど
			続く。
			夜ナベ続く
			男はワラ仕事
			女は衣類ツクライ
			雇い人（年季奉公人）
			のヒマトリ
			マヤの肥（堆肥）つく
			り
			冬菜の雪、霜カコイ

二 月

下 旬	中 旬	上 旬	旬
1 / 1		12 / 12	旧 曆
	2 / 19 雨 水	2 / 4 立 春	節
旧 曆 正 月		2 / 3 節 分	雑 節
旧正月餅搗き	豊川稲荷初午 2 / 12 丑ドン下り	2 / 1 青年会、処女会、 三期組合などの新旧 役員送迎懇親会	家 ム ラ ま まつり
麦田 中耕 施肥 土入 うねざらえ	麦田 麦踏み 追肥 中耕	麦田 中耕 施肥 土入 カラシ田 除草 根たたき	田 仕 事
桑畑、茶畑 手入れ、施肥	エンドウ豆の支柱立 て 施肥	冬野菜の収穫 白菜、ネギ、ホウレ ン草、ミズ菜、シャ クシ菜、カブ、人参 タカ菜畑 除草 施肥 トウモロコシ、エンドウ豆 除草	畑 仕 事
屋根普請 肥溜めづくり	アゼ道、水路の修理 溝サラエ	夜ナベ続く カマス、フゴ、ムシ ロ、俵編みなどのワ ワ仕事 マヤの肥(堆肥)つく り	家 の 仕 事

三 月

下 旬	中 旬	上 旬	旬
			旧曆 1 / 10
			節 3 / 6 啓蟄
			雑節 3 / 3 上巳 桃の節句
英彦山マイリ	お沙井トリ 彼岸会	3 / 18 彼岸入り	ムラまつり 家まつり 伊勢参宮 ひなまつり
	麦田 土寄せ うねぎらえ	カラシ田 除草 根たたき 追肥	麦田 麦踏み 中耕 施肥 土入 ウネさらえ
大根播種	苗床(温床) リュウキュウ芋(トウ芋) 伏こみ ナス、ポウフラ(カボチャ) キュウリ、コシヨウ 温床播種	桑畑 整枝 施肥	畑仕事 苗木(温床)つくり (堆肥、マヤの肥 踏みこみ) 屋敷畑の除草 施肥 春ソバ 種蒔き
備	墓掃除、お寺、墓ま いり	引き締、小鞍の下ビ ラなど農具の手当、 修理	家の仕事 ヒナ飾り、菱餅掲ぎ 節句アルキ 下肥取り続く マヤの肥(堆肥)つく り

四 月

下 旬	中 旬	上 旬	旬
3 / 1		2 / 12	旧 曆
穀雨 4 / 20		清明 4 / 5	節
	4 / 17 土用		雑 節
氏神やお社で 春ゴモリ	籾栗参り 4 / 20	花まつり(灌佛会) 4 / 8	家 ム ラ ま まつり
苗代田水マアリ 荒掻キ 代掻キ 苗床ツクリ	種籾池ツケ 種籾ゾロエ 苗代田鋤起し 元肥施肥	苗代田鋤起し 元肥施肥	田 仕 事 稲田の水配分 (白水池の水わけ)
ナス、キュウリ、コ ショウ、ボブラ(カ ボチャ) 移植	エグ芋、里芋 植付ケ ソバ畑 除草 中耕	夏野菜播種 夏大根、トウキビ、 カボチャ	畑 仕 事
給桑(桑ツミ)始まる 春蚕掃立 蚕室、用具取揃エ 蚕飼イ準備 馬のタネツケ	カツオ菜、白ギョウ サ菜、漬物ツクリ 牛馬のツクロイ	下肥取り続ク マヤの肥(堆肥)ツク り 冬カイコ取払い 甘茶ツクリ	家 の 仕 事 公役、池普請 井手修理 子供学校始まる

五 月

下 旬	中 旬	上 旬	旬
4 / 1		3 / 12	旧 曆
5 / 21 小 満		5 / 5 立 夏	節
		5 / 2 八十八夜 5 / 5 端 午 節 句	雑 節
	氏 神 様 や お 社 で オ コ モ リ	5 / 3 博 多 ド ン タ ク 節 句 祝 い	家 ム ラ ま つ り
殺 虫 灯 ト ボ シ 苗 代 田 螟 虫 ト リ	苗 代 田 干 し 施 肥 田 植 用 意 一 毛 作 田 荒 田 鋤 き 元 肥 や り	苗 代 田 種 ま き	田 仕 事
種 マ キ 畑 打 チ、ウ ネ 切 リ 元 肥 施 肥 粟 畑 ツ ク リ 春 ソ バ 収 穫	タ カ 菜、チ シ ヤ 収 穫	屋 敷 畑 除 草 エ ン ド ウ 豆、ト ウ 豆 (ソ ラ 豆)、玉 ネ ギ な ど 収 穫	畑 仕 事
春 蚕 収 穫	タ カ 菜 漬 ケ 山 菜 取 り、ワ ラ ビ、 ゼ ン マ イ、フ キ、タ ラ の 芽	お 茶 つ み、製 茶 餅 搗 節 句 ア ル キ	家 の 仕 事

六 月

下 旬	中 旬	上 旬	旬
	5 / 1		4 / 13 旧暦
	夏至 6 / 21		芒種 6 / 6 節
		6 / 11 入梅	雑節
サナボリ (田植休み)		氏神様の夏ゴモリ 各地に始まる	ムラまつり
田植終る	田植始まる 苗取り 代掻キ 手植	田植用意 元肥入レ 鋤起シ 荒ガキ アゼヌリ アゼ豆植え	田 仕事 麦田 裸麦刈りとり 麦扱ギ 脱穀 小麦刈りとり 麦打チ 刈取り カラシ田 刈取り カラシモ ミ、収納
ラッキョウ収穫	シン収穫	夏大根収穫 大豆、小豆 種蒔キ	畑 仕事 キュウリ、ナスなど 収穫始まる
夏蚕掃立 給桑(桑つみ)始まる ラッキョウ漬つくり		梅収穫、梅漬つくり	家の仕事 単衣に衣替え ミノ、笠、ムギワラ 帽子など雨具用意 田植用具ツクロイ

七 月

下 旬	中 旬	上 旬	旬
	6 / 1		5 / 14 旧暦
	大暑 9 / 23	小暑 7 / 7	節
丑の日 土用 7 / 25	土用 7 / 20	半夏生 5 / 2 七夕節句	雑節
このころから氏神様やお社で虫追イゴモリ始まる	7 / 15 白水八幡宮 祇園ゴモリ	笹竹飾り 虫送り、田ボメ	ムラまつり
稲田 田の草取り (ナニナオシ)	稲田 油入れ始まる	稲田 田の草取り ガンズメ打ち	田 仕事 稲田苗補植 水廻り(水番)
粟畑 中耕 除草 間引き	大豆、小豆中耕 草取り	野菜畑の草取り 野菜豆、イモガラ収 穫始まる	畑 仕事 リウキユウ芋苗 (トウ芋) 植付ケ イチブ種まき
夏の大掃除 川、池でイオ(魚)取り始まる	牛馬の飼料の朝草刈り始まる	スモモ、ハダンキョウ ウ収穫	家の仕事 井戸サラエ ビワ、山モモ収穫

八 月

下 旬	中 旬	上 旬	旬
	7 / 16		6 / 15 旧暦
処暑 8 / 23		立秋 8 / 7	節
	盆会 8 / 13	二の丑 土用 8 / 6	8 / 1 八朔 雑節
	初盆会 盆ツナ引キ		ムラまつり
稲田 田の草取り (上り草) 稲田 田干シ	芯枯れ抜き 稲田 田の草取り (ガンズメ押し)	田のクロ切り 稲田 田の草取り (八反押し)	田 仕 事
秋ソバ種蒔き ウリ、ササゲ豆収穫	ボウブラ(カボチャ) トウキビ(トウモロコシ) 収穫	桑畑手入れ 草取り シ	畑 仕 事 粟などの畑作除草、 中耕 リュウキュウ芋 (トウ芋)の蔓カエ
小学校夏休み終る	り マヤの肥(堆肥)つく	墓掃除 お寺、お墓まいり	家 の 仕 事 小学校夏休みに入る 夏蚕収穫 盆用意 お中元買物 諸式の支払い

九 月

下 旬	中 旬	上 旬	旬
	8 / 1		7 / 17 旧暦
	秋分 9 / 23	白露 9 / 8	節
社日 9 / 26	彼岸入り 9 / 20	重陽 9 / 9 節句	二百十日 9 / 1 雑節
お汐井トリ	彼岸会 白水八幡宮例祭 9 / 19	老松神社例祭 9 / 15	熊堂神社大祭 9 / 9 ムラまつり
カラシナ 苗圃つくり 播種	稲田 ヒエ抜き	田のクロ切り アゼ草取り	稲田穂パラミ肥 施肥 田仕事
秋ソバ畑 除草 中耕	イチブ収穫 皮むき イチブ引き	秋蒔野菜類 白菜、大根、カブ、 ネギ、玉ネギ 播種	野菜畑除草 畑仕事
味噌、醤油仕こみ	墓掃除 お寺、墓まいり	味噌、醤油、コウジ つくり	秋番掃立て 給桑(桑つみ)始まる 家の仕事

十 月

下 旬	中 旬	上 旬	旬
	9 / 1	8 / 17	旧 曆
霜降 10 / 23		寒露 10 / 8	節
	土用 10 / 20		雑 節
丑ドン上り(出丑) 10 / 29	昇町八幡宮例祭 10 / 18	春日神社例祭 10 / 9	家 ム ラ ま まつり
稲刈り干し 稲コギ 稲コズミ 収 納	刈始まる 稲田 早稲田から種	稲田 水落し 鳥オドシ(カガシ) 立て、鳴子引キ	田 仕 事
粟收穫 脱穀	収穫 ウ芋、里芋、ゴボウ	シヤクシ菜、白菜定植	畑 仕 事
ナバ(茸)採り	牛馬のツクロイ	柿、梨、イチジク、 ギンナン收穫	家 の 仕 事
		池、井手干し、イオ (魚)取り 秋蚕收穫 学校の運動会	

十 一 月

下 旬	中 旬	上 旬	旬
	10 / 1	9 / 19	旧曆
小雪 10 / 22		立冬 10 / 7	節
			雑節
新嘗祭 11 / 23	七五三の祝 11 / 15	天神様など各地で秋ゴモリ	ムラまつり
稲田 晩稲 稲刈り 刈り干シ 稲コヅミ 稲コギ 収納 鎌アゲ(秋アガリ)	冬田、カラシ田準備 稲株切り 鋤起し クレ打ち 麦田づくり ウチタネ 元肥施肥 裸麦種蒔き 小麦種蒔き カラシ田づくり ウネタテ 元肥施肥 カラシ苗、苗クバリ 植付ケ		田 仕 事
大根収穫始まる	玉ネギ 定植	タカ菜 定植	畑 仕 事
ハゼの実収穫	米搗き(夜ナベ) 始まる	秋ソバ収穫 干し柿づくり	家 の 仕 事

十二月

下 旬	中 旬	上 旬	旬
	11 / 1	10 / 20	旧曆
	冬至 12 / 22	大雪 12 / 7	節
大晦日			雑節
絵馬奉納 子供中			家ムラまつり
	カラシ苗の補植	カラシ苗 定植終る	田 仕 事
	漬物用大根収穫 大根干し 切干大根づくり (カンコロ、千切り 干シ) たくわん漬(コンコ ン漬)づくり	シヤクシ菜など冬菜 の中耕、除草、施肥	畑 仕 事
正月餅搗き 暮の大掃除 正月飾り 正月用料理づくり	年越し用意 お歳暮手配、正月用 取り揃え、諸式支払 い 雇い人(年季奉公人) ヒマトリ	冬仕度、冬カコイ 畳替え、障子貼り 炉開き、雪霜防除 マヤ(畜舎)防寒	家の 仕 事

九、農作業と農具

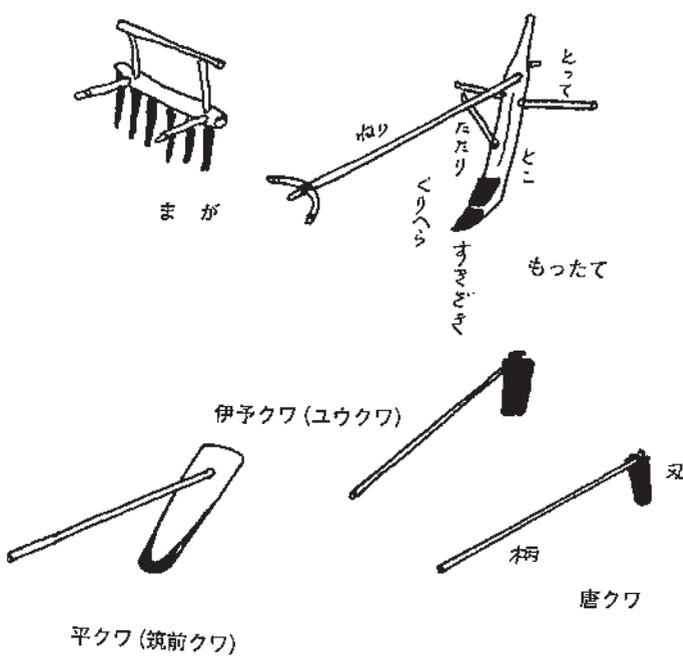
既刊の『むかしの生活誌』各編では、農作業や農具について断片的に写真や挿絵を登載してきたが、総集編の本編では、春日市内の農家の誰もが経験のある作業と、その作業に使っていた農具で現在では資料館などでしか見られないものを列挙する。

1 整地作業（土をいぢる仕事）

- 唐鍬（トウグワ） 〓 打チグワで土を掘り起したり、筋をつけたり、草取りに使ったりする。柄と鉄刃の取付け角度は九十度くらい、刃幅十二〜十五センチ程度。
- 伊予鍬（イヨグワ、チュウグワ） 〓 打ち引きグワで、溝さらい、畦塗りに使い、角度は六十度くらい刃幅は十三〜十五センチ、刃長二十〜二十五センチ程度。
- 平鍬（ヒラグワ、筑前クワ） 〓 引きグワで、タナオイ（畝溝の土を上にあげる）に使う。福岡付近独特の鍬、角度四十五度くらい。刃の長さ三十センチ以上。

○ 持立犁（モツタテ） 〓 福岡地方独特の無床犁、短床犁で、牛馬にひかせて、土をすき返えして畝をつくる。

○ 馬鍬（マガ） 〓 掘り返した土塊（クレ）を細く砕くため、鉄歯を並べたクワを牛馬にひかせる。



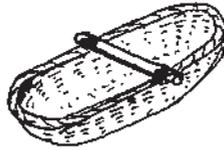
2 育成作業（作物を育てる仕事）

○ 肥桶（コエタゴ） 液体肥料（主に人糞尿）を運ぶもので、汲取桶（オオタゴ）、施肥桶（イナイタゴ）、カチニタゴ、カッチンタゴ、手小桶（テコガイ）がある。

○ 肥簀（コエシヨウケ） 土や苗、肥料などを運ぶザルで、先無シヨウケ、植シヨウケがある。



先なししょうけ



うえしょうけ

○ 田植綱と田植定規 稲苗を正条に植えるため棕侶綱（シユロヅナ）を張り、定規で植幅を定めた。

○ 雁爪（ガンヅメ） 稲田の除草、中耕（ナカウチ）のため水田を這いながら使ったが、大正時代から竹押し、ガラガラ（回転除草機）が導入されて、歩きながら「田の草押し」ができるようになった。

3 防除作業（鳥獣、病虫害を防ぐ）

○ 案山子（オドシ） 鳥をおどすために人形や鳥の羽を立て、モグラにはバネつきの罠を使う。

○ 殺虫灯（誘蛾灯） 苗代にすえて、螟蛾を誘殺しウンカは竹ボウキで払い落とし、水面に油を流して殺した。

4 収穫作業（トリイレ）

○ 刈取り 稲麦、マヤの草刈りは薄鎌、堅い茎や枝の伐採には鉞鎌（ナタガマ）、山野草には根ザライ鎌、菜種（カラシ）の茎切断には、カラシキリトウグワを使った。

○ 掘り取り 伊モ類などの掘取りには、唐クワや備中鍬（ニ又、三又）を使った。



ニ又



万力

5 調整作業（二ワ仕事）

- 稲コギ、麦コギ―木臼の胴に穂先をたたきつけたり、千歯（センバ）で扱ぎ落したりしたが、大正時代には回転脱穀機（稲コギ機械）を使った。豆類や菜種の脱穀には、扱簀（カラスクチ）を使う人もあったが、唐竿（ブリコ、ブリボウ）が普通である。
- 臼スリ―籾から玄米にすることを言い、籾摺臼（木臼、土臼）を四〜五人がかりで回わしていたが、大正期には発動機付きの籾摺機械を車に積んで籾摺業者が農家を巡回した。
- サビル（選別する）―穀類と塵埃、小石などの夾雑物をえり分けるには、竹製品の手箕（テミイ）篩（フルイ）篋（トオシ）などを両腕に抱えて操作したが、風を起す唐箕（トウミ）や傾斜面を利用する千石トオシ、万石トオシも普及した。
- 乾燥―穀類は藁（ムシロ）に拡げ、一日に数回回アセリで表裏を返して天日で乾かし、茶葉などは、素焼きのホウロク（焙焙）を炭火にかざして乾かした。

6 収納、加工作業

- 米搗き―乾燥した籾は、籾籠や籾倉へ、玄米は吠（カマギ）に詰めて貯え、精白（玄米から白米へ）は臼杵（ウスキネ）踏臼（カラウス）か、近隣の水車小屋（クルマ）で搗いて貰った。
 - 粉ひき―麦や豆をヒキ臼（石臼、摺臼）を回わして粉にして自家用に使い、また漬物、味噌醤油などもつくった。
 - 葉仕事―米ワラ、麦ワラは、肥料とする場合はそのまま使い、飼料とするにはハミ切り包丁で切断し、縄や藁をつくるにはワラスグリで揃え、杵で軟かくして使った。また蚕網杵、マブシ織、ムシロバタ、コモアミ、ナワナイ機械などを使う農家も多くなった。
- ### 7 運搬
- 担う（カタゲル）―近距離の運搬は、フゴ、モッコ、ショウケを使い、ニナイ棒（カチニ棒）の両端にぶら下げ、薪（タキモン）、草、稲束などはソガリ棒に突通してかたげた。
 - 車力（シヤリキ）―米俵などの重量物は、車力（農

8 家畜の飼養（駄マカナイと駄使イ）

用の大八車）や車力馬車に積み、四周に車地棒（シヤチ）を立てて、綱でしばって運んだ。

- 駄マカナイ 牛馬を飼うには手入用具として刷毛、櫛、駄桶、カンツキ（大型の釜）、馬盥を使い、厩肥（マヤノコエ）の整理にはフォークや万力を使った。
- 駄使イ 牛馬を装着する用具は、耕鞍（テイキ）綱類としてムナガイ、腹帯、引緒、オガケ（馬）、シリガケ（牛）を使い、口籠（イナツンパ）やワラジなどである。

牛馬に対する呼声は、セイ（右へ）、サシ（左へ）、ワア（牛、とまれ）、ドウ（馬、とまれ）、ゼッタ（牛後戻れ）、アト（馬、後戻れ）と叫んだ。叱るときは人間に対すると同様、コラとか馬鹿とか叫んだ。

十、家族の呼称

ここでは平均的な農家での呼び名をあげている。現在よりは各家によってことばづかい違いがあり、いわゆる家風の相違が大きかったようである。

(家族の呼称)

	自分のこと	本人に対して	本人を第三者として
曾祖父	オレ アタキ ジイ ジジイ ジイサン ジイチャン ジイシヤン	オオオジイサン オオオジイチャン ジイサン ジイチャン オオジイシヤン ジイシヤン	ヒイオジイサン トシヨリオジイサン オオジイサン ヒイジイサン ヒイジイ 名前を付けて 「○○ジイサン」 例えば 「弥吉ジイサンなトカ キシとんなるばって達 者なか」
		本人を第三者として	身内が本人を指して ヒイジイサン トシヨリオジイサン

また、大家族であり、隣近所にはインキョとかシンタクがあり、イチゾクとかイットウとかいわれる親類も多く個人や家と家との付き合いはきわめて密接であった。村うちでは同姓が多いこともあって、ムカイのジイサン、ウラのオイシヤン、誰だれのカカサンなどと苗字よりも名前で呼び合った。

祖 父	曾 祖 母	自分のこと	本人に対して	本人を第三者として	身内が本人を指して
オレ アタキ ジイサン ジイ ジジイ ジイシヤン オジイサン(孫に対して) オジイシヤン() オジイシヤン() ジイチャン	ババサン ババサン ババア ババア ババシヤン	オレ アタキ アタシ ババア ババサン ババシヤン	ババサン ババシヤン オオババサン オオババシヤン オツカババシヤン チツカババシヤン (オツカチツカは曾祖母・祖母と入れかわることがある)	ヒイババサン トシヨリババサン ヒイババシヤン トシヨリババシヤン オツカババサン	ヒイババアサン ヒイババサン トシヨリババサン トシヨリババアサン ヒイババシヤン トシヨリババシヤン オツカババシヤン
ジイサン ジイシヤン ジイチャン オジイサン オジイシヤン オジイチャン			ジイサン ジイシヤン オジイサン オジイチャン ジイチャン	ジイサン ジイチャン ジジイ ジイ オジイサン(若嫁が) オジイチャン()	

母	父	祖母	
アタキ アタシ オツカサン オツカシヤン	オレ アタキ オトツツアン オトツツチヤン トトサン トトシヤン アシ(青年期から中年期にかけて男が目上の人に対して)	オレ アタキ アタシ ババサン ババシヤン ババサン ババシヤン バアサン ババア バアバア(幼児に対して) バアチヤン	自分のこと
オツカサン オツカシヤン カカサン カカシヤン	オトツツアン オトツツチヤン トトシヤン トトサン	ババサン ババシヤン バアチヤン チツカババサン チツカババシヤン	本人に対して
オツカサン オツカシヤン カカサン カカシヤン	オトツツアン オトツツチヤン トトシヤン トトサン オヤジイ 「いまオヤジイはおんなんな」	ババサン ババシヤン バアチヤン チツカババサン チツカババシヤン ワカババサン ワカババシヤン	本人を第三者として
オツカサン オツカシヤン カカサン カカシヤン	オトツツアン オトツツチヤン トトサン トトシヤン オヤジイ	ババサン ババシヤン チツカババサン チツカババシヤン ワカババサン ワカババシヤン	身内が本人を指して

妻	夫	
<p>アタシ アタキ ウチ (若妻が夫に)</p>	<p>オレ</p>	<p>自分のこと</p>
<p>(夫が) ヨイー オイ・コラーツ (名前を呼ばない)</p>	<p>(妻が) アータ アナタ アンタ オトツツアン トトサン ツトサン トトシヤン</p>	<p>本人に対して</p>
<p>ゴリヨン ゴリヨンサン ワカゴリヨンサン ヨメゴ 「おまいがいのヨメゴ はきじようもんぜ」 「あつちの息子がヨメ ゴよぶげな」</p>	<p>ムコドン ヨーシ (養子・入りムコ)</p>	<p>本人を第三者として</p>
<p>ヨメゴ ゴリヨン (親が) ゴリヨンサン (夫が) カカア カカザン オナゴ 「うちのオナゴどもが やかましゅうて」 カクサン</p>	<p>トトシヤン トトサン オトツツアン アタツカイント オトツツアン トトシヤン</p>	<p>身内が本人を指して (妻が) テース(亭主) ウチンガイント ウチント (ウチノヒト)</p>

兄	お ば	お じ	
オレ アンチャン	オタキ アタシ オバサン オバシヤン	オレ オタキ オイサン オイシヤン	自分のこと
アンチャン オンジョウ アンシヤン (上の兄) オツカアンチャン (下の兄) チツカアンチャン	オバサン オバシヤン	オイサン オイシヤン	本人に対して
アンチャン アンシヤン アンジョウ 「あんたがいのアンジョウはきものきれでござる」 (思いきりがよい、太腹) ムスコドン (男の子に対して)	オバサン オバシヤン	オイサン オイシヤン	本人を第三者として
アンジョウ アニキ アンチャン アトトリ(長男) ソウリョウ(長男) ナカサイ (二人兄弟の真ん中) 「やっぱあんなカサイばい」	オバ オバサン オバシヤン	オジ オイサン オイシヤン	身内が本人を指して

孫	妹	姉	弟	
	アタシ アタキ ウチ	アタシ アタキ ウチ		アタキ 自分のこと
(名前を呼ぶ)	(名前を呼ぶ)	ネエチャン ネエサン アネサン アネシヤン オツカネエチヤン チツカネエチヤン	ネエチャン ネエサン アネサン アネシヤン オツカネエチヤン チツカネエチヤン	本人に対して (名前を呼ぶ)
マゴ マゴジョウ	イモト イモトジョウ (兄弟姉妹の子どもを 総称して) コドモシ スソゴ(一番下)	アネジヨウ	ネエチャン ネエサン オネエサン オネエチヤン アネジヨウ	本人を第三者として オトトジョウ (オトウトジョウ) オトト (オトウト) テコガイモチ 「あんたがやテコガイモ チのでけたげなな」 (弟さんが生まれたそう だね) スソゴ
マゴ	イモト スソゴ(一番下)	(兄弟のいた長女)	ネエチャン ネエサン アネサン アネシヤン アトトリムスメ	身内が本人を指して オトト オトゴ テコガイモチ (テコガイ(小桶)持ち の意 魚取りの小桶も ち) スソゴ (一番下の子ども)

十一、住居

1 屋敷と付属屋

○屋敷(敷地)

農家は、田畑での作業以外はすべて屋敷内で行うのであるから、適当な広さと日あたりがよく、水はけのよいことが必須条件となる。

敷地の広さは、耕作する土地の広狭とか、家格、貧富などの違いによって異なるが、小は五―六十坪から大は四百坪ほどで、居屋(オリアヤ)の建物としては一般に二十坪から四十坪ほどであった。ただし(春日)では小作農家はほとんどなかった。

○付属屋

敷地内には、家族の居住するオリアヤのほかに、農事に必要ないろいろな建物がある。

○牛小屋 一般に納屋(ナヤ、イナヤ)を兼ねたところもあり、農作業もした。馬より牛の方が多く、オリアヤと棟つづきのところもあった(下白水、小倉、岡本)

蚕は普通イナヤで飼い、そうでないところは座敷

で飼った。そこには蚕専用のイロリが切ってあった。

○蔵 一階には穀その他の穀類を、二階には平素使用しない大切なもの(長持、来客用の蒲団などの家財道具)を置き、中二階があつて、古い普類など収めた。大きな家ではこの様な蔵が二棟も三棟もあつた。

土蔵造りで、仕上げはシツクイ壁で、幾重にも壁土を塗り、厚さが一尺以上もあつた。耐熱、耐火性や湿度などの点を考慮してあるので、品物を保存するには好都合だが、費用の点でそう簡単に幾棟も建てられるわけにはいかなかった。

○タキモン小屋 一年間の燃料とする薪は、冬期一時に用意するため多量となり、この小屋が必要となる。

○トビツ 穀物専用の倉庫で一間×二間くらいの広さで、十俵か十五俵分くらいの穀を納めておく。

○ミソ蔵 オリアヤのニワの一隅を仕切つて造つたところもある(小倉、上白水)

○灰屋(ハイヤ) 肥料にする草木灰や堆肥の置場で、一般に建物がワラ葺屋根であつた時代でも、防災上ここだけは瓦葺にしたり、壁をドロ(土)壁にした。大体七―八坪ほどの広さであつた。

○鶏小屋 晴れの日の料理にはカシワが絶対必要であつたので、ほとんどの家で鶏を飼育した。板張りや

金網で囲い、屋根は杉皮であった。

独立した小屋を建てず、縁の下などに金網を張って飼うこともあった。

○便所Ⅱオリヤ内にはなく、別棟になっていて、雨のときや夜中には不便で、子供や老人にはことに不便であつたらう。

オオキド（玄関にあたる）のオモチには、大抵、小便タゴがあり、カメが埋けてあるだけの簡単なもので中には杉の小枝が入れてあつた。

2 家相、方位

むかしから「家相」ということがやかましく言われているが、これは如何に健康で快適な生活を送りたいかを念願した結果のものであらう。

次の第一図は、家を建てるときの付属屋まで含めての配置計画図であるが、この計画に対して建主の「星マワリ」「家相」を考慮して手直ししたのが第二図である。

家相に関連して次のような言い伝えがある。

○家を建てるのは、三隣亡（サンリンボ）の日は火事を起すので避ける（全地区）

○三隣亡の日に建てる時、風も吹かんに建てよるうちに倒れる（上白水）

○東棟をつくると建て主の命とりになる（上白水）

○北棟になると災難がふりかかる（上白水）

○西日（ニシビ）は家族に災難がかかるので悪い（上白水）

○十二年目に暗剣殺が天にあがるので、何をしてもよい（上白水）

○棟アゲは大安の日を選んで行う（全地区）

3 垣根と庭木

イケガキには女竹や土壁があり、土壁が多かった。土壁は荒石の上に赤土で作り、仕上げにシツクイは使われないが、仕上げの程度はよかつた（小倉、上白水）

また、カラタチ（上白水）を植えたところもあり、柴かバンテーシ、竹製が多く、土壁は金持ちといわれる家しかないといわれた（下白水）

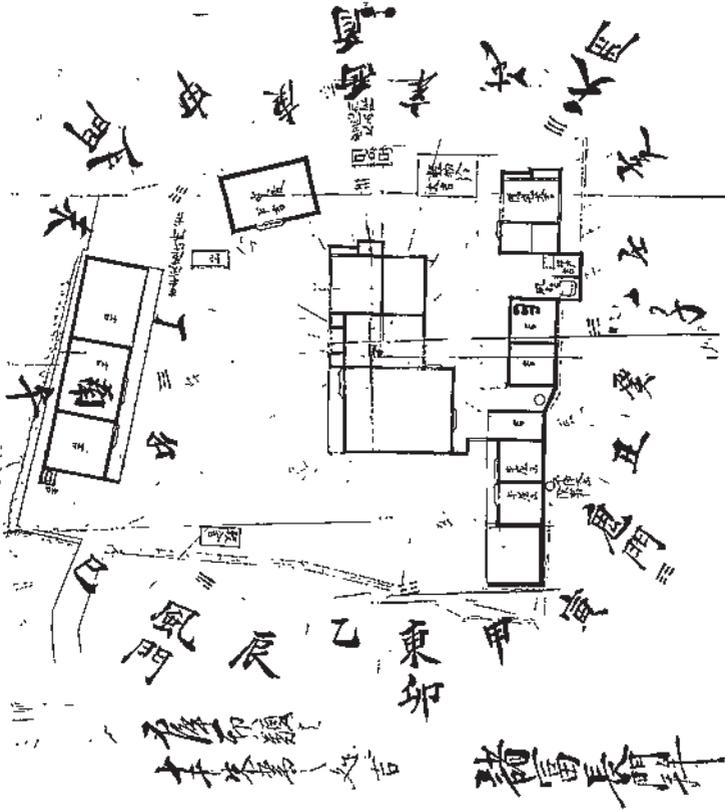
庭木としては、竹が多く、防火、防風にも役立ち、柿（トシゴ、ガンザン、ホンガキ）、グミ、ミカンなどが多

明治三十二年八月廿五號

臺東縣政府建設課

那珂郡上白米村

何錫文君住宅



第一圖

く、主に子供のトリモン（おやつ）になる果樹を植えた。あまり大きくなる木は南側には植えない。カドやオリヤの日あたりが悪くなるからである。

そのほか、便所のところには南天を植えた。「難を転ずる」といい、白い実のものは薬用として使われた。

また屋敷内に植えるのを思んだものにピワ、クチナシ（春日、小倉、上白水）藤（小倉）シユロ（小倉）椿（小倉、下白水）ヤマモモ（楊梅）（上白水）サンシヨの木（下白水）などがある。



土 壁
（上白水、谷ウメ氏宅）

4 建築のはじめに

家を建てるには先ず資金の問題、親戚縁者との相談、建築材の調達、近隣の加勢、建築時期の選定、前述の方

位、家相などの問題も忘れてはならない。

この場合、自己所有の山林に建築材を持つていると都合がいい。

山持ちの人はキコリ（山林の木材を伐る人）が山から伐木を現場に持ちこみ、柱、梁などおおざっぱに木ドリした上乾燥させる。

当時は、今日のように坪いくらという請負制度ではなく、一日いくらで大工を傭ったものである。大正末期の大工の日当は一人前の者で二円くらい、左官も同じようだが、平均大工より五十銭くらい少なかったようである。少なくて大工が一日三人くらいから普通四、五人ほどで仕事をし、大体入居できるまでには半年はかかるが、昭和の初めころで四十坪（一三二平方メートル）の平屋で千円くらいかかった。

大工は現場に乗りこむと、作業小屋を建てるが、これを「小屋入り」といい、小屋入り後は、建主一家は別棟の納屋あたりに住み、大工の三度三度の食事の世話をする。大工の仕事時間は、日の長い時季は十二時間以上にもなるから、食事も一日四回か五回にもなる。それに一日の終りの食事には二合半入りの酒徳利が出るのだから食事の世話も大変である。

建主は、納屋あたりに住んで不便な生活を送るのはで

きるだけ短い方がよいのだから、完成を待たず、壁など中塗をし、乾燥するまで仕上げ塗ができず、その間相当の日数がかかるので、さつさとヤウツリ（引越し）をする（下白水）

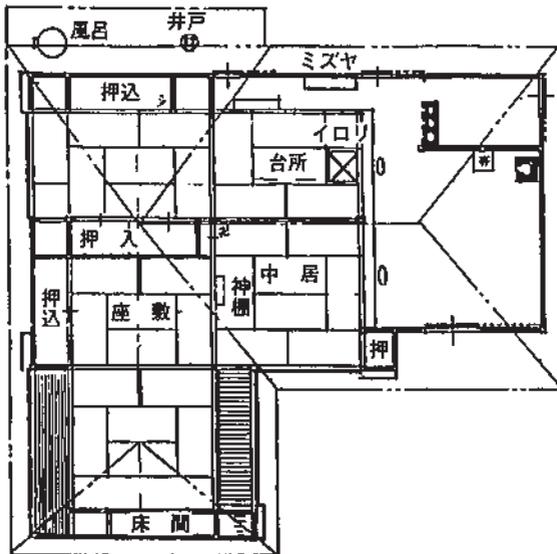
大工以外の左官、蔦職、瓦屋、石屋、屋根葺屋、畳屋などは、建主に紹介する形が一番多く、何もかも一手に引受けることはなかった。建てる時は、農繁期を避けるのは当然だが、冬は寒が強いとシックイが浮いて仕上げが悪くなるので避ける。

5 母屋（オモヤ、オリヤ）

旧筑紫郡一帯の農家は、一般に「鎌屋造り」（平面的に見て、座敷と他の部屋との配置が、昔の倉の鍵の形に似ているので、そう呼ばれている）で、始めからでなく、あとで鍵の部分である座敷を増築した場合もあったようである。



勝野氏宅母屋外観
(現在)



勝野氏宅母屋平面図

勝野綱太郎氏宅（春日）には、明治二十五年十月作成の建築図面があり、おそらくそのころ建てられたものである。この図は明治の図面と勝野氏の記憶をもとに復元したもので、現在は土間のところが中廊下と子供部屋に改築されている。

得能氏宅（岡本）も、牛小屋と別棟の水廻りが撤去され、表便所もなくなっている。

西村氏宅（小倉）も、牛小屋、外便所が撤去されている。当主は菅氏で、この家は六代目とのことだから建てられたのは、明治よりも少し前かと思われる。ただ鏝形の座敷が後で増築されたようだったが、改築のため解体され現在では調査不能となった。

○地鎮祭Ⅱ一般に「方ヨケ」といった。棟梁は招はず家族うちで行う。

普通は神主でなく、荒神ボンサン（座頭ともいう）を招び、シメナワを張り、塩、米、酒などを供えてお祓いをする。そのときは荒神ボンサンは琵琶は弾奏しない。家相をみてもらうこともあるが、謝礼は白米三升三合ときめられていた（小倉）。

また、新築の家へのヤオツリのときも招んだが、そのときは白米一升、銭五十銭ときまつていた（上白水）。

荒神ボンサンは真言宗（天台宗も含む）だが、その家

の宗旨とは関係なく、クドに祀ってある荒神様のお祭りには必ず招んだ。そのときのお供え餅は必ず三段重ねであった。

○礎石Ⅱ家を支えているのは土台である。柱一本に一つづつの柱石を据えてその上に根太用材を置いて柱を立てる。この礎石が簡単に沈むのでは困るので、地搗きをした上に礎石を置く。この地かため工事をサンヒヨウツキという。

サンヒヨウ石（ドウ搗キ石）は直径一尺くらい、四、五十斤の石に鉄の輪をつけ、これに綱をつけて五、六人で周囲から引張ってドウツキをした。櫓（ヤグラ）を立てて、中央の棒の下に石をつけ、これを引張り上げてどしんと落して突くようになったのは後のことである（春日）。

ドウツキの順序は、大黒柱を立てるところから始めて、順次他の柱の場所へと移り、最後の搗き止めも大黒柱のところである。

この作業の指揮者（ネドリという）を除いては、総て近所の人たちの加勢によってなされた。

○柱Ⅱ日本家屋の柱は、横木を接着するということをしない。柱にはホゾアナ（杓穴）をあげ、ヌキ（貫）という横木をさしこんでおくだけだから、ホゾアナが乾燥してすき間が大きくなると横木がある程度動くようになる。

地震などの動揺による力に抵抗せず、これを吸収してしまふという知恵である。この要（カナメ）をなすのが大黒柱という象徴的な構造物である。

大黒柱はケヤキが多く使われ、松（芯の部分）、樟、檜、椎などである。

大きさは、大黒柱が七寸角、恵比須柱が五寸角、他の柱が四寸角というのが一般的であった。

○畳Ⅱ畳の大きさの基準は、長さ六尺三寸、幅三尺一寸五分、厚さ一寸八分となっており、柱の大きさもあいまつて柱の間隔の間（ケン）が六尺五寸となった。

畳表は、筑後大川のものが普通で、備後は上等であった（下白水）。

○湿度調節Ⅱ当時の木造建築では、柱がむき出しだから木の表面が湿気を吸いとった。壁もスサを混ぜた赤土が塗つてあるだけで、芯は小舞（コマイ）といって、細竹を編んだものだから、湿気を容易に吸い、乾燥すると吐き出すので屋内の湿度を調節して、これを一定に保つ役目を果していたのである。

○屋根Ⅱ屋根についていえば、棟から床までの高さのうち、上屋が三分の二、軒下は三分の一という割合である。

それで、高い屋根の下が全部空気層になり、それが大きいということは、下から上への換気が行われ、天井に

板を張つてもなお湿気を上に排出できるのである。

古くから屋根はカヤ葺きか、麦ワラ葺きが主で（春日市全地区はカヤが少ないので下地に一部使用した）麦ワラ葺きである。これは通気性があり且つクドの煙によつて防腐作用をなすことにもなった。しかし、屋内のクドには、煙突がないので煙がこもることによつてトラホームを患う者が多かったことは否めない。

現在は、消防法によつて、火事の類焼防止のため、波トタンを屋根に張るよう指導されたが、そのため屋根の通気性がなくなつてしまった。

○座敷Ⅱ座敷には、床の間があり、客間とか主人の居間で、大抵佛壇はここにある。次の間というのが座敷に接して間取りしてあるが、多数の客の場合、あいだの襖（フスマ）を取りはらうと広間として使用できる便利さがある。

床の間は元来、神を祀る神聖な場所であるが、今日は書画を掲げたり置物を置いたりする装飾的空間となった。

○納戸（ナンド）Ⅱ四帖半か六帖くらい。若夫婦の寝室で、お産はもつぱらこの部屋とする。

○中居（ナカエ）Ⅱ土間（ニワ）から部屋にあがつた畳の間をナカエといい、ニワから平たい大石の踏み段とか大きな木を輪切にしたもの（キンタⅡ砧という）を足場にしてあがる。一般に六帖か八帖間で、普通ここを居間

と呼ぶ。

○ママクイドコⅡ板張りのところもあったので、板の間ともいい採暖用のイロリ（ユルリともいった）も切つてあつたが、大正末期から火鉢が出現してイロリをつぶしたところもある。家族の者の座る席順は厳然ときまつていて、家長が上座で、あとは誰がどこときまつていた。

○ニワⅡ天气のわるいときとか、ヨナベの作業場（納屋ですることもあるが）として重要な場所であるから広くとつてある。ここはまた玄關でもある。

ニワには塩（ニガリの強い質のわるいもの）、石灰、赤土を混ぜ合わせたものを塗りつけて固める。これをギチ打ちという。地面のことをギチという人もあるが、ギチとは本来粘土のことである。

○クドⅡ屋内のニワ（別棟のところもたまにはある）にクドを築く。鍋釜用が普通三つあつて一連とし、大カマドのみを別に一連としたものもある。大カマドのものは三、四升の鍋をかけ、大量の煮物用として馬のハミ（飼料）を煮た。

クドは赤土にスサ（切りワラ）を混ぜ、石でおおよその形を作つたものに塗りあわせたり、塗りこんだりして強度をもたせた。

煙突は特に設けない。燃料はカラシガラや山のタキモンで、杉、松の雑木であつた。風呂も同様だが、燃え残りはケシ炭として消し壺にとつておき、火付け用とか火鉢などの採暖用とした。

○風呂場（ユドノ）Ⅱ屋外にあり、井戸と同様オリヤからゲヤをおろし、雨露をしのぎ、板ガコイをして風を防ぐ。風呂は鋳物製の五右門風呂か木製の小判型の桶風呂であつた。

五右衛門風呂は火を焚くと底が熱くなるので、中に丸型の板（スイタ、フミイタ、ソコイタ）を入れ、底にちよつとひっかけるようにしてある。

また各地区にモヤイ風呂（共同浴場）があり、当番制で焚いた。木桶製で大きさは直径一間半（春日）四、五人一度に入れる（須玖、小倉）、約一坪（下白水）など種々である。

浴槽の湯面上だけを板で仕切つて、目かくしして男女をわけていた。脱衣場は一処であつた。燃料はクドの場合と同じだが、それを採集するには持ち山以外に割木用として、何人かで山の立木を買つて採りに行つた。

○屋根Ⅱ一般に寄せ棟で、入母屋はなく切り妻が多少あつた。ほとんどが草葺き（広島屋根）で、下地にはほんの少しカヤを使い、あとは小麦ワラであつた。軒ま

まわりは瓦葺きかトタン葺である。耐用年数はカヤは三十年、小麦ワラは八年くらいで、屋根の葺き替えは大体十年に一度であった。

瓦は城島瓦が最高で日にも寒にも強かった。瓦屋は下白水にあったが、あまりよくなり、井尻の瓦屋のもののは黒の地瓦で上等であった。

屋根葺は、宇美か雑餉の人（春日）か須玖か岡本の人（上白水）であった。

屋根葺にも近隣の人たちの加勢が必要であった。

○天井―藩政時代には諸種の制限があつて、分相応の家を建て、ぜいたくはゆるさぬというお達しがあつたので、天井も「板並アジロ天井」などはできなかつたので、それが尾をひいて立派な天井はあまりみかけず、ナカエの上の天井は竹を細かく堅に割り並べ、その上に土を置いた。納戸の天井にもそうした家があり、これを「格」天井という（上白水）。

○採暖―木や小枝を燃やしての採暖が一般で、火鉢の中でも小枝を燃やしたりした。一尺径くらいの火鉢を「手アブリ」といった。長火鉢という箱火鉢もあり銅壺（ドウコ）がついていて、湯を沸かしたり酒の燗付けにしていた。

湯タンポ（小判型のブリキ製や円筒型のすわりのいい

陶器製）の中に熱湯を入れ、ふとんの中で足元を暖くした。懐炉（カイロ）もあり炬燵（コタツ）は木製の炬燵ヤグラ（一尺二寸角くらい）の中に火種専用の上蓋のついた土製の火鉢（八寸角のものや丸型のもの）の灰の中に炭火をいけた。そのほか掘り炬燵もあつた。

○照明―電灯がともつた時期は

須玖地区 大正元年（一九一三）

春日地区 大正三年（一九一四）

小倉地区 大正三年（一九一四）

上白水地区 大正四年（一九一五）

下白水地区 電気の幹線は（下白水）の方から流れているので（上白水）よりも早かったかと思われる。ただし浦の原地区（柳の木園付近）は昭和二十年ごろ。

岡本地区 大正十二年（一九二三）

当時は、定額式（毎月一定の電気料）で、一世帯に一灯か二灯であつた。春日地区の某家は七室あつたが電灯は三灯であつた。

風呂場とか炊事場などは石油ランプを併用した。

○井戸（アライバ、ナガシバ）―瓦を井側（イガワ）のように丸く円形に径三尺から四尺くらいに組み上げてゆき外側を竹で枠組みして形を整えた。深いところで

背丈の二倍から三倍くらい（下白水）場所によって違うが二メートルから六メートル（上白水）であった。（春日）では一・五メートルくらい掘るとオシオイ川付近で岩盤にあたった。

水の汲みあげには、鋳物製の滑車にシユロ繩のツルベであったが、大正末ごろは鋳物製の手押しポンプとなり、昭和になってから陶器製のものが出現した。ポンプの汲い上げ管はすべて竹であった。

井戸は屋外にあるのでゲヤをおろし、雨露をしのいだ。屋内の炊事場には手桶で水を運び、流し台の横に大きい水ガメを置いて溜めた。

○棟上ゲ 棟持ち柱を立てて、棟木をのせると、それで半ば完成したようなもので、上棟祭を行い吉日を選ぶ。大工以外の加勢人も赤い手拭で威勢よく鉢巻をする。

棟木の上に扇と弓矢を立てる。扇によって神を招き弓矢によって悪魔を打ち拂うという意である。昔は神官が実際に矢をつがえて四方を射る行事もあったという。

棟があがると、中央に赤、白、緑、黄、青の五色の長さ一丈（約三メートル）の布を飾り、男竹で空射りの矢、小屋入りの矢二組と全開、半開、全開の扇をそれぞれ三本計九本の幟にくくりつけ、別に赤と黄の布のみを東西の矩計（カナバカリ）にくくりつける。

飾りつけが終ると、餅まきが始まるが、そのまえ大きめの餅を四隅にかぎっておく。それから東西南北の順に餅をまくのだが、餅の中にくいつかの一文銭を入れておく。別に紙にくるんだ一文銭も同時にまいた（下白水）。この一文銭はサントク（さいふ入れ）に入れておく縁起がよかった（上白水）。

○ヤウツリ（引越し） 完全に家ができあがらなくてもどうにか生活ができる状態になるとヤウツリをした。ヤウツリをすると、すぐヤガユススリをする。これは近所からお祝にきた人にヤガユを出す行事である。粥（カユ）の中に生の小豆を三粒入れるが、ときには月の数だけ十二粒入れることもある。この小豆の入った椀（ワン）にあたった人は「フがよか」（運がいい）といって、次には家を建てることができると喜んだ。

行事は天井裏の梁に神酒、コンブ、スルメを飾り、棟梁が天井裏にあがる。

これからさきの行事の進行は伝承が区々だが、（上白水）では、棟梁が「日向（ヒユウガ）の国の日向地藏の建てたる家は桁（ケタユキ）七間梁（シチケンバリ）かざり」と三回唱えて「ま一軒建ててやりまっしよう」と言う。それから大工がカケヤ（大型の木槌）を持って天井にあがって一度叩いて「下のものおかゆをすす

ろう」と三回繰り返すのである。

また他の伝承によれば、

大黒柱のところ二人、小豆を少し入れたおかゆの椀を持って立ち、二、三人が屋根の梁（天井裏）にあり「そもそも家と申すは、日向の国の日向地藏が建てはじめたる家なれば、おくびよう菩薩（ボサツ）にかえすべし、明年は明年で十三軒にはりしめて、建てればせまし、またせまし、もう一軒建ててくれんしよん、下のものは何すする、ヤガユをすする」と三回すすつたという。

また（下白水）では、棟梁が天井裏で大声で「オウトウロウ（大棟楼？）オウトウロウそもそも家の始まりは、日向の国の日向ジロウ、建てはじめたる家なれば、三間梁の十八間、建てても狭し、また狭し、来年は来年は、もひとつ建てて、くらい（倉、喰い）しよう、下の者は何をする」と言う、すかさず下に居る人たちが皆大声で「ヤガユをすする」と唱えるという。ヤガユススリの行事が済むと酒が出る。

この行事も、戦中ごろから木造建築の構造変化や社会情勢のゆれ動くなかで消滅してしまった。

○新築祝い ヤウツリして完全に仕上がって、生活に落着きが出てきたとき、日を選んで行った。棟梁ははじめ左

官、屋根葺など専門職の人たちや近所の加勢人を招いて盛大に行く。このときの料理作りも近所の奥さん方の加勢である。宴たけなわになると、唄も出るが、鳴りもんを入れるといつて玄人（クロウト）の芸人をよんで、賑やかに祝う。鳴りもんという、一般に三味線、太鼓のことをいうが田舎浄瑠璃（イナカジョウロリ）、祭文語り（サイモンカタリ、浪曲師）や万才もいれたようだ。

浄瑠璃は内容が道行（ミチユキ）とか心中物（シンジュウモノ）とかが多かったので、祝いの席にはむかないとあまりよばなかった。むきもあるが家の主人が好きならまた別だった。芸人は大体一組三人くらいの編成である。

料理はガメ煮、ヌタエ、吸い物などで、カシワの鶉は自家で飼育したものをひねって、まにあわせた。オヒラは紅白の餅とカマボコの詰めあわせで、この詰めあわせをシユンカンといった。

6 相互扶助（別項、「村落共同体」の

「相互扶助活動」参照）

村落社会における農作業はもちろん、結婚葬式などの私事に関するなども必ず、村ツキアイの一環と

して行われる。

普請におけるサンヒョウツキ、棟上げ、屋根葺、新築祝など専門職の人が一人居るだけで、あとは全部加勢人である。普請だけでも、どれほど近隣の手助けが必要であったかがわかる。相互扶助はムラの生活に欠くことのできない「義理」でもあり、手伝わってもらったから必ず別のことででも返さなければならぬ。このように互に加勢しあうことを手間替え（テマガエ）といった。

十二、衣生活

1 日常生活の衣類

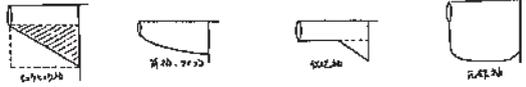
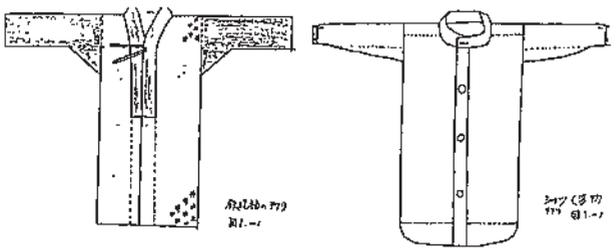
農作業に出かけることをホカイキといい、作業着をホカイキギモンという。男女とも上衣はテクリを着、下衣は男はモモヒキ、女は腰巻（オコシ）を着用する。仕事着としてシャツやズボンなどの洋服をとり入れたのは大正末ごろからで男の服装の変化の方が早かった。

2 テクリ

身丈は腰上までの短い農作業着で、男は紺（コン）か縞（シマ）、女は縞か緋（カスリ）でつくった。一反で二

枚つくる。オクミはとらず、また綻（ホコロ）びないよ
うに袖付の部分を一寸ほど開けておいた。

テクリは、以前は鉄砲袖で、はじめからミゴロとは別布の紺無地（コンムジ）などではぎあわせておき、袖がいたんで、つけ替えても不自然にならないように仕立てていた。大正時代には筒袖に変わった。

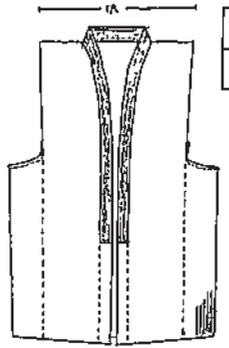


筒袖	筒袖	後身	前身	前身	後身	えり
						えり
						かけえり

3 ポンチン

冬の仕事着、袖ナシの綿入れポンチンは重ね着ができ、後一巾^{ウシロヒン}でできる合理的な衣類である。持ち布が少ないときにはエリやマチの部分は別布で仕立てた。擦れやすいマチの上部、脇（ワキ）の部分には、ていねいに玉縁（タマブチ）でかがった。裏地には綿（メ^ン）ネルなどを使った。

ポンチン図 2



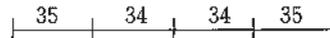
ポンチンの裁断図 2



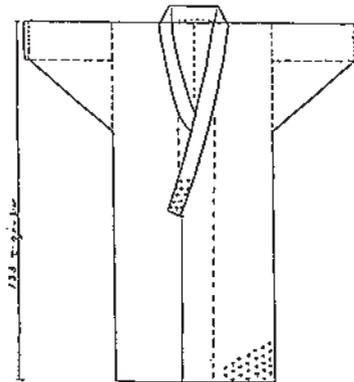
4 ヒョウヒョウ

冬の綿入れで、袖の名称がそのまま着物の名になっている。ヒョウヒョウ袖は、一枚の布を折りたたんでつくる。暖かくて動きやすい袖となっている。擦れやすい袖

口には玉縁（タマブチ）かがりをした。別名を巻袖（マ^キソデ）、振袖（モジリソデ）ともいう。身丈も長く、年寄りには欠かせない冬の着物であった。衿（オクミ）はとってある。表は緋（カスリ）、裏は紺無地（コンムジ）などのキジを使った。



5 オコシ



女の下衣は腰巻（コシマキ）で、夏は箱崎縮（ハコザ^キキジマ）、冬は綿（メン）ネルでつくった。緋はがばがばしてよくなかった。袖補強のシリアテには晒（サラシ）などを使った。並巾（ナミハバ）の場合は二枚ついで使

った。ヒモは上部から一寸ほどさげてつけると、上端が伸びなくて縫いなおしたとき具合がいい。
 普段着の長着（ナガギ）の下につけるオコシは、小晒（コザラシ）を腰の部分について丈（タケ）を長くしたものを着用した。

6 マエカケ

普段にも、仕事にも必ず着用した。

夏は木綿の一巾もので、冬は綿（メン）ネルでつくった。男はよごれ仕事や力仕事するとき、膝（ヒザ）が破れないよう厚地のマエカケをした。マエカケはオコシよりも長くならないようにした。

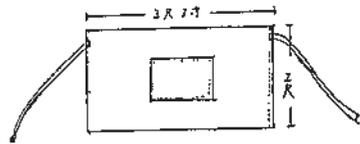
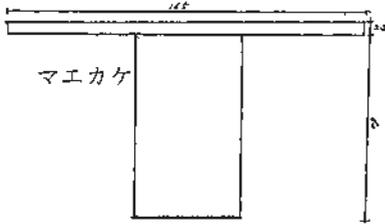


図4 大巾（ネル）のコシマキ

7 オビ

テクリの上には、半巾帯（ハンハバオビ）や古くなったシゴキ帯を半巾にたたんで後（ウシロ）でチヨウチヨ結びや、ヒモトキ（ヤノジ）に結んだ。ダテ巻きを使う人もあった。

また、昭和になってから出まわったサナダ帯と呼ばれる紙のヒモで織った帯を結ぶこともあった。若い人ほど派手な帯をした。ちよつとした外出にはカイノクチに結んだ。

8 ナガギ（長着）

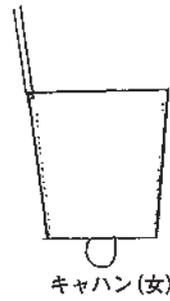
親睦（シンボク）に出かけるときなど、普段着として女性は、オコシがかくれるくらいの丈の長い長着を着た。生地は木綿や新モス、冬は綿ネルやセルの古くなったもので、袖はヨソユキギモンの一尺八寸よりはらずと短かく、元禄袖や筒袖と元禄袖の中間の舟底フネソコに仕立てた。

9 テコウ（手甲） キヤハン（脚半）

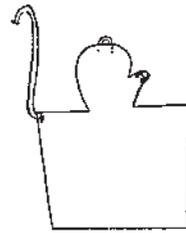
農作業には、必ず手甲、脚半をつけたので百姓は色が白かった。どちらも紺の木綿で自家製。

男性用は五つくらいハゼのついたものをつくった。ハゼ

カケをつくるのは、細かい作業だった。女性用には脚半にも甲アテをつけて足を保護した。



キャハン(女)



手 甲

10 カブリモノ (被り物)

男はテノゴイ(手拭)で、夏はネジリハチマキ、冬はホオカブリをした。女は夏も冬もアネサンカブリをした。アネサンカブリには三とおりあった。手拭の一端を頭の後で結ぶ簡単なものと、結びあげた髪を形よく包み、後で交互に重ねて頭頂部で下の方に折りまげるものもあった。そのほか、天竺木綿をたつぷりと四角に切ったものを三角に折り、目だけを出すようにかぶって顎(アゴ)で結んだ。夏の暑い日射しや、冷たい冬の寒さから顔を守った。

雨の日や夏の日よけには、トンゴ笠をかぶった。これはタケノコ笠ともいい、竹の皮を材料にし、上から糸ヒゴで渦巻状に押えたものである。手拭を併用した。

若い嫁は、はじめての田植えのときは、婚家で緋の仕事着一式を用意してもらったが、このときのトンゴ笠には中広にした赤いヒモをつけたものである。

日よけには、麦ワラのスポ蓑(ミノ)をつけることもあった。ほかに雨の日の蓑には、ススキ蓑、自家で調製できる米ワラ蓑、シユロ蓑がある。

女性は通常ゴザ蓑を着用した。夏の寝ゴザの古くなったものなどの裏に油紙を縫いつけ、四つ折りにして、一方のまん中に首の丸味をつけ、その両端にヒモをつけ、前で十文字にヒモをかけ腰の部分でゴザの後にヒモを通して着用した。

昭和になると麦ワラ帽子やゴムのカッパを着る人もあった。

11 ハキモノ (履物)

普段は自家製のワラゾーリをはいた。小さな女の子には鼻緒に赤いキレを巻いてやった。仕事には素足か足ナカをはいたが、地下足袋が出まわるようになると、冬に使用した。

ヨソユキには下駄をはいた。普通にはヒヨリゲタをはき、雨や雪の日にはリキユウゲタやアシダをはいた。ヒヨリゲタは台に切りこんで歯を入れたもので、アシダは

差し齒の高下駄であり、リキユウゲタは中間の高さの齒がついた下駄である。

12 フトン (蒲団)

明治初期にはヨコギフトンといい、フトンの表に紋を入れたものを嫁入りの際持ってきた。

後期には緋でつくったフトンの裏に染めつけた紋入りのフトンを持ってきた。

フトンの手入れは、毎年田の草取りが終わったお盆過ぎ、「秋口にならないうちに」と急いでフトン皮をほどいて洗いなおし、綿を干して縫いなおした。

13 タンゼン (丹前)

タンゼンはワキアケを縫い閉じた角袖の綿入れで、夜具として、肩などが暖いようにフトンの下に着て寝たりくつろぎ着として、あるいは親睦などの冬の外出着として使用することもあり、その用途によって生地はさまざまであった。

14 ネンネコ

ネンネコは子守りには欠かせない衣類で合用(アイヨウ)は一と重で袖も短かく、冬用は裏付き、綿入れ、仕

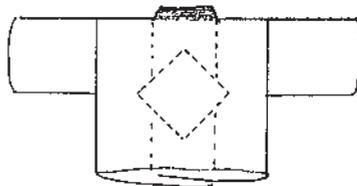
専用には丈も短く、ヒヨウヒヨウ袖といろいろあった。生地も木綿、銘仙などさまざままでエリガケ(カケ衿)は黒シユスが多かった。背の部分にはマセを入れ、中心に菱形の補強のアテ布をつけな。

一反で作った。

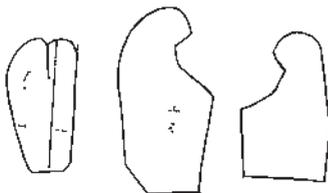
ポイポイ(おんぶ)しょうと
いうと、幼い子どもは喜んで
背中におぶさり、親と子、祖
母と孫とのぬくもりは、忙し
い毎日の中にも伝わった。
オブイヒモはシゴキ帯やサラ
シを利用した。

15 タビ (足袋)

フクスケから安い足袋が出
まわるようになるまでは手縫
いだった。よそゆきは白、善
段は箱崎縞、冬はネルの裏つ
き、紺足袋をつくった。ハゼ
を甲でとめるようにすると、
作りやすかった。



ネンネコ (後)



16 ハタオリ (機織り)

大正期の初めごろまでは、各家で、屑マユや綿から糸を紡いだり、高機(タカハタ)でメクラ縞や箱崎縞の織物をした。昭和になると緋が安くなったので買うようになった。緋は「よかもん」で、農作業の正装は緋であったが、箱崎縞は手ざわりもよく、経済的にもよい織物であった。

17 染め物

日常の着物は、家で染めていた。染料は、クチナシ、ヤマモモの皮、赤土などを使用した。後にはコーヤ(紺屋)で染めてもらうようになった。嫁入り前には、二反の絹の白生地を自分で織るなどして準備し、京染めに出した。

18 縫い物

雑糞から足袋まで自家製であったから、冬の農閑期には、繕(ツクロ)いや縫いものに精を出した。テクリやおコシなどは、毎年この時期に縫いなおした。

テクリの汚れやすい前身(マエミ)を後身(ウシロミ)ゴロを取り替えたり、表返しにしたり、擦れやすい袖の

部分は、はじめから筒型に裁ち落さず、折りこんで縫っておいて、いたんだ袖口を袖つけにもってきた。また、おコシはいたみやすい裾を腰の部分と入れ替えた。このように一枚の衣類も大切に手を入れて着られなくなるまで活用したものである。

十二、食 習

1 平常の食事

むかしの農家は日中の長い夏季は、一日に四回(うち一回は午后三時ごろオ茶ノコと称して代用食のようなもの)も食べた。

(1)主食 麦メシか粟メシで粟は三割くらい混ぜたが、麦は五割から七割も混ぜていた。(春日)では昼は麦メシ、晩は粟メシであった。

メシを炊く回数は、たいてい二回で、朝と晩のところで、昼と晩に炊くところがあつた。玄米を白米にするための米搗きは、主婦の夜ナベ仕事で、唐臼で一回に五升づつ搗いた。炊事の燃料は割木、柴、カラシ殻、麦ワラ、シラツユなどであった。

(2)副食 毎日の食膳にあるものとしては、ナメシソ(醬油の実)

漬物ヅケモノ（コンコン・菜漬・ランキョウ）

冷や汁

ガメ煮（里芋・大根・人参が主なもの）

味噌汁（ダシはない）

シソの葉（細かく刻みメシにかける）

ドジョウ汁（主に冬季）

(3) 買って食べたもの

塩イワシ、塩クジラ、生イワシ、メバル、サバ、

目刺し。

魚は四、五日に一回くらいで、イワシは男三尾、

女二尾くらいであった。生イワシをかうとワタ（内

臓）をとって塩カラにした。

豆腐やカマボコを食べるのはオクンチやオコモリの

日くらいであった。牛肉は買ったことはなく、肉と

いえばたまにしめる鶏肉であった。

(4) オ茶ノコ（お三時）

ひつぱりダゴ、カイモチ（屑米の粉とソバ粉を混

ぜあわせて熱湯で練ったもの。ゴマ醬油や味噌をつ

けて食べるが小豆を入れ黄粉や黒砂糖をつけること

もある）、蒸しイモ（琉球イモ）、うどん、ソバ、ソー

メン、にぎりメシなど。

(5) まぜメシ

鶏メシ、焼きアナゴメシ、キビナゴメシ、サゴメシ

（サンマ）、鯨メシ、里芋メシ、芋ガラメシ、豆メシ

（エンドウ、唐豆）。

(6) 保存食

水餅、氷餅（二月）

梅干、ランキョウ（六月）

山モモ、（七月）塩漬とし、戻してお茶うけとする

カンコロ（十二月）大根を薄く輪切りにして干す

千切り（十二月）大根を短冊に切って干す

丸干し（十二月）漬物にしない小さい葉付大根を干

したものの。

(7) 漬ケモン

コンコン（大根漬） 十二月に四斗樽（センノジ）

三丁か四丁に漬けこむ。糠五升、塩は目先モンは二

升、夏通しは五升から七升。これに昆布、クチナシ、

渋柿の皮などを入れる。

菜漬 高菜漬（四月）

菜漬（九月）大根の若い葉

味噌漬 塩抜きした大根。茄子、キュウリ、ゴボウ、

人参、カッチャキ（ナタ豆）などを漬け、これに昆

布、ミョウガ、シヨウガを入れる。主として来客用。

2 晴れの食時

(1) 餅

正月餅 十二月二十八日に一俵(四斗)も搗いた。

丸餅、粟餅もつくった。

氷餅

ワカ餅 旧正月の年取直し餅

丑餅 入り丑 二月丑の日

節句餅 三月 三色菱餅。桃色―色粉。

黄色―クチナシ。青色―ヨモギ。

彼岸餅 三月と九月 アン入り

オクンチ 九月 榎田さま。

亥の子餅 十月亥の日

丑ドン 出丑、十一月丑の日、一升餅に一杯の餅を

供える。

鎌上げ餅 十一月、稲刈りの終わったとき

庚中餅 二カ月毎に当番で搗く。

誕生餅 子どもの誕生日。

棟上げ餅 新築のとき紅白の小餅をまく。

オテツキ餅 婚礼のとき。

厄餅 白と黄(クチナシ)の鏡餅

男性四十一歳 女性三十三歳

(2) 赤飯

入営祝 一月

オコモリ 四月

天神サン 四月二十五日

薬師サマ 五月

虫追イ 七月十五日

オコモリ ニギリメシにする

クンチ赤飯 九月榎田サン

二番クンチ 十一月二十五日

家族の誕生日

厄 日

(3) ダゴ(団子)

チマキダゴ 五月 モチ米七、ウルチ三の割合

サナボリダゴ 田植終了時

六月堂 六月七日

お薬師サマ 六月二十日

お地藏サマ 六月二十五日

ガメシ、バダゴ 八月十五日、十八日

芋名月 旧八月十五日 ダゴは奇数を供える

粟名月 旧九月十五日 ダゴは奇数を供える

神嘗祭 十月十七日

お大師サマ 毎月二十日

観音サマ 五月十七日、七月十七日
七夕サマ 七月七日

ざおん 六月十五日 アン入り、ガメの葉に
包んで蒸す

餅、ダゴに入れるアンは唐豆かエンドウ豆でつくり
り、砂糖は黒砂糖。

3 トリモン

アラレ 菱餅を細かくさいの目に切って干す
カリカリ アラレに砂糖をまぶしたもの
ヤッコメ 種籾の残りを、籾皮をとって炒った
もの

トウノ豆 小粒のソラ豆を乾燥させて炒ったも
の。海水浴のとき袋に入れて海水に
浸すと塩気があっておいしかった。
ハッタイ粉 大麦を炒って粉にし黒砂糖を入れて
なめるか熱湯で練る。

蒸し芋 甘藷（琉球芋）

ホシイイ 夏季、ママシヨウケにひつついた飯
粒を集めて乾し砂糖か油で炒ったも
の。

唐キビ 焼いたり蒸したりする。

その他、季節の果実としてグミ、夏ミカン、キンカ
ン、ミカン、キンコウジ、柿など。

4 精進料理

不幸があつたときの精神料理には麩、野菜ヒジキ、薄
アゲ、カンピョウ、揚げ豆腐。

5 食器

○ メシワン、汁ワン、漬モン皿は瀬戸物でヤキモンと
いう。年に二、三回、茶ワンセリが村に來た。一銭か
ら三銭くらいであつたが、時には傷モンきまを買わされる
こともあつた。

○ 飯ピツ（オハチ）一升か二升入りで木製のものは桶
屋で買った。竹製のオハチもあり、杖立温泉のが安か
つた。

○ ママジヨウケ 夏季に使用する竹製品、雑餉限で買った。

○ エグリ

ワラで編んだもので冬季に保温のため飯ピツを入れ
ておく。自家製か上手な人に作ってもらつた。

○ お膳

箱ゼン、本ゼン、ポツポゼン。博多の川端で買った。

○ 弁当入れ

曲げもん（ハンゴ）、柳行李、ワリゴ（木製）

○ 箸

栗ハイバシ（正月用）、柳バシ、竹バシ、塗りバシ、
大体自家製。

○ 煮炊きの道具

カン付き鍋（つる鍋）、一番利用が多かった釜は余り
使わなかった。鉄びん。

鉄製のハガマや鍋の穴あきは、ソソクリ（修繕）を
頼んだが、穴の大小によって十銭か二十銭で修理して
もらった。

鍋底は縄を束ねて洗い落した。

鉄びんの錆落しには、クチナシの葉を数枚入れて煎じ
るとよく落ちた。

十四、信仰

春日市内の寺社およびその行事等については、各地区
編の『信仰』の項に詳しいが、その寺社の所在地は別図
の通りである。

なお、『春日区編』に洩れた寺社につき追補する。

1 月光山長円寺

春日区上居屋敷に在り、真宗本願寺派。天正十四年
（一五八六）島津軍に討たれた岩屋城主高橋紹運公以下
戦歿将士の追善供養のために建立されたと伝えられてい
る。

創建は慶長年間と伝えられているが、惣利墓地の長円
寺墓碑（現在は改葬）に、弓円、慶長八年（一六〇三）
四月二十七日とあることから、開山の時期はこれ以前で
あることは確かである。現住職は第十八世高橋哲巖師。
紹運公の流れをくむと言われている。

本寺は市内外に多くの門徒を有し、筑紫地区最大の寺
院といわれてきた。本堂は大正三年の造立、鐘楼は昭和
三十一年、納骨堂は同三十三年の建造。大正十年の春日
大火の際、真先に持出されて守
られたという江戸期の過去帳が
大切に保存されている。境内に
は、市の保存木指定のコウヤマ
キとイチヨウの大樹がある。



長円寺

2 良丘院 (ゴンガクイン)

春日神社の境内のほずれに薬師如来と、子安観音を祀った小堂がある。ここは以前、良丘院という禅宗寺の跡で、ここには鎌倉時代の末、博多の承天寺第二世鉄牛心師が太宰府の光明寺とともに開山した春日山大光寺という禅寺があった。

『承天寺末寺小史』に次の記事がある。

鉄牛円心の開山と伝えられる。歴代事跡は不明。江戸中期には廃寺。寺址に薬師堂があったという。

明治二十四年、村民の希望を幸い、堂舎を再興、東福寺塔頭(タツチュウ)良岳院の寺号を移し承天寺末寺とした。壇徒はなかつたが、地区民九十戸が信徒であった。戦後、太宰府光明寺に合併、廃寺となる。

古老の話では、戦前の良岳院は、六畳と四畳半の二間に分れ、まわりに縁をめぐる小堂で、奥の六畳の間に薬師観音などの仏像が安置され、お年寄りたちの安息の場所であったという。

また、ここは古くから郡中三十三方所観音の二十五番札



良岳院の子安観音

所でもあった。四月八日の花祭りなどには賑わったという。

今は仏像の多くは失われているが、ほの暗いお堂には香花が手向けられ、片隅には「前任東福良岳開基周日禅師」など十基の位牌が遺されている。

3 東慶院・豊川稲荷

大正十年、西鉄の前身九州鉄道が春日原の原野八万二千坪を買収。十三年、福岡・久留米間に急行電車が開通して春日原駅が開業すると、ここに陸上競技場、庭球場、野球場等の総合運動場を開設、母園を開き、桜樹数千本を植え、竜神池にボートを浮べ、納涼花火大会を催すなど、春日原の一大遊園地化を図った。

春日原開発の先達として、また遊園地化に努めた春日の長老白水道夫氏、福岡から移住した大神恒吉氏らは、春日原発展を祈願して昭和八年、千葉県佐倉町の禅宗寺東慶院と、愛知県豊川稲荷の分霊を勧請した。当初は信徒を広めるのに苦心を払っ



東慶院

たというが、福岡市や近郷に多くの帰依者を得たいとい
う。

戦中戦後の再開発で、広い参道と名物の桜並木は姿を
消したが、境内は深い緑に包まれ、繁華街の中であつて
静かなたはずまいをみせている。



4 春日市の寺社の所在地図

1	春日神社	8	名和宮中宮	15	師山經音社	22	早野八幡宮	29	秋葉社
2	春日神社	9	住吉神社	16	山經音社	23	大井八幡宮	30	へん茶神
3	長三郎神社	10	住吉神社	17	山經音社	24	大井八幡宮		
4	三良宮神社	11	住吉神社	18	山經音社	25	大井八幡宮		
5	長三郎神社	12	住吉神社	19	山經音社	26	大井八幡宮		
6	長三郎神社	13	住吉神社	20	山經音社	27	大井八幡宮		
7	長三郎神社	14	住吉神社	21	山經音社	28	大井八幡宮		

6 絵馬

計	小倉薬師堂	春日神社	大土井八幡宮	浦原八幡宮	熊野神社	老松中宮	白王稻荷	老松上宮	小倉住吉宮	西村天神	白水八幡宮	住所 時代別
22							15	4	2		1	江戸
11		2					2	2	3		2	明治
6					1			3	1		1	大正
63	2	8	2	7	8	3		2		8	23	昭和
21		4		1			9	1	4		2	不明
123	2	14	2	8	9	3	26	12	10	8	29	計

注、昭和五十五年現在の数

7 石造物

(1) 猿田彦大神、庚申尊

名称	所在地
猿田彦大神	下白水区浦ノ原
猿田彦明神	〃 楠ノ木
猿田彦大神	〃 大土居旧道
〃	〃 横棟 西村天神登り口
〃	小倉区村中 薬師堂横
〃	〃 住吉神社横
〃	須玖区 老松神社(上ノ宮境内)
〃	〃 住吉神社(下ノ宮境内)
〃	〃 無量寺下
〃	上白水区 藪ノ内
庚申尊	下白水区 昇町八幡宮下
〃	〃 淨雲寺バス停前

(2) 十三佛

春日神社境内
一ノ谷薬師横
春日上居屋敷
下白水白水台団地

(3) 狛犬

神社名	製作年月	所在地
老松神社(上ノ宮)	大正2年4月	須 玖
老松神社(上ノ宮)	昭和9年4月	須 玖
白水八幡宮	大正8年3月	上白水
春日神社	明治41年3月	春日
住吉神社	大正15年4月	小倉

(4) お大師様

白鬚妙見稲荷境内

春日原南

熊野神社境内

岡本山

薬師堂境内

小倉井ノ尻

(5) 路傍の地藏

上ノ地藏(立江地藏)

春日惣利

下ノ地藏(紹運地藏)

春日下居屋敷

白鬚妙見稲荷境内

春日原南

十五、年中行事(主として旧暦)

自然の運行に従う農村の生活では、四季の運行に結びついた暦(コヨミ)によって行う行事が年中行事だが、その日は神を祭る日で休日であり、特別な食べものを作る日でもあった。

一、暮から正月の行事

1 餅搗き

正月餅は、どこでもいわれるように、二十九日はク(苦)に通じるので、この日は避ける。友引き、ウシ(丑)の日も避ける。普通の家でも一俵、多いところでは二俵も搗く。オクリ餅、ツボキリ餅といひ小さい一重ねの餅を近所に配る。アワ餅も搗く。ダゴ餅は屑米を挽いて粉にし、モチ米に混ぜたもので、焼くと香ばしかった。餅搗きの日は、ガメ煮をつくり、加勢人に酒食を出した。モチ米を洗ったトギ汁で二ゴシ風呂をたて入浴後はこれを肥料とした。

2 クレノモン

いわゆるお歳暮をクレノモンという。

嫁の里方にニタ親揃つておれば餅二重ね、片親だけなら一重ねと塩鯛とかブリ、ホシイワシを添えて贈る。

二 親戚や懇意などころには黒砂糖（二斤箱）、ホシイワシ、新巻鮭などを贈る。親戚には、女竹にアゴをさしたホシイワシを互いに尾の方を内側に、頭の方を外側に向けたものを五段重ねとし、これに手拭を添えて贈る。

3 栗ハイバシ

正月十四日まで使う栗ハイバシ（箸）を家族用、来客用をつくる。栗の木の枝の両側を削つたもので、この箸を三年間使うと長者になるともいう。クリアイ（やりくり）がいいようにとか、苦勞せぬのためとか、マンガリ（家計のやりくり）のよかごと作るのだといわれている。正月七日までは竹の箸は使はない。

4 薪取り

暮から一月にかけて、一年中の薪を取っておく。四、五軒がモヤイで、那珂川町仲村（チユウ）の山林を買って薪用の木を伐つた（須玖）。

5 お寺参り

暮の三十日か三十一日に、お鏡餅と米一升を持ってお寺参りをして、翌年中の法事の日程を見ておく。

6 支払い

諸式の掛金や医者への支払いは、盆と暮との二回であった。

7 絵馬（エンマ）

年末に、小学生の男子がエンマ（絵馬）のゼンキリといて各戸をまわって寄付金を五銭、十銭と貰って歩いた。（須玖）では、小学校三年から高等科までの男子が梶原（現那珂川町）の雑木山で栗の若木を切ってきて、正月用の栗ハイ箸や火吹竹を作ったり、上半紙に馬の絵を描き、これを各戸に配って寄付金や白米を集めた。白米は売って換金してエンマの代金とした。

エンマは十二月二十五日ころまでに、高等科の男子が博多の川端町や祇園町に買いに行き担いで帰る。エンマを買いに行っている間、エンマゴモリといて、当番の家のカド（前庭、物干場）で火を焚いて待っており、頃合いを見はからって出迎えに行つた。買いに行つた者は、

値段をコギツて（値切つて）金をうかせお菓子を食べるのは「役得」の一つであった。

エンマには「何年度子供中」と誓いたり、子供一人一人の名前を入れることもあった。そして各氏神様に大晦日か元旦に掲げた。

8 オカザリ

シメナワは各戸で作り、カド松は山から切つてくる。

神棚（オ神様）、床の間にオ鏡を、荒神様（土間のクド）、井戸（水神様）、マヤ（牛、馬小屋）、小屋（農具、穀類を収納）、蔵などにも年取りのシメカザリをし、コモチブトリ（小さいお重ね）を供える。

なお、一般には昔は門松カドマツシメカザリをしなかった（春日、小倉、須玖）。シメカザリをしなかった（岡本）。

門松、シメカザリは今次の大戦後からのことであるというから、門松を立てることは、正月神を迎える必須条件ではないのかもしれない。

門松は、たけの高いものを軒口に左右一本づつ立てるか、松ではなくカシノキを立てる家もある。

これは元日の朝、早く切つてきて立てるが、その理由はわからない（下白水）。

お神様のお供え餅は、一番下の段に四つ、その上に三

つ、二つ、一つと段々に重ね、一番上に白米、スルメ、コブ、白紙に包んだオヒネリを供えるが、これをコモチブトリという（下白水）。

9 年越し

夜、各戸で運ソバを打って食べる。

ソバキリのダシは「にわとりこむ」といって、鶏の骨でとる（小倉）。

なお、ソバを打ったとき、ソバと米の粉を混ぜてねつたものに黄ナ粉をつけて食べるが、これをカイモチという（須玖）。

大晦日の晩は、神棚、床の間、荒神様、井戸などお供えをあげたところには灯明をあげ、ユルリ（囲炉裏）には火をどんだん焚いて昔話を聞いた。除夜の鐘が鳴るまでは起きていて、それからお宮に参る。

10 一月元日

早朝、家長か総領息子が若水（ハツミズともいう）を汲み、東の方を向いて洗面する。特に若水汲みをしないところもある。

雑煮はウチコミゾーニでダシ（イリコ、ブリ、カシワなど）の中に丸餅、カシワ、里芋、ニンジン、カツオ菜、

焼豆腐、カマボコ、シイタケ、レンコン、コブ、スルメなどを入れる。

雑煮は三日日の間食べる。雑煮のほか、カズノコ、お頭付きとしてホシイワシをつける。

また、お雑煮の前に梅干、黒豆を食べる（上白水）。

荒神様に供えた三本足の太根でナマスをつくるが、これを「福ナマス」という（小倉）。

雑煮がすんだでから氏神様に参る。

お参りする神様（氏神様以外にも参るので）の数だけオカサネ（餅）、オヒネリ（白米、コブ、スルメ）を持参してお供えする（春日）。

近所の年始廻りは、家長がして、女は外出しない。元旦には家の中の掃除はしない。晩はいい夢を見るようにと早く寝る。

11 二日

シゾメで早朝、仕事始めのナイゾメで男はワラ仕事、女は針仕事やカイコの網をあんだりする。子供は書き初めをする。

（小倉）では、三日が初仕事で、早朝ナイゾメのワラ仕事や書き初めをする。

元旦から三カ日は休み。

12 三日

晩には「福入り雑煮」といって、大晦日の晩メシの残りに餅を入れた雑煮を食べる。

13 四日

田に出て、カラシ（菜種）の仕事をしたり、山に行き薪を採る。雨が降ればナワナイをする。

14 七日

七日正月で休む。（下白水）以外の地区では、ホンゲンギョーをつくる。各戸もしくは五、六軒が組となった（小倉）のように、区内に五組ある所では、各組で前日の六日に竹、ワラ、シメカザリなどを持ち寄り、門口、キド、ミツカノ（三叉路）にこれを組みホンゲンギョーをつくる。家のゴミは七日までは外に出さないことになっているので、これも持つてくる。

七日早朝、これに火をつける。竹がポンポンとはしるのにぎやかである。書き初めの習字も焼くが、高く舞い上ると字が上達するという。

また、この火でお供えの餅を焼くが、（春日）ではお鏡餅三つを焼きぞめして持帰り、更に焼いてオニミン（味

暗に砂糖で甘味をつけたもの)をつけて食べる。これをオニ餅という。

〔岡本〕でも、オカザリの餅を焼いたが、ホンゲンギョーは鬼スベだから、この餅をオニノ餅という。

〔小倉〕では、この火で焼いた餅を七草汁に入れる。

また火を焼くとき「アカガリ(あかぎれ)焼一こ、ヒビ焼一こ、泣くもんな口焼一こ」〔小倉〕とか「泣く者は口焼くぞここさい来てんね」〔須玖〕などと唱える。

15 オカザリノ 七草汁

六日に七草(セリ、ハギナ、フツ(ヨモギ、夏ワズライをしないように)、ヒヨコ草(ハコベ、乳がよく出るように)、白菜、カツオナ、大根、ネギ、シユンギク、ノノセリ(ノビル)、ヨメナ、タンポポなど七種類)をとって茹でておく。

七日朝、木臼の上に手筈テヅをのせ、その上にマナ板をおき、アキの方カタ(または東の方)を向いて、片手に庖丁、片手に大きな杓子を持ち、庖丁の背中で七草を叩きながら「唐土の鳥と日本の鳥と渡らぬさきに七草叩いて祝いましよ」と唱えるが、この唱えごとは忘却されたり、形がくずれたりしている。

そして味噌汁の中に七草の刻んだものを入れたり、ホ

ンギョーの火で焼いた餅も入れる。ダシはコブ、焼アゴ、鶏など。

正月七日までは味噌汁はつくらない。

「七草汁があまると、田の草が生える」といって残さず食べた(小倉)。七草を入れた粥カユをつくることもあるが、これは七草ガユである。七草を茹でた茹汁を風呂に入ると、万病に利くという。また家の周囲にこれをまくと火事の火元にならぬという。また茹汁に手と足の爪をつけてから爪をつんだ。七日までは手足の爪をつんではならぬとされていた。

竹をクドで焚くとはじくので、七日までは焚いてはならぬとされている(春日)。

16 十一日

チヨウトジ(帳綴ジ)といつて、大福帖(家計簿)をつくる(春日、須玖)。

神様のお供えをおろすカガミ開きの日。黄粉餅をして神様にお供えする。(上白水、下白水)では、お荒神様にお供えしたお重ねは三日におろして、水に漬けておき、この日黄粉餅にする。

17 十四日

十四日正月と違って休む。

この日までは山行きをしない〈春日〉。

18 嫁ゴの尻叩き

ワラであんだ長さ六〇〜九〇センチ、直径六センチくらいの棒をつくる。なかには芯に竹を入れたものもある。前年結婚した嫁ゴが盛装して十四日夕方、住吉神社に参詣してくるのを小学生の男子が待ちうけて、この尻叩き棒で尻を叩くが、別に唱え言はない。

嫁ゴが家に居着くように、また子宝に恵まれるようにとの願いをこめたものだという。

この行事は、今次の大戦中廃絶していたが、昭和五十七年から復活した。

この尻叩きが終わったころ左義長に点火する〈小倉〉。

19 左義長（サギチヨウ）

〈小倉〉では、住神社の境内、〈上白水〉では、八幡宮の境内に木を井ゲタに組み、竹やワラを添え高さ十二メートル直径四―五メートルくらいのもをつくる。ワラは各戸から出す。十四日夕方点火。書き初めを竹の先に

つけて燃やし高く舞いあがると上達するというのはホンゲンギョーの場合と同じである。

20 十四日のチカラ餅

朝、飯を炊くとき、たぎる前に餅を入れる。これを「四日のチカラ餅」という。これはススキの箸で食べる〈上白水〉。

〈岡本〉では、十五日の朝、小豆ゴハンに餅を入れた。これもススキ箸で食べる。

また、〈小倉〉では、十四のチカラ餅を炊いた釜の残りご飯に水を入れて沸かし、これを家の周囲に撒くが、そのとき「おかゆ一杯、セチ一杯、隣りのカロ（カド、前庭）さいもって行け」と唱える。これはモグラ打ちのときの唱えごとと同様である。

この日、〈須玖〉では、大根の葉のついたままのものを茹で、根の部分を縦四つに割り、葉の部分を少しづつちぎって、ご飯やナマス、煮シメの上にふりかけて食べる。これをコダレ菜という。

21 モグラ打ち

長さ一間（一カマ）くらいの竹の先に、二尺くらいのワラを巻いてモグラ打ちという道具（大人用は長く、子ども用は短

い)をつくり、十三日の夕方から十四日の朝にかけて各戸のカドグチで大声で、「十四日のモーグラ打ち、オカユ一杯、セチ一杯、隣りのカド(ガド)さへもつて行け」「オカユ一杯、セチ一杯」の文句を入れるのは(須玖・岡本)と唱えながら、地面(ジベタ)を叩いて廻った。子どもたちは、組になって、近所の家のカドを叩いて廻り、お札に餅を貰った。

モーグラ打ちが終ると、その竹は二つに折って柿の木(またはミカン、梨、桃)の枝にさげておく。ナリモンがよくできるという。

22 十五日正月

(須玖)では、小豆ガユ(小豆ご飯のこと)を炊き大根を刻んだもの、味噌アエ(オヨゴシ)、カズノコを食べる。

朝、小豆ご飯の中に餅を入れる。神様にも供える。

(岡本)では、ススキ箸で食べる。

また小豆のカユに餅を入れたものをつくるが、これをダンダラガユという(上白水)。

(下白水)でも、小豆ゴハンに餅を入れるが、これもススキ箸で食べるというから、昔はオカユであったのだろう。オカズには大根を長さ二寸くらいに刻み、これに

酢醬油をかけたものを食べた(下白水)。

十四、十五日は午後休み。十六日は終日休み。須玖)

23 二十日正月

コワ餅(お鏡餅)を焼いて食べる(須玖)。

二、春から夏の行事

1 二月。丑ドシ

二月と十月の丑の日に、ウシドン餅を搗く。一升五合くらいの餅を搗き、これを一と重ねとほかに小餅をつくり、一升枡に詰める。この餅には砂糖なしの小豆の粒あんをつける。

二月には一升枡に八合目、十月には神様が持つて帰るというので、山盛りにする。土間に木臼を据え、その上手箕テシイを置く(またはオオガマの上に置くとともいう)。手箕はアキの方に向け、その上に餅を入れた一升枡を供える。なお焼物の牛や塩イワシも供える。

十月のウシドン餅は余分に搗いて、サカエ重ジユウに入れ、博多の町や家に下肥シメヅメを汲みに行くとき、出入りの家に配った。

(註) 丑ドシは、農作物の神で、二月に山から里に下つ

2 三月

てきて、十月には山に帰って行くといわれる。それで、二月を下り丑、(入り丑ともいう)、十月をノボリ丑(出丑ともいう)という所もある。

(1) 社日マイリ

春と秋の社日には、各戸からワラジガケで、博多の箱崎の浜までお汐井桶を持って汽車か徒歩でお汐井(清浄な海砂)取りに出かけた。

取ってきたお汐井の砂は神棚に供える。

〈上白水〉では、八幡様の境内にあるお汐井石に供えてから各家の玄関口に掲げてある竹製のお汐井テボ(またはお汐井箱)に配る。

このお汐井の砂は、外出のときや働きに出るときひとつまみ撒いて無事を祈るのである。

③ 社日とは、立春や立秋から五巡目の戌(ツチノエ)の日。それは彼岸の中日に最も近い日にあたる。

社は土地、部落のこと。それらの繁栄や五穀の豊作を祈る祭りの日が社日。この日に特別の意味を与えたのは、戌のツチが土に通じるからである。

3 四月

〔春日〕では、宮座の当番が十月十日お汐井を取りに行き、お饅米と共に春日神社の神前に供え、お祓いうけた上、後、各氏子の家に配った。お汐井はヒラクチ(毒蛇)の出る所にも撒いた。

その他の地区では、隣組で当番をきめ、毎日とか毎月一回とかお汐井取りに行った。お汐井を配る役は、当番の家の子どもで「お汐井あげましょう」と言って配って歩いた。

(2) 三日。女の節句

女の子の初節句には、家の里方から焼物のヒナ人形を贈ってくる。ヒシ餅、白餅、フツ餅、黄餅を搗く。嫁がアルク(里帰り)ので嫁の里にも餅を贈る。この日は必ず田螺(タニシ)を食べた。

(3) 春の彼岸

オハギか彼岸餅を搗いて、嫁の里方、親戚、近隣に互いに配りあう。お寺参りや墓参りをする。

八十八夜。お茶を摘む。このお茶を元日にのむと、「中気がつかぬ」という。

4 五月五日。男の節句

男の子の初節句には、嫁の里方から鯉ノボリとか張り子の虎を贈ってくる。ガメシバダゴ（がめしばまんじゅう）やササの葉かガマの葉で巻いたチマキダゴをつくる。チマキダゴを食べたあとのササの葉は保存しておいて雷が鳴ったとき焼くと落雷せぬという。菖蒲で鉢巻をし、門口の軒（オーダレ）にも菖蒲をあげる。この日、田ニシの味噌アエとか、ニラと一緒に煮て食べるのは土用のウシの日も同じだが、おいしかった。

5 六月

(1) 土用の丑の日

ウナギやドジョウ汁を食べる。田ニシにニラを入れて味噌煮にしたのがおいしかった。また、田ニシを茹で灰のアクでもみ、ニラと一緒に煮たが、「一皿いくら」で博多に売りに行った（岡本）。

(2) 十五日 祇園ゴモリ

祇園ゴモリといってお宮でオコモリして休む。祇園ダゴをつくり、博多祇園のヤマ見物に行った。この日、田に入るとコンコン鳥になるといふ（春日）。博多祇園に行きたいが、田に働らかされて、コン

コン鳥になって飛んで行った（岡本）という話がある。

また、肥をまいていて、ヒラクチ（まむし）に足をくいつかれたという話もあり、この日田に入るのはタブーとされていた。

また、十四の晩から十五日にかけて、博多祇園の山笠担きに儲われて行く青年が多かった。半天、鉢巻、シメコミは各自自分もちだが、酒食が出て、日当八十銭くらいだった。

各地区で行き先はきまっていた。たとえば（上白水）の青年は、博多の土居町に行き、土居流れや、西町の西町流れの山笠を担いだ。身長五尺五寸（一六六センチ）以上ないといけないといわれた。謝礼の酒を貰って帰り、白水八幡宮で祇園ゴモリをした（上白水）

6 盆

(1) 七月七日ころから十二日までに墓掃除をする。十日ごろから家紋のついた提灯をさげる（須玖）。

(2) 十三日
夕方、カドグチにカドドーロ（カドチョウチン）を、縁側にも提灯をさげる。

また、カドグチで麻ガラか松葉を焚いて迎え火とする（上白水）。

墓地に仏様を迎えに行くが、墓地に着いてから持つて行った提灯に灯をつけ、家に帰ってからカドチヨウチンにも佛様の灯明もこの灯を移してつける。

〔須玖〕

佛様を迎えに行くときは、はだしかゾーリばきで佛様を背負うような格好でおつれ申す。墓に供えた提灯の灯で、提灯をつけて帰ってくる（岡本）。

床の間にコモを敷き、シヨウレイ棚とし、その脇に別にガキドンサンのために、シヨウレイ棚をつくる。お供えものをするときには、必ずガキドンサンから先に供える。ガキドンサンはひもじかっている（飢えている）からという。

迎えダゴ（白ダゴ）を佛様に供えるが、このダゴはハナツマミダゴといって指さき二本でちよつとつまみ凹みをつけることもある。白ダゴは十八日までつくって供える。白玉粉で丸くつくり、何もつけない。ガメノハ饅頭も供える。

アチャラ漬けは、佛様の好物というのでつくる。これはイモガラ、ナスビを刻んで塩もみして、野菜、コブ、ウリ、氷ゴンニヤクを混ぜ、酢、砂糖であえ

たもの（下白水）。

〔須玖〕では、フ、ウリ、ナスビ、キクラゲ、シヨウガを刻み、酢であえたものをいう。

そのほか、お供えものはアラメ、南瓜、野菜豆など。初盆の佛様に供えたお菓子（ボンガシ）は、子どもが勝手にとつてもいいとされていた（小倉）。

(3) 十四日

佛様オガミに親戚、知人の家に行くが、初盆の家には部落の人がお参りする。ご飯、アチャラ漬け、煮シメを供え、オハギをつくる。大正時代には盆踊りはなくなつたが、以前は盆踊りがあり、初盆の家に行つて踊つたという（下白水）。

(4) 十五日

佛様に供えるお茶は七回あげる。（須玖）では七回半あげるといふ。「半」といふのは、夕方佛様を送る際ちよつとあげるのをいふと。

〔下白水〕では「お茶トー」といふ、十五回あげるという。

ダゴやおハギを供える。

十三日と同様、カドグチで麻カラや松葉を焚き、夕方明かるいうちに佛様を墓地に送つて行く（上白水）（岡本）では、十三日と同様、はだしかゾーリばき

で佛様を背負う格好で墓地まで送る。佛様を送ってから「盆ヅナ引き」がある。夜遅く、ローソク、線香を持って、お供えものを蓮の葉に包んで川に流す。これをシヨウローオクリという。

(5) 十六日

一人前の草刈りをしてから「朝からヨコイ(休み)」をする。十三日から十八日までの間は、毎日ダゴをつくり佛様に供え、各戸にカドドーロをさげた。(春日)。

7 盆ヅナ引き

盆ヅナ引きは北部九州の各地に盛んで、春日市でも各区にあったが、ここでは(上白水)のものを記す。

十四日に小学生がシンゲ川の堤防でカヤを切ってきて苧にはカズラと麦ワラを入れ、外がわには各戸から集めたワラで直径七、八センチ、長さ三〇メートルくらいの綱を、お寺の屋敷のイチヨウの木(後年、風で倒れた)に引かけて青年が三つ綱ナイにする。

十五日夕方、石塚のお観音様の前の道路で、青年と子供供の組に分かれて引く。三回引くが、引く前に青年が、「祝いめでた」を三回毎に唄ってから引く(この「祝いめでた」は普通唄われるそれとは節廻しがちがっていた)。

綱引きは、勝ち負けには関係ないが、結局子供組の方に勝たせるようになっていた。

綱引きが終ると、綱の真中からナタで切断する。綱は入札して落した人が堆肥として引取った。

十五日は夕方、明るいうちに佛様送りをし、シヨウロウ送りの前に綱引きをする。それは「佛様の足が立たぬから」とか「佛様は盆ヅナに乗って帰る」(須玖)とかいわれているからだという。

三 秋から冬の行事

1 七月七日

(1) 田ホメ

家長が早朝、自分の田に行き「よか田ね、よか田ね」と唱えながら、田を見まわり、神酒を田に注ぐ。この日は田に入らない。

(2) 七夕(タナバタ)節句

稲の朝露をとって、これで習字をすると、字が上達するという。ガメノハダゴをつくる。キキヨウ、カルカヤ、オミナエシの花を床の間に生ける。サナブリ(田植上り)のとき、苗を三把、荒神様に供えるが、その苗で神佛具や鍋釜を洗うと油氣

がよく落ちるといふ。女性は、この日洗髪すると汚れがよく落ちるといわれ〔岡本〕ではムコギの葉やピンツケカヅラの葉を刻んだものや、ワラ灰の汁で洗髪した。〔須玖〕でも、川で洗髪した。

またこの日は、大掃除を行い、巡査と区長とが掃除検査に廻った。〔小倉、岡本、上白水〕では「タナバタ節句の井戸さらい」といい、井戸さらいをした。

桶の輪竹や、物干竿にするためこの日伐った竹はタナバタ竿といつて虫がつかないといふ。

(3) 虫追イゴモリ

虫追イゴモリといつてお宮に集り会食する。

七日、男の子が太鼓や鉦を叩いて作道（サクミチ）を通り部落の田を「虫オーター虫オーター」と唱えながら廻る〔須玖、岡本〕。

〔春日〕では、十五日で、村の入口にシメナワを張り、獅子マワシをする。また氏神様のお札を竹にはさんで田に立て虫ヨケとする。

〔小倉〕では、七月二十八日が虫祭りで、川上の上白水から川下の須玖の方へと、子どもたちが鉦太鼓を叩いて稲田の虫追イをして、他地区との境にお札を立てる。住吉神社に集つて会食してオコ

モリをする。

〔上白水〕は二十八日が虫追イゴモリ。青年たちが鉦太鼓を叩き笛を吹いて区の境をまわり、お札を竹にはさんで立てる。

〔上白水〕は、お池（白水池）の水のこない日〔三十一日〕にした。天満宮に春日神社の神主を招いて、お祓いをして御幣を切つてもらい、それを青年が田の畦や他地区との境に立て、鉦太鼓を叩いて廻る。

2 八月

(1) 一日、八朔（ハツサク）

産膏、八朔の節句の項参照。

(2) 十五日、イモ名月

醤油をつくつたあと的小麦ワラを屋敷内に積んでいるが、その上にお膳を据え、琉球イモ（甘藷）、トウノ豆、柿、ダゴをお月様に供える。子どもたちが「名月様にあげて下さい」とか「イモあげちゃんないや」（芋をあげてくれませんか）とかいって、引きに（盗みに）くる。これは「早いモン勝ち」であつた。

(3) 社日マイリ

「三月、社日マイリ」の項参照。

(4) 秋の彼岸

「春の彼岸」と同じく、お寺参りやお墓参りをする。オハギをつくる。

3 九月

(1) 十五日・粟名月

粟こ飯こ飯こ（粟をいれた小豆こ飯）を神様に供え、栗やダゴをお月様に供える。これもイモ名月と同様、子どもたちが引きにきた。

(2) オクンチ

本来は九月九日だが、十五日に行う。

〔春日〕では十七日。各家で米の麴で甘酒をつくる。赤飯を炊き、餅を搗き、ドジョウ汁をつくる。また、寒天で菓子をつくる。これをカntenという。親戚を招いて会食する。青年の奉納相撲がある。

今年の新ワラでシメナワをない、氏神様に奉納する。これをシメウチという（須玖）。

〔上白水〕でも十七日の白水八幡宮の宮座にそなえてシメウチをした。

大正の中ごろ、旧筑紫郡では、オクンチを新暦

十月十七日とすることに決めた。

4 十月・イノコ

一番イノコ（十月初めの亥の日）にイノコ餅かオハギをつくって、荒神様に供える。

イノコ様に子ども数だけの餅を供える（岡本）。夜、子供がナラコ（榎の実）を、その年に男の子の生まれた家の雨戸にパラパラと投げつけて廻った。

〔須玖〕。

初めの亥の日を男イノコ、二度目の亥の日を女イノコという（上白水）。

この日からユルリ（囲炉裏）を開ける。

「イノコ餅を食べぬと蠅が追えぬ」といい、この日ごろから蠅がいなくなる。

5 十一月・冬至

トージ、トーヤといい、ポーブラ（南瓜）に小豆を混ぜたものを食べる。これを食べると中気がつかぬという。

また、甘酒をつくって神様に供える。その甘酒をのむと夏ワズライをしないという（上白水）。

四 通年

1 荒神坊サン（コウジンボンサン。座頭サン）

荒神坊サンが各家の荒神様を拝みにきた。

男性で暗眼盲も盲目の人（モロメクラ）もあつた。家を建てるときは地鎮祭、新築の家へのヤオツリ、家相をみてもらうとき、掘り井戸をつぶすとき（これを「水神アゲ」という）などにお祓いをしてもらった。

荒神坊サンは、年六回（一月おき）来た。お荒神サン（カマド）の前で三度読経して最後に琵琶を演奏する。お礼として、白米五合か一升出した。

お荒神マツリは一日に二軒かけもちで、一軒の家で三十分くらい拝み、他の家に行つて拝み、都合一軒の家で三回拝むが、このときは黒米（玄米）三升餅一重ね、子餅二十三個をお礼として出した（上白水）。

年に一回、二月ごろ来る。土間の荒神サンに塩と米を供え、ナカエにあがつて琵琶を演奏して拝む。お礼には白米二升（下白水）。

二月四日の星マツリ前に泊りがけで、盲目のボン

サンが鳥飼から来た。星マツリ（年マワリ）のわるい人に厄ヨケのお札を配つた。

荒神サンは、近所の数軒を廻るが、交互に廻つてきて、一軒の家に都合三回来て拝む。

大ガマに白米三升三合を供え、その前にムシロを敷き、琵琶を奏する。それをクズリピワといい「クズレが上手だ」などと批評した。謝礼としてお供えの白米三升三合を出した（須玖）。

一年に二回くらい来た。一日に三軒を交互に廻り、一軒で三回拝む。謝礼は白米三升三合（小倉）。

暗眼者が年三、四回来た。麦や稲の出来たころや年の暮に。年のメグリのわるい人にはお札を配つた。謝礼は米一、二升（春日）。

なお、荒神ボンサンについては『住居』の『地鎮祭』の項参照。

2 時刻（トキ）

時計が普及していない時代だから、田畑の仕事は夜明けから日暮れまでで、影の伸びぐわいで、今何時（ナンドキ）かを判断した。

また、須玖・小倉・春日の田圃では、雑餉隈駅（現南福岡駅）から発車する汽車の気笛で時刻を判断し

た。

正午の時刻は、博多で大砲の空砲をうつのを「おひるのドン」といった。これは明治二十二年からあったという。

区会青年会、処女会などの集りには、触れ太鼓をたたく。青年会には三つとか、処女会には二つとかきめていた（小倉）。

柱時計を買うには「時計講」をつくり、毎月積立てをしてクジにあたった人が落して買った。

柱時計は明治十年ごろは一円五十銭だった。そのほか、傘講、リヤカー講、自転車講などもあった。

3 夜ナベ

一晩に米、麦を八升くらい唐臼カマを踏んで搗いた。

昔は杵（キネ）で手で搗いたという。米をサビルサビル（搦別する）のも手箕テマイだが、これもきつい女の仕事であった。

夜九時、十時ごろまでしたが、特に夜食は食べない。また糸ヒキ、縫物、着物やふとん地をキンタン（砧）で叩く仕事もあった。夜ナベをしないのは庚申の晩だけであった。

4 雨乞い

早ばつときは、ワラで龍をつくり、ムラ中を担いで廻る。家々では、これに水をかけた。終るとこの龍を川に流した（春日）。

宝満山に区の代表二、三人が近村の人と共に、夜、松明（タイマツ）をつけて登り雨乞いをした。青年や子どもが雨乞い相撲をした（上白水）。

太宰府の水瓶山など松明をつけて登ったり、座頭坊サンを招いて、三日三晩雨乞い祈願をした。雨が降ったときは、ゴ願ゴザンホドキといって神社にお礼をした。お礼はあらかじめ「箱崎浜の社日塩」「お百度参り」「男角力」「女角力メナカク」などと書いたオミグジを作って、神主に引いてもらい、当り札のとおりのことをしてお礼をした。女角力が当って大にぎわいをしたこともあった（小倉）。

十六、産育（出産・育児）の儀礼

人は生れてから七歳になるまでは、心身ともに不安定な状態にあるので、これを護ってやる必要がある。そのため神にその加護を願うのであるが、それは実に丹念な儀礼を経ねばならなかった。

1 出産予定日

妊娠したことを「サンマイになった」といい、出産予定日はツキノモノがなくなつてから、まる九カ月か十月十日（トツキトウカ）といわれている。

最初の子の場合は、出産の十日か一カ月前から里方に帰つて産むというのが多い。そのため里方では米一俵分くらい負担がかかるという。

2 安産祈願

妊娠五カ月か七カ月目に、神功皇后の応神天皇安産の伝説によるお産の守り神宇美八幡（粕屋郡宇美町）にお参りして、「ウブ湯のお水」や子安石をいただいできて、神棚にまつておく。「お水」は陣痛のときいただく。子どもが生れると、いただいできた石と、ほかにもう一つの石を添えてオ願ホドキに参る。オ願ホドキは早いほどいい。

また、粕屋郡篠栗町のお大師様に参つて、ローソクをいただいできて、産気づいたらそれに点灯すると産が軽いいという。

春日神社の末社三郎天神はお産の神様で、お産が近づくとお参りする。

なお、正月十四日の夕刻、前年結婚した嫁ゴが住吉神社（小倉）に詣るのを男の子がワラ製の棒で尻を叩く行事も、子室に恵まれるようにとの呪（マジナイ）である（「年中行事」の項参照）。

3 出産前後の禁忌・俗信

便所の掃除をよくすると、よか子が生れるという。火事を見るな、葬式に行くな、高い所に手をあげるな、ころんではいけないなどと戒める。産後十一日目までは、神様に供えものをしない。（十一日目）が床アゲ、ヒアケだから。

産後二十日間はクドの前に立つてはいけない（小倉）。乳の出がわるいときは、佐賀の太田の観音様の溝掃除をしてくると、よく出るという。

初子は、九月二十三日の太宰府天満宮のドンカンに背負つて行き、ドンカンカゼに吹かせると丈夫になるという。また、ホウソウ（疱瘡）を植えた後は、狐がつくといつて、子どもを山の方へ連れて行かないことにしていた。

4 オビ祝い

オビカケともいい、妊娠三カ月目の寅の日（須玖）と

も六カ月目の初めの戌の日（岡本）ともいうが、一般には五カ月目の戌の日に、産婆（ヘソノババサン）が妊婦に岩田帯をしめさせて、胎児の位置を安定させる。

この岩田帯は、紅白のサラシ木綿三尺三寸で、赤飯、小鯛二尾と共に、嫁の里方から贈ってくるので、近所の人を招いて馳走する。これをタノミ茶という。

（岡本）では、岩田帯は六尺三寸の白木綿だが、これは葬式のときのゼンの綱と同じだから、隅に紅をつける。

5 出産

昔は、臨月でも農事に励んだので手足がむくむような中毒症状を起すことがあった。

お産は、腰窓のある薄暗い納戸（ナンド）で、畳をあげムシロや新聞紙を敷いた。

お産にお金をかける習慣はなく、何でもありあわせのものので間にあわせた。産後の消毒もままならぬ時代だが、それでも産褥熱も出さなかつたのは抵抗力が強かつたからであろう。

お産は、フトンを折り重ね、それに凭れ天井からさげた縄にすがつて坐産であったが、それでは介護がしにくいので、寝産をするようになったという。

お産は満ち潮時がいいといわれた。これは大神宮様の

暦で時がわかるが、余りこれを強調すると都合がわるいので特に言わない。

「七月（ナナツキ）子はふとるが、八月（ヤツキ）子はふとらぬ」といわれている。

昔は逆子（サカゴ）や早産（ハヤデ）が多かつたのは、栄養状態がわるかつたせいであろう。双生児（フタゴ）が生れるのは、きらわれた。

産湯（ウブユ）は、嫁入りのとき持参した中のタライで使わせ、その湯は方角をみて、アキの方（年の神のいるめでたい方角）に捨てる。

ヨナ（胞衣、アトザン）は、素焼の土瓶に入れ墓地に埋めたり、カメに入れて納戸の床の下に埋めたり、踏みやすい軒の下に埋めた。また、川に流すときは、塩をまいて「川の神様よけてつかーさい」と唱える。

ヘソの緒は、保存して、腹痛や発熱のとき煎じてのませた。

お産があるとすぐ、ウブメシ（ウブゴハン）を炊き、ナマクサケを添えて、床の間に供え、産婆や加勢人に出した。

（岡本）では、ウブメシを大黒柱に供え、ごはんの上に小石を一箇のせる。これは生児の首がよく据わるようにとのマジナイであると説明されている。

昔は八人くらい生むのは、普通だったが、食中毒や疫痢で死亡する子が多かった。

多産の人や、四十歳前後でお産をする人や後家さんなどで墮胎する人もあったが、これをオロスといい、フキの根、ホーズキの根を子宮に挿入する方法であったが、危険を伴い腹膜炎を起すこともあった。

下白水在住の産婆、森山キミさん（明治二十九年生）は十六歳で産婆の資格を取得し、大正五年助産院を開業、昭和二十年ごろ産児制限が唱えられるや、家族計画指導員となり、家族計画の指導に努めた。

6 産婦の食物

(1) 食べていいもの

妊娠中には田作り。産後はアワビ（髪の毛が抜けぬとか腹がせかぬとかいわれていたが、不消化だから食べさせないことになった）、コイの味噌汁（乳がよく出る）。塩イワシ（一度でも食べることでできる人はいいほうであった）。フ、卵、梅干、味噌汁、コブの味噌漬、アラメ、ワカメ、イモガラの干したものを汁の中に入れて食べると腹がせかぬ。

(2) 食べてはいけないもの

青サカナ（イワシなど）、ネギ、エンドウ豆、ナシ、

柿、ナバ類（シイタケなど）、アライモ（里芋）。

(3) お産の前後、亀屋グスリとか中将湯とかを血の道の薬とした。

(4) 赤児の胎毒クダシにフキの根を煎じてのませたり、朔さんの貝ガラ入りの毒クダシをのませた。

(5) 母乳の代用

オモ湯Ⅱ米を水に浸して摺鉢ですって炊いたものを妻をヒラカシて炊き、汁の濃いものに白砂糖を入れてのませる。

モチ米粉を煎ってオモ湯にする。ごはんのウワズミのオネバをオモ湯の代りにのませる。

(6) ウブ見舞には米アメ、アラレの煎ったもの、黒砂糖、カマボコ、ウブ着など。

初生児を里方で産んだときは、婿家から豆ゴハン（赤飯）を持ってくる。

7 ミツメ

出産の三日目をミツメ祝い（ソデツナギともソデトーシともいう）といい、嫁の里方からウブ着（ソデツナギまたはソデトーシの着物。男は黄か青色、女は赤色の着物）一重ね、赤飯、煮シメを贈ってくる。

男親が命名し、名前を書いて神棚にさげる。

お膳に赤飯を山盛りにし、魚を添えて脇に小石を置く、この石は川から据わりのいい小石を拾ってきたものとか、安産祈願のため宇美八幡からうけて来た子安石とか、後にはその代りに分銅フンドウを置くこともあった。首が据わるようにとのマジナイという

赤飯を炊いて近隣の人を招く。

8 オヒチャ

七日目に産婆が産婦に腰湯を使わせる。この日から戸外にある便所に自分で行けるのである。昔は七日目がトコアゲであったが、後には十一日目となった。

9 トコアゲ

十一日の祝いともいい、ウチワ（家内）だけで祝う。

婿家でお産をした場合、里からお産の手伝いに来ていた母親は、この日帰って行った。

この日まで産婦はけんたいで寝ておられた。産婆はこの日まで来た。十一日目をヒアケともヒアガリともいい、十一日までを赤不浄といって、神棚の前に白紙をさげた。産婦は十日までは井戸水を使ってはならず、十一日目に腰湯を使って起きる。そして十二日目から働くことになる。

〔須玖〕では、この日、老松神社の裏の川（お汐井川）の砂（オシオイ）をとってきて、家の周囲やカマドを浄めた。

10 宮参り

宮参りは、氏子入りの意味があるのであろう。男子三十日目、女子三十一日目（春日・須玖・下白水）と男子三十一日目、女子三十二日目（小倉・岡本・上白水）とがある。

赤児を抱いて宮参りする者は（小倉・上白水）では里方の母親であり、他地区は婿家の母親である。宮参り着物は、紋付一重ねを里方から贈ってくる。アテゾメといひ、後頭部のウブ毛をちよつと剃り、男子の額には大ガマの煤ススを、女子には紅ベニをつける。お宮でお祓ヒタイいをうけた後、拜殿に寝かせ、鼻をつまんで泣かせる。これは氏子にしてもらうためだと説明する人もある。帰途、親戚や近所に饅頭を配ってまわった。近所の人たちは紋付の紐にヒモ銭と田ツクリをつけて与える。

なお、お宮参りがすむまでは大きい川を渡つてはならない。河童（カッパ）に引かれぬ用心だという。

11 モモカ (モモウカ)

食いぞめの式である。男女とは百日目とか百十日目とか、または男子百十日目、女子百二十日目とかいわれている。

子どもは「ナナカマドふさぐし(いたずらをして近所に迷惑をかける意)ので、近所に赤飯、ニシメを配り、内々でお祝する。

三ツ目にソデトーシした着物を肩ヌイアゲする。モモカで首が据るといい、お膳に小石を一つ添える。食いぞめとして、赤飯を一口食べさせるが、モモカ過ぎたらご飯を一粒づつ食べさせるものだという。

12 初誕生 (モチフミ)

紅白のお重ねの三升餅(誕生餅)をお八寸(お盆)にのせ、その上にスシ桶をかぶせる。祖父がワラゾーリをつくり、男の子にはワラジ、女の子にはゾーリ(赤い布を緒につきつける)をはかせ、ゾーリにはアトカケをし、産婆が抱いてスシ桶の上を踏ませながら次のように唱える。「鶴は千年、亀は万年、太つて百まで百まで」(春日)「あなた百まで、わしや九十九まで、ともにしらがの生えるまで」(岡本)など。

餅踏みがすむと次の品々を七つか十二並べて取らせ將來を占う。

蔵のカギ、枳、箆、帳面、本、チキリ、硯、ソロバン(男)、モノサシ、ハサミ、針を通した赤い布(女)など。

13 初正月

餅二た重ね(一斗五升)と魚とを里方から贈ってくる。婿家からもヤリアイ(キリヤイ)といって餅と魚とお返しする。そして総領の男子にはハマ弓、女の子には羽子板も贈ってくる。

年の暮には、女の子にはモチテマリ(モチバナともいう)といって、柳の木の枝に餅や手作りのテマリをさげてやった。

14 初節句 (「年中行事」の「三月三日」「五月五日」の項参照)

15 八朔(ハツサク)の節句

長子が生れた八月一日の祝い。家の中に、青竹(笹)にお面、干菓子、米菓(タンザクの菓子という)さげて飾る。(下白水)。

《上白水》では男子は《下白水》と同じだが、女の子は

オヒナサマ（土人形に紙の着物を着せたもの）を近所に配る。

〔岡本では、「八朔」といい紙の着物を着た餅の人形を笹にさげる。〕

〔春日〕では、笹に短冊をつけたものや、団扇（カミシモ）をつけたお多福が描いてある）お面を近所に配る。

〔須玖〕では、「お節句の短冊」といって、短冊をつけた笹を家の中に飾る。

16 オゼンスワリ

長男、長女が三歳になったときの祝いで、七品のご馳走で祝う。嫁の里方から四ツミの着物とポツポ膳（オ椀）やオヒラもついている）を贈ってくる。女の子には、足袋やカッポン（下駄）もくる。ポツポ膳とは、ヒノキの素地に泥絵の具と墨で松竹梅に鶴亀を描いたもので、ポツポ（鶴）の絵のついたお膳という意である。博多の箱崎や馬出名産の曲げ物で男用は脚が低く、女子用は高い。また、滅多にないことだが、百三歳になるとポツポ膳に坐らせるという（春日）

17 ヘコカキ、ヒモトキ

男女とも七歳の祝い。今日の七五三の祝いに相当する。

嫁の里方からソエミ（ミツミともいう）の着物を贈ってくる。

男の子には木綿の紋付袴、クチナシで染めたフンドシとか金太郎サンの絵のついた五尺のフンドシを、女の子には赤いヘコ（腰巻）を贈ってきた。

男の子は出世を願って、羽織、袴を着せて親戚、近隣を招いて祝った。

18 子預け

知恵のあまり多い子は、長生きしないといい、六カ月くらい親戚の家に預ける。弟が生まれ、それが丑（ウシ）年生れなら、親戚に六カ月くらい預ける（岡本）

19 一人前

男性は若者組である三期組合（春日）や青年団（小倉）に加入し、前髪ゾーになった十六歳、青年団に入る十七歳（須玖）で、大人の仲間入りをするようになる。

明治時代には、男性は十六歳になると幼名（戸籍面の名前）からシコ名に変える人が多かった。改名するところを披露した。以後世間一般にはこのシコ名で通った。

改名する場合、或る家では代々「伊」の字のつく名、伊三郎、伊十郎、伊助などとする家があった。

女性は名前変えはしない。

また、十六歳になると一月十六日〔岡本〕とか四月十六日〔春日〕に男女ドシ連れて宝満山に登った。そうすると良縁が得られるというが、これは一種の成人式であろう。

米俵が担げられるとか、田が鋤けるとかも一人前の要件である。またお宮にある力石（五〇〜六〇キロ）や、墓地の墓石を持ち上げて力を競ったが、これも若者たる要件であった。

女性は処女会に加入する十六歳くらいが大人の仲間入りであった。

十七、厄年

特定の年齢になると、厄難が身にふりかかると考えられている。そこでその厄を払う、厄を落す、厄を祝うことをするのである。

厄年は男性二十五、四十一、四十二、四十三（大厄といい前厄四十一、本厄四十二、アト厄四十三。四十二は「死二」に通じる）、四十四、六十一（還暦）、七十七（喜寿）、八十八（米寿）、九十九（白寿）、百歳。

女性、十九、三十三（「散々」に通じる）、四十四歳、

以下男性と同じ。

女性三十三歳、男性四十一歳の二月ごろ、厄の餅を親戚、近隣に配り、女は小さい紅白（または黄白）の餅、男も紅白（または黄白）の一升五合餅に田ツクリと錢十三銭（女）、四十一銭（男）とを添えて、人に出合わないうよう早朝、三叉路（ミツガノ、ミツガナ）に置いてきて、他人に拾ってもらう。その際、女はゾーリ、男はワラジをはいて行くが、帰りにはこれを脱いで、はだしで来た道と異なる道を帰ってくる。

厄の餅を拾った人は、マン（運）がいいとされ、その餅は近隣と分けあうし、青年なら皆でゼンザイをして食べる。拾った人が一人で食べると、厄を一人でかぶることになるからである。

〔上白水〕では厄の餅を八幡様の鳥居の右側に置いてくが、〔下白水〕の者は、鳥居の左側（下白水に近い方）に置いてくるという。

また女性三十三歳の厄オトシには、道に腰ヒモを落してくる〔春日〕といい、〔下白水〕では、親戚から帯を贈るといふ。

四十四歳の男女の厄年には、四月四日にオツボ（庭園）の梅の木の下で酒盛りをする。その際の料理には、七品のフの字のつく品（麩とか鯛とか）をつくるものだと

われた。フ（幸運の意）にあやかるといふのである。六十一歳Ⅱガノ祝い。ホンケガエリ（本卦ガエリ）。赤いチャンチャンコを贈る。

八十八歳Ⅱ米寿といふので、男性は米をはかつてならず竹製のトカキリを、女性は竹製のモノサシを配る。尺竹祝いともいふ。赤い頭巾とチャンチャンコを贈る。

百歳Ⅱ白頭巾、白いチャンチャンコを贈る。

十八、婚姻の儀礼

1 初婚期の年齢

男性は徴兵検査や兵役の関係で二十七、八歳まで。女性はやい人で十五、六歳から二十歳くらいが適齢で、二十三、四歳では遅すぎるといわれていた。

また、年うえの嫁をもらうと金が貯るといわれた。

2 通婚圏

村内婚が多く、村外でもおよそ一里くらいの歩いて行かれるほどの範囲内であった。

嫁をもらうには、相手方の血統や家柄を重んじ、家格のつりあいを重視する傾向が強かった。

未婚の娘をもつ親は、祝言の席などに娘を給仕に出し

てその機会に「娘を見てもらう」ということがあった。

昔は〈春日〉と〈小倉〉とは互に通婚しなかつたといふが、その理由は判然としない。あるいは春日の氏神様の春日神社は「火の神様」で、小倉の住吉神社は「水の神様」だから性（シヨウ）があわないとか、水利関係で仲たがいにしたためだとかいわれている。

また、〈上白水〉は湿田が多く、山林原野が一五〇町歩もあり、個人所有であるため、農家の仕事の苦勞が多いので「月に三十五日働かねば食えぬ」とか「上白水に嫁に行くよりグラノ木（稔）に登るほうがよか」といわれていた。

なお、他地区から嫁をもらった場合には、その地区の青年団に対して酒二升とか祝儀として五円十円を贈つて挨拶せねばならぬことになっているが、これは娘はその地区のもの、つまりその地区の青年が「嫁入りまで娘を守つてやったのだ」という意識があつたためと思われるのである。

3 仲立ちニン

仲立ち人は、諸事にさばけた信頼のおける世話ずき人物に依頼するが、仲立ちを専門にする人もあつた。

また、仲立ち人のほかにコシウダギという役がある。

「あそこによか娘がおる」と教えてくれたり、仲立ち人が相手方の家と馴染みがなく、仲立ち人だけの力では承諾が得られそうもないときにはコシウダキに口添えしてもらう必要があった。仲立ち人だけで話がスムーズに運べばコシウダキの必要はないわけである。

仲立ち人は、着物の裾がすり切れるほど両家の間を往復せねばならぬ役目だからという意味で、謝礼として十カダチ着物とか米一俵とかを贈った。

また、結婚後五、六年間は盆暮に餅、酒、下駄などを贈った。

4 見合い(ミエー)

娘の家か、その近くの家に婿方の父、本人、仲立ち人コシウダキなどが赴き、娘の母親と会合するが、娘はお茶を運ぶだけである。

娘本人を見なくても、その母親のキリヨウ(縹緞)を二割引きすればわかるなどといわれた。

5 婚約成立

話がまとまると、仲立ち人は吉日を選び、シルシの酒(スミ酒ともいう)一升と鯛一尾を嫁方に持参して祝言(シユウゲン)の日取りを打合せる。

嫁方では親戚近隣を招いてシルシヒロメをする。

その後、結納としてお茶(酒、鯛)と着物(三、五、七品。七品が最も多い)、丸帯を贈るが、これをサシアワセという。結納の返しはしない。

また、親戚から嫁方に贈るお祝いの品(着物、下駄)をもサシアワセという(岡本)。

6 婿入り

わが国の婚姻方式は、古くは婿入り婚であったが、後嫁入り婚に移行したといわれている。その遺習として嫁入りに先立って婿入りの儀礼が行われた。

以前は、嫁入り(祝言)の日よりも前の日に行われていたらしいが、嫁入りの日、午前中に花婿が仲立ち人、親戚、ムコマガラカシ(親戚の若者)などを同伴して嫁方へ赴き、嫁の父母、兄弟と盃をして帰ってくる。これを茶ムコイリともいう。

その際、花嫁は給仕に出る。花婿は嫁方の親戚、近隣に挨拶廻りをして扇子(末広、ムコドンセンス)を配る。

7 嫁入り

嫁入り道具は、嫁入りの前日か、当日の昼間に運びこむ。タンス、長持、鏡台、針箱、タライ三つ(大は洗濯

用、中は出産のときの産湯用、小はチョンダライで洗面用)など。

花嫁が実家を出るときは、ミタテノ膳を出し、夕刻オモテから出て、使っていたメシ茶ワンを門口で打ちつけて割り、ワラ束に火をつけ、オイエと庭を掃き出す。花嫁は綿帽子(ヤロウボウシともいう)をかぶり人力車で行く。婿方の近くの中宿に入つて休憩する。

婿方から中宿に弓張り提灯をさげて迎えに行く。花嫁は婿方の勝手口から入りキンタ(砧、木製の踏み台)から仲立ち人の夫人か婿方の母親から手をひかれて上る。

「手をつかぬように」との意であるという。そして仏壇にお参りする。夫婦盃は三々九度。親子、兄弟の盃は一献。盃ゴトがすめば花嫁は、綿帽子をぬぐ。祝言の翌日を三ツ目といい、オ茶ノミ(ミシリ茶ともミシリアイともいう)といって、昼間は近所の女性を、夜は本客(ホシギヤク)祝言のとき招かなかつた親戚)や男友だちを招待する。

(春日)では、これをゴシノミといい、この招宴は二日間わたることもある。また料理の手伝いをした人たちを招宴するのをゼンザライという。三ツ目までは、花嫁は島田を結っている。

8 嫁盗(ヌスミ)

親が承諾せぬ娘を強引につれてくる方法だが、実は正式に祝言をあげると経費がかさむので、ヌスミと称してつれてきて簡単に祝言をあげる場合のほうが多かつたのである。

9 里アルキ

嫁が実家に行くことをアルクという。

(1) 一番アルキ(ハツアルキ) 祝言から三日目か五日目、夫婦で日帰り。嫁は勝山(丸髻)を結って行く。少女二人(ツキテという)を連れて、紅白の饅頭、お茶を持参して里方の親戚、近隣に配る。帰りは実家から饅頭、お茶を持参してきて親戚、近隣に配る。

(2) 二番アルキ 祝言から一〜二週間後、夫婦でアルク。嫁だけ一泊。

(3) 正月アルキ 結婚後初めての正月の二日。日帰りしないと田植えのとき稲(苗)にドベ(泥)がついて植えにくくなるという。その際、半俵分のメーモン餅を持参。この餅は大きいほどいい、切つて親戚、近隣に配る。

〔春日〕では十四の婿押し行事がすんでからアルク。
(4) そのほか、三月の節句アルキ、五月の節句アルキ
麦ウラシアルキ（麦刈り前）、サナブリアルキ（田植、
えアガリ、ツクリアガリ）、盆アルキ、センタクアル
キ（九月ごろ）、春、秋の彼岸アルキ、秋アガリ（刈
リアゲ）アルキなど。

10 オハグロ

嫁入りすると、歯を黒く染めるためにオハグロ（カネ、
鉄漿）をつけた。これはフシ（五倍子）と鉄屑を使った。
大正十年ごろまでつけたという。

また、子どもが生れると眉毛を落した。

十九、葬送の儀礼

1 死後の処置

死水は居合わせた身内の者がとる。

医師が死亡診断した後、死者を北枕にして、逆さ屏風
を立て、蒲団も逆さにして枕経をあげる。神棚には白紙
を貼る。

一合ご飯を炊き、枕メシとして供え、これに箸を一本立
て、お花、線香も一本、お水、オクリダゴを供える。猫

が死者を跨ぐと、死者が起き上るといい猫を部屋に入れ
ない。

着物を着かえさせる。これをカブリ着物といい、あとで
お寺に納める（岡本）。

2 同齡感覺

アイドシ（同年輩）の者が死んだことを聞いたら、ほ
かの人が背後から両耳をふさいでやる。

〔春日、上白水、下白水〕では、ヒツパリダゴといって
白ダゴをつくって、これで両耳をふさいでやる。

3 納棺

湯灌は畳を裏返しにして、角を四つに合わせ、ムシロ
を敷いてタライを据える。

水に湯を注ぎ、柄杓子でかけ、ワラで身体をこする。
柄杓子は竹で作り、使用後は焼却する。湯灌後は、形式
的に頭を剃り、女性には化粧をほどこす。湯灌の水は床
の下か、北の方角に流す。

経カタビラは晒木綿一反を、身内の女性三人でハサミ
を使わず手で裂いて縫う。縫糸はオ（麻糸）を用い、糸
の端は結び目をつくらない。足袋、手甲、脚絆、三角キ
レをつけさせ、手には数珠をかけ、頭陀袋（中に六文銭、

枕メシ、オクリダゴ、愛用の酒、タバコ、身内の者の爪を入れる）を着用させる。

土葬だからカメ棺に納棺。カメの底にカマスカムシロを敷き、遺体は膝をまげ、前方に手をまわし、足を抱く形にして、両手の指を合わせる。棺にはオ茶（シバ茶）をつめる。

遺体の顔の向いた方向のカメの外側に赤い念佛紙を貼る。夫が死亡したら妻は髪の毛を切つて入れる。妊婦が死亡したときは、胎児を取出して一緒に納棺する。

通夜（夜トギ）の客には、ヒキワリゴハンを出した。これは大豆か黒豆を炒つて、手箕か枡の底でもみ、皮を落したものを混ぜて炊いたものである。また親戚から持参した夜食は、精進料理ではなく、酒も出す。

香典には「佛前」と「香典」とがあり、「佛前」は佛様に供え、「香典」はそれよりも少額で、坊さんが持ち帰る（小倉）。

女性が悔みに行くときは白米一升。男性のときは金銭を、また親戚は白木綿一丈を旗状にし、供えた人の名前を書き、葬式のとき墓地に持つて行く（上白水）。

香典返しはしない。

4 葬式組

葬儀一切の世話は、組内（隣組）でする。

まず、組内で相談して役場、寺、親戚、知人への死亡の通知に行く人をきめる。死亡の通知に行く人をオモウセ、オシラセ、シラセなどといい、必ず男性二人で、昼でも弓張り提灯をさげて行つた。これは死の忌に対抗するためのものと思われる。

組合には、地取帳（墓地の配置、順番表）がある。墓地には、各家の地所があり、そこを掘るが、地所のない家は、区長が地取りをきめ、地取帳に○印をつける。地取りの道具の三又鍬、唐鍬（短柄）は組合で保管している。地取りには五人くらいが当番で行く。地取りの人には、必ず真丸い大きいニギリメシにゴマと塩をつけたものと酒、煮シメを出す。穴の深さはおよそきまつているが、少なくとも三メートルは掘る。

穴を掘り初めるとき年長者が「天の神、地の神、立ちのき給え、死の神が立ち入るぞ」と唱えて、土を四方に払いのけてから掘る（小倉）。

穴を掘つてから、その周囲にロクドー六本を立てる。

（岡本）では、岡本の人が死ねば、沖、野添の人が、仲野添の人が死ねば岡本の人が地取りに行つたという。

葬儀用具は組の人たちが調製する。

○棺担き棒（丸竹）

○棺担き縄（打たない荒ナワ、三尋半、二本、左ナイ）

○墓標

○送り火（モトダイ、ワラを束ねたもの、葬列にともす）

○ロクドロー（墓に立てる竹製のローソク立て）

○シカ花などである。

野辺送り

出棺前、オイエ（座敷）で左廻りに三回棺を廻しながら「願戻し願戻し」と唱える。

棺カキは前後二人で、前には年長者、白紙を緒に巻いたゾーリ（以前はワラジをはいたが、これも白緒）で座敷からはいて出る。

棺は玄関から出し、一旦玄関に据えミタテのお茶を供える。

出棺と同時にナカエとニワを掃くが、この掃をナカエボウキ、ニワボウキといい、荒ナワで作り、使用後は焼却する。出棺のとき柄杓子で水を屋根にはね上げる。ご願ホドキの意であるという。また僧侶は出棺のとき屋根の方を見つめているが、これはマヨケのためであるとい

う。出棺の際、故人使用のメシ茶ワンを門口に打ちつけて割り、ワラ束を根元の方から焚く。出棺前、会葬者にオトギを供する。精進料理で、味噌汁、煮豆、酢のもの酒など。箸は組でつくった竹箸で、使用後は焼却。

女性はつぶしの髻の精進髪（オイ出し髪ともいう）を結び、髪油は用いない（髪油をつけるのは四十九日過ぎからである）。

近親者の男はワラジ。女はワラゾウリで共に白と黒の紙を巻く。帰りには脱いで帰ってくる。葬列は神社の前は通らない。順序は僧侶―モトダイ（火をつける）―龍（ベンガラで赤青色の龍を描いた紙の旗、竿。先端にも龍をおく）―ハタ（錦の五色の旗、親戚縁者が贈る）―ハコ（梓）―ロクドロー―シカ花―ゼンの綱（晒木綿一反（二丈八尺）をカメの前方に結び、近親者が引く）―棺（カメ棺でヒトリガメともいう。左ナイのカン縄をかけ、カブリ着物といい故人の用いた一番いい着物をかけて墓地まで行き、後、お寺に納める）―一般会葬者の順。

埋葬して帰ると用意してある塩と水で手を洗い浄め組内を廻って会葬の礼を述べる。

6 埋葬

カメは念佛紙が西方に向くように埋める。ロクドーも埋め、土饅頭をつくり墓標（戒名、死亡年月日、年齢などを書く）を立て、モトダイは焼却する。

カメにかぶせて行く死者の一番いい着物は、カメと共に埋葬する（小倉）。

埋葬の翌日、灰ヨセといい身内の者が墓地に行き、土饅頭を整理し、ハコ（梓）で土留めとし土饅頭の上におく。嬰兒の墓は土盛りで石を置く程度。

7 水力ケ着物（呼称不明。仮に「水力ケ着物」とする）

死後三日間、家の裏で北向きにした物干竿に故人の着物（袷）を通して水をかけ乾かないようにする。死者が火の山を越えるので熱いめにあわぬようにと説明されている。この着物は竿の右から通したら左に抜く（平素はそうしない）。

後には簡略となり、タライの水に着物を浸けておくようになった。

8 法事

七日間は精進料理で、その間、佛壇の灯は絶さない。服喪の期間は、ヒガカカルといって神様には参らない。その期間は、親は一カ月、兄弟はそれよりも短い。オジ、オバは二十日、イトコは一週間とされている（岡本）。

初七日から七日毎に法事をする。三十五日のヒアケまで神棚に白紙を貼る。四十九日（三月にかかるときは三十五日がヒアケ）には、「四十九日の餅」といって一升餅を搗き、四十九に分け、そのうち二つづつに手型、足型をつけてお寺にあげる（須玖）。だから平素は一升餅は搗くものではないとされている。

百カ日、初彼岸、初盆に法事をする。

9 年忌

一周忌（石塔は一周忌、三回忌、七年忌などの年忌に建てるものとされている。自然石で後面に俗名を彫る）。

三回忌（一周忌の翌年）。

七年忌　　十三年忌　　二十五年忌（普通は三十五年忌まで）
三十三年忌　　五十年忌（五十年忌にあう人はめずらしいのでむしろ祝いの気持がある）
百年忌

10 俗信

- 棺担きは、年に一回しかするものではない。
- 死亡の三日目には悔みに行くものではない。
- 正月に女性が死ぬと、その年は七墓並ぶ
- 悔みに一人で行くものではない。
- 三隣亡、友引、四の日、四のつく日には葬式を出すものではない。
- 戌（イヌ）の日に葬式を出すな（アトを引くから）。
- ウシの日に死んだら棺の中に紙人形を入れる。
- 経カタビラは、生前縫っておくと長生きする。

二十、民間療法

大正期には、すでにかなりの医療機関ができていて、憑きものおとし、呪（マジナ）いなどの民間療法が多くは、迷信として軽んじられ、とくに呪術療法への依存はうすれていたようで、現在これを採録することは困難である。

治病、疫除の神佛祈願も、一般信仰の領域に傾斜しながら伝承されているにすぎない。

しかし、草根木皮を主とする薬草療法は、漢方の知識

もあつて、民間療法の主流となつていた。

1 病氣祈願

篠栗参りや英彦山参りは、共同祈願の形を残す一般信仰の参詣であり、ひとりひとりそれぞれの神佛に心願をかける祈願の方が多く行なわれていた。

祈願するところは、主にムラ内の社寺、薬師様、観音様、地藏様、お稲荷様で、祈願の趣旨は治病、除疫、安産、延命、招福などであつた。この祈願の詳細は『むかしの生活誌』各編の「信仰」の項その他を参照されたい。

2 民間薬療法

大正時代には、近くに医者がいっても安易にその施療をうけるわけにはいかなかつた。もし医者にかかろうものなら病気によつては、シンシヨウ（身上）をつぶしてしまふ時代であつた。そこで病気になれば身近かな生薬に頼つていた。山野の植物のなかから伝承の薬草を中心に口伝を頼りに家庭療法をしたのである。薬草は煎服することが多く、専ら土瓶、ユキヒラを使用し、ひと握りの薬草を三合の水を、半量か一合になるまで煎じるなど、適宜の量と濃さに煎じていたようである。センブリやサフランの芯は茶ワンに入れて熱湯を注ぎ、ふり出して服

用した。薬草の採取は、梅雨明けから夏の土用ごろまで、日かげ干しにして紙に包み保存した。

ムラ内で一般に常用されていた民間療法は次のとおり。

A 薬草類

(1) はれもの、吸い出し

○ヒラクチ(まむし) 皮をはいで陰干しにし、水でのばして患部に貼る。

○ビル(ヒル、蛭) 患部に吸いつかせて吸出させる。

○ドクダミ(十字草) 葉をもんで患部に貼る。また、もみ汁を患部にぬる。陰干しにしたものを煎服。

○ネズミモチ 葉や皮をもむか噛んで患部に貼る。

○水仙 球根をすりおろし、卵の白身、メリケン粉をまぜてねり合わせ紙にのばして患部に貼る。患部の熱さまし。

(2) 擦り傷、血止め

○ゲンノシヨウコ、ドクダミ 生葉をもんで傷口に貼る。汁を患部につける。

○モグサ(フツ、ヨモギ) 生葉をもんで傷口に貼る。汁を患部に貼る。

○ネズミモチ 葉、皮をもむか噛んで患部につける。

(3) 歯痛、頭痛

○梅干 皮、肉を痛む歯の上やコメカミに貼って熱をとる。

(4) 神経痛、腰痛

○マタタビ 陰干しにして煎じてのむ。また、これを猫に与え、猫が噛んだのがよく効くという。

(5) 下痢どめ、消化不良

○ゲンノシヨウコ、オオバコ 陰干しにして煎服。胃腸病

(6) センブリ、ゲンノシヨウコ 陰干しにして煎服。

○ネズミモチ 実、葉、皮を陰干しにして煎服。

○タラノキ 根、皮を陰干しにして煎服。

(7) 咳どめ

○大根 すりおろしてのむ

○オオバコ、桔梗キキョウ 実、葉、皮を陰干しにして煎服。根を掘り取り陰干しにして煎服。

○キンカン(金柑) 実を砂糖漬にして食べる。気管支炎にも効く。

○青大将(蛇) 土瓶で黒焼きにし、摺って粉にしてのむ。

(8) 熱さまし

○卵酒 酒を沸かし卵を入れる。カゼ薬としても。

- シヨウガ湯―シヨウガを摺り、蜂蜜、酒を加え熱湯を注ぎのむ。
- 梅干湯―梅干を黒焼きに湯に浸してのむ。
- ナメクジ―黒焼きにし摺って粉にしてのむ。
- (9) 脚気
- タニシ―中身を煮て食べる。
- 朝露踏み―早朝、露のある草道を歩く。
- (10) 中耳炎
- ホトトギス―炭火の上にトタンをおき、黒焼きとし黄色の油が出たのを耳に入れる。
- キジン草(ユキノシタ、耳ダレ草)―葉のしぼり汁を耳に入れる。
- (11) 打ち身捻挫
- ステコ花(ヒガン花)―球根を摺り酢、ヒマの実の油と練り紙にのぼして貼る。肩コリにも。
- 里芋、シヨウガ―両者を摺りおろしてメリケン粉と練りあわせて貼る。
- ノビル―球根を摺りおろして貼る。
- モグサ(フツ、ヨモギ)―葉をスリバチで摺り、メリケン粉、卵白、酢と共に練り、貼る。
- 卵、小麦粉―卵白と小麦粉を酢で練って貼る。
- (12) 脳病、神経痛
- シン―茎を陰干しにして煎服。
- (13) 破傷風
- 伊勢エビ―殻を煎じ、汁をのむ
- コシヨウ―根三本を三合の水が一合になるまで煎じてのむ。
- (14) ヤケド
- 醬油―醬油をつけるだけでもいいが、亜鉛華を入れて筆でつける。
- (15) 菜種油―油を患部につける。水で冷やすより有効。婦人病
- サフラン―根を陰干しにして煎服。花の芯を干して熱湯でふり出してのむ。
- スモトリ草(スマイレ)、クソゴウラ(烏瓜)―いずれも根を陰干しにして煎服。
- オトギリ草、アカネ(苗)―いずれも根、莖を陰干しにして煎服。
- (16) シモヤケ、アカギレ
- クソゴウリ(烏瓜)―皮をはぎ、ねばねばした果肉の部をぬりつける。
- シヨウガ―葉莖を陰干しにし煎じ汁をぬる。
- ハクリ(山藺のような草)―根を包丁の背でこきぎ、ねばねばした汁をとりぬりこむ。

○飯つぶ―飯つぶをねりつぶしてぬりこむ。

(17) 眼病(トラホーム、眼ヤニ、眼イボ)

○サンシヨウ―実を摺りつぶしてのむ。

○石菖―根茎を煎服。

○ガラミ(野ブドウ)―茎を輪切りにして片方から
吹くと先端から汁がでる。その汁を眼イボにつけ
る。

(18) 肺炎、肺結核

○鯉―首を切つて生き血を酒にとかしてのむ。

○スツボン―首を切り生き血をしぼり酒にうすめて
のむ。

○食用蛙、ザリガニ、シジミ―いずれも煮汁をのむ。

○ヒラクチ(まむし)―皮をはぎ干して火にあぶり
摺って粉にしてのむ。

(19) 胎毒クダシ

○ドクダミ(十字草)―陰干しにして煎服。

(20) 皮膚のかゆみ。汗コ

○石菖―根茎を陰干しにして煎服。湯にたてて入浴
(シヨウブ湯)

(21) 血圧
○ヘチマ―茎の根もとを切つて水をとって汗コにぬる。

○柿―葉を陰干しにし煎服。干柿を食べる。

(22) 蓄膿症

○ドクダミ(十字草)―草をもんで鼻孔につめる。

(23) カゼヒキ

○柿(シブ柿)―柿をそのまま煎じてのむ。

(24) セキ止メ

○ミカン、金柑、ダイダイ、夏ミカン―果汁をしぼ
り熱湯を注ぎ砂糖を加えてのむ。

(25) 虫、蜂、ムカデに刺されたとき

○小便、齒クソ―さされたらすぐ、小便や齒クソを
つける。

○サイテン草―もんで汁をつける。

(27) ノドに魚の骨がたつたとき

○飯やダゴ(団子)を丸のみにする。

(28) 子供の病氣

○楊(ヤナギ)の虫―猫ヤナギの幹にいるサナギ虫
を火であぶりのませる。子供の虫トリ(虫クダシ)
に効く。

○ヘソノ緒―その子が病氣のとき煎服。

○天瓜粉(テンカフン)―子供の汗もに湯上りに。

B 手軽につくり利用した民間療法

(1) 硼酸―湯でうすめて硼酸湯をつくる。

眼の病氣のとき洗う。目ヤニ、トラホームに。ノドの

わるいときにウガイ薬として。

(2) アンモニヤ(肥料) 水でうすめてアンモニヤ水とし、毛虫カブレや虫、蜂にさされたときにつける。

○ヒラクチ(マムシ)の焼酎漬け 生きたヒラクチを一升ビンに入れ焼酎を入れて保存、皮膚病、傷腫れものに効く。患部の消毒用。朝、夕盃一杯のむと精気づけになる。

○ヒラクチの焼き薬 素焼の壺に入れむし焼とすり鉢で粉にする。小サジでのむと疲労回復。

(口)器の上に金網をおきヒラクチをのせて焼くと器に油がたまるのでそれを丸薬にする。精気づけになる。

○梅焼酎 焼酎に梅と砂糖を入れる。食アタリ、下痢、暑気アタリに水か湯で割つてのむ。

○ムカデ油 大きいムカデをビンに入れておくとき油の汁がでる。ヤケドのときこの油をつける。

C そのほか物理的療法では、高場の灸(朝倉郡三輪町上高場)の治療を受けた。一度治療を受けると、灸のツボがわかるのでモグサを買って家で灸をすえた。

モミ療法も家のうちで、肩たたき、腰踏みなど子供の手をかりるなど按摩まがいのことで体をほぐした。

家伝薬としては、須玖の起生散がカゼ、肺炎の良薬として広く用いられた。

置き薬は、越中富山の薬のほか、鳥栖市の荒木救済堂が年一、二回年末計算で入れ薬をしていた。また、粕屋郡須恵町の「田原の眼薬」同じく宇美町の「亀やの血の道薬」が多く用いられていた。

二十一、家畜の民間療法

1 牛馬は農家の重要な労力として、農耕運搬に使役するだけではなく、ウマヤゴエ(厩肥)をつくるために、どこの家でも一頭ぐらいいは飼っていた。もともと牧野のなところだから、生産と販売目的の飼育はしなかった。

したがって、農耕に必要な限度の頭数に限られ、しかも農閑期には下肥とりの荷車をひくなど年中無休の働きであったから、他の村の牛馬のように、牧野で悠々と過ごすことはなかった。しかしそれだけに牛馬のツクロイ(手当)もゆるがせにできなかった。

(1) 牛馬のぐあいが変わると直ちに仕事に響くので農繁期の田植前と秋の収穫前に、ムラ内(各地区)で牛馬のツクロイをした。ムラ内には、定められたツクロイ場があって、その時期になると、世話役が舐(フ

レ)をまわしてその場に集め、伯楽^{ウツク}ドンを招び、牛馬の持主が手伝いしながらツクロイをした。

伯楽は麦野(福岡市博多区)の日隈、二日市(筑紫野市)の堺、老司(福岡市南区)の牟田という顔なじみの人達がツクロイ人であった。

(2) ツクロイは、牛馬の足爪の切り揃え、足裏のくされの手当、膝にできたタコやコブの焼きぬき、鞍ずれ、鞍コブの手術、馬の蹄鉄打ち、尻尾やタテガミの切り揃え、それに、焼いた鉄棒の先に塩をつけて馬の舌先を焼く、足のうっ血に針を刺して血をとるなどの手当が主なツクロイであった。

牛馬のツクロイは、痛いところにさわるので、なかなかいうことをきいてくれないから、柱を立ててつないだり、棒に入れて動きを封じたり、縄を足にかけて倒してねかせたり、余程手なれた人でないとできない仕事であった。

(3) 牛馬の病気ではカゼ(風邪)ヒキが多く、特に馬は汗をかくのでカゼをひきやすい。

カゼには、ドクダミやゲンノショウコを煎じてのませる。糞ツマリや腸にガスがたまつて起きる腹痛のときは、センブリやゲンノショウコを煎じてのませるほか、石けん水をつくり、肛門から注入して浣腸

する。これは伯楽に頼むことが多かった。

捻挫や腱炎は熱をもっているので、川に引きこんで冷やしてやる。捻挫の部分や関節の痛みには、布を厚く巻いて無理がいかないように補強してやった。

シラミ、ダニ、蚊、蛇による皮膚病には、ハコベのもみ汁をつけたり、塩湯で洗ってやる。シラミ、ダニは金櫛か毛櫛で落し、ノミ取り粉のような粉薬を吹いてやる。蠅や蚊のたかるのには、ヨモギを自分でそのしぼり汁をつける。肩の痛み、筋肉のこりには、濡れ布をあてがい、その上に焼いた鉄かコテをおいて、患部をぬくめながらほぐしてやる。

怪我には家庭用の傷薬やハコベを塩もみにしてつけるが、味噌をつけてなめさせることもある。牛に限らず動物には、自分から傷口をなめることで傷をなおしていた。

(4) 牛馬とは毎日顔をあわせているので、その様子がすぐわかる。水飲みがわるいとき、駄桶の飼料を食っていないとき、眼が充血しているとき、鼻面が乾いているとき、夜中に鳴くとき、いくら声をかけても起き上がらぬときなど、人間に似た疲労症状が見えてくると、病人や来客用にとつておいた卵を割つてのませ、味噌を湯に溶いてのませる。また麦を煮

てやり、食欲がでるように仕向けて、体力の回復に手をつくすのである。

夏はマヤの風通しを良くし、冬は蓆やワラで壁をふさぎ、入口に風よけの蓆をかけたなりして防暑防寒に気を配った。

- (5) 牛馬の安全息災の祈願は、農作物の豊穰祈願と同様の比重があった。安全祈願の神様は、福岡市姪の浜の愛宕神社、同市西新の藤崎宮に祈願のお参りをした。また英彦山参りの祈りにも同様の祈願をした。そのときは守護札を受けてきた。マヤの入口に上げておくのである。

そのほか正月には、クズ米に粟、トウキビなどの雑穀を入れて牛の餅を搗いて供えるということもあった。

- 2 どこの家でも百姓なら一頭ぐらいの牛馬がいるように、鶏の十羽ぐらいはどこの家でも飼っていた。家の軒下や縁の下を金網でかこみ鶏小屋を作っていた。鶏は屋敷畑を荒らさぬ程度の放し飼いで、干した籾のこぼれや雑穀を拾わせた。

- (1) 鶏が病気になる、鶏小屋の隔にうづくまり眼をつむる。そんなときは、盃一杯のコシヨウ水をつくつてのませる。鶏を抱き口を割って注ぎこむのである。

る。群をはなれて元気がないときは、小麦をまいて拾わせ、小糠に菜の葉をきざみばらつく程度に練って食わせた。

- (2) 鶏に限らず家畜が病気のときは、いかに身辺が忙しくても一頭一羽の世話に手をぬくことはなく、こまやかに精をかけていた。

二十二、妖怪の話

日本の妖怪変化のなかで、最もポピュラーなものは天狗、河童、鬼などであるが、春日市には、これらの名乗った妖怪らしいものはいくつかあった。

○火―春日で「ヒ」と呼ぶものは、一般にいう「火のタマ」「鬼火」のことで人が死んだとき、縁故のある人や場所に出現するので、死亡通知の知らせに行くのは一人では行かず、必ず二人で同行した。

○馬の脚―春日では、三叉路(ミツガノ)の竹藪(タケヤネ)や大木の下にはウマノアシがさがるから、夜の一人歩きは注意するよう子供たちに言いませた。ウマノアシはどのようなものか、誰も正体は知らない。

○オマンチャン狐キツネ 春日原一帯は、人家もなく寂しい所であったが、結婚式や法事で酒に酔って帰るときには、オマンチャン狐が美人に化けて、土産の餅や饅頭を馬の糞に変えられてしまう話をよくきかされた。

○ヒユウ塚ババア 下白水では、日拝塚のあたりには、恐ろしい老姿が出るから夕方おそくまでこの塚で遊んではいけないと言いつ聞かせたという。
ヒヨウ塚とは、ヒヨウタン形の前方後円墳をさしていったものと思われる。

○生き肝取り 春の花が咲くころになると、学校の帰りに道草を食っていると、「生き肝取り」が出るから早く家に帰るよう注意をうけた。どうやら子供の肝臓は、熊の胆と同じく万病にきくのかと思つたが、今でいう痴漢が出没していたのかも知れない。

○大蛇 春日市の南部の白水池から惣利池にかけての一帯は、白水池の弁財天が大蛇（オロチ）を退治したという伝説があるように長さ二間くらい（三・五メートル）の大蛇がいるといわれていた。大正年間に大蛇がいたというので、春日村落の大人たちが、棒やカマスや荒縄を持って退治にでかけたが、その

首尾はどうであったかよくわからない。

二十二、民謡

農業をなりわいとしてきた春日市には、農業関係の唄田植唄、麦打ち唄などが伝わっていたものと思われるが生活様式の急変のためか、民謡が意外に伝承されていないのは淋しい限りである。たとえば現在盆踊りは行なわれていないが、以前はあったというから盆踊り唄が忘れられているのは無理からぬことでもある。
かるうじて採取したものを次に掲げる。

○かぞえ唄

一ツひま鳥 二ツフクロウ 三ツミミツク

四ツヨダカ 五ツイシタタキ 六ツムクワリ

七ツなぎさの浜千鳥 八ツヤマ鳥 九ツコノ鳥

十でトンビの羽根ひろげ 十一カラスのクソクイ

ガラス 十二カラスのよかガラス

○子守り唄

◎ヨイヨイヨイヨイ 夜市が来よる

よいちゃ 金持ち殺される

◎私しやかかさん 死んだと思つて

好いたさまちゃん 添わせなれ

◎山じが唄うたなら大工さんが笑うた
唄でかんなのかけらりよか

○春日の子守り唄

◎私しや かかさん 春日にや行かぬ

春日 カスリメン 食いたらん

◎私しや かかさん 小倉にや行かぬ

小倉コンコンめし 塩の菜

◎私しや かかさん 白水にや行かぬ

白水 しきせの わるいとこ

○サンヒョウの唄（『住居』の『礎石』の項参照）

◎唄え唄えとコリヤせきたてられて

唄はコラ出ずに コラシヨイシヨイ

汗が出た ソノキデヤンナイ

◎何をくよくよコリヤ川ばた柳

水のコラ流れをコラシヨイシヨイ

見て暮らす ソノキデヤンナイ

◎祝いめでたの コリユ 若松様よ

枝もコラ さかえて コラシヨイシヨイ

葉も茂る ソノキデヤンナイ

◎腰の痛さよ コリヤ せまちの長さ

四月五月のコラシヨイシヨイ

日の長さ ソノキデヤンナイ

○お月さまいくつ

お月さまいくつ 十三、七つ

七つで子をうんで その子はどくなつた

七つは若い ガラガラ買って あげまつしよ

二十四、春日市関係生活史年表

年号	西暦	記号	備考
神護景雲一	七六八	春日大明神創建(社伝)	源頼朝、鎌倉幕府を開く
建久三	一一九二	石清水檢校成清、白水庄等六カ所の庄園を鎮西奉行天野遠景に譲る(石清水文書)	
弘治一	一五五五	白雲山淨運寺建立(下白水)	
天王一四	一五八六	春日神社、島津軍の兵火で焼失。天浦城落城(伝承)	
寛永四	一六二七	黒田一成(朝倉、三奈木)春日宮再建	
〃一五	一六三八	下白水村飛背に御旗組八軒、福岡大工町より移住(幟(昇)町の地名の起り)	
寛文四	一六六四	武末新兵衛が白水池を築造	
寛享五	一六八八	武末新兵衛歿(九月四日)	
宝永五	一七〇八	下白水村、黒田藩の給地としない村に指定	
宝曆一〇	一七六〇	白水池の井樋崩れ、下流七カ村水災	
〃一一	一七六一	那珂郡一五村窮村仕組(藩に対し、五カ年賦の用心除銀八〇貫の借用申込みを許可さる)	
文政四	一八二二	下白水村庄屋宗植葉、上納米免租請願で無礼討となる(伝承)	
〃五	一八二二	白水八幡宮の現本殿建立	
明治五	一八七二	郡村制を廃し、大、小区画制を採る。	学制頒布。

筑前三二区、福岡第一区、博多第三区（一月）庄屋、名主制を廃し、戸長、副区长制をおく（四月）

筑前三二区を一六六区に統合、二七八小区（九月）区長一人、戸長三人をおき、区长事務所を調所と称す。

那珂郡は一三大区（調所所在地、三宅）

第四小区（上白水、五郎丸、松木、中原）

第一〇小区（須玖、井尻、横手）

第一一小区（下白水、小倉、春日、井相田）

須玖小学校創立（戸長武末六平宅地内）

長浜春和、上白水に私塾を開く

春日小学校創立

大区、小区制を廃し、旧郡、町、村復活

郡に郡長、区に区长、町村に戸長を置く。

那珂、御笠、席田の郡役所を山田村に置く。

巡查駐在所を下白水に置く（八月二四日）

〳〳二二

市町村制施行、上白水村、下白水村、須玖村、春日村、小倉村を合併、春日村と称す。役場を昇町に置く。（世帯数四一六、人口二三三八）九州鉄道雑餉限駅開設

新橋、横浜間に鉄道開通
太陽曆を採用。

筑前竹槍一揆（六月〜七月）

徴兵会布告

一八七七（明治一〇）西南の役

福岡市で時号砲（ドン）を民営で発足。二五年市営。昭和六年サイレンと交替。

九州鉄道会社設立（民営）
東海道本線全通

大日本帝国憲法発布

ク二三	一八九〇	初代春日村長平野五郎次	第一回帝國議會召集 教育勅語發布
ク二五	一八九二	春日、臼佐村共立第一春日尋常小学校(須玖)第二尋常小学校(春日)創立	一八九四(明治二七)日清戦争
ク二八	一八九五	台風襲来、被害甚大(七月)	
ク二九	一八九六	筑紫郡発足(那珂、御笠、席田三郡合併)	一八九七(明治三〇)八幡製鉄所設立
ク三一	一八九八	武末新兵衛頭彰碑建立(須玖)	一八九九(明治三二)産業組合法制定。
ク三五	一九〇二	筑紫郡是、町村是作成。春日村是、春日尋常小学校開設(昇町)。春日第一尋常小須玖より移転。	一九〇一(明治三四)愛国婦人会設立
ク三七	一九〇四	春日尋常小学校に高等科を置く	一九〇二(明治三五)日英同盟
ク三九	一九〇六	上白水と安德村中原との間に溜池紛争	日露戦争
ク四〇	一九〇七	九州鉄道、日本国有鉄道に買収される(国鉄鹿児島本線)	尋常小学校の年限を六年とする
ク四一	一九〇八	上白水耕地整理工事竣工 このころ春日村青年会発足(青年団前身)	第一回ブラジル移民

〃 四二	一九〇九	小倉信用購買組合設立	韓国併合
〃 四三	一九一〇	第三代村長 白水道夫	九州帝国大学発足
〃 四四	一九一一	寺田池提防改修(下白水、一ノ谷)	明治天皇崩御、嘉仁親王踐祚。大正と改元。
〃 四五	一九一二	須玖に電灯つく(電灯料月五〇銭)	乃木希典夫婦殉死。
大正 一		大正元年の物価 白米一石、二五四五銭、牛乳一合、四銭。清酒一升八五銭、もりそば三銭。	中華民国成立、孫文
〃 二	一九一三	第四代村長 白重五郎吉	第一次世界大戦
〃 三	一九一四	桜島大噴火、火山灰飛来す 小倉区に電灯ともる	ドイツに宣戦布告
〃 四	一九一五	第五代村長 武末甚太郎 上白水、下白水に電灯ともる	ソビエト政権成立(十月革命)
〃 六	一九一七	第六代村長 白水清市	シベリヤ出兵
〃 七	一九一八	米騒動、スペイン風邪	スペイン風邪死者(二五万人)
〃 八	一九一九	春日鶴我山に乃木大将の遺品収蔵(將軍台)	一九二〇(大正九)第一回国勢調査。第一回メーデー。
〃 一〇	一九二一	九州鉄道(後の西日本鉄道)春日原八二、〇〇〇坪買収。 春日区大火	郡制廃止法公布
		第七代村長 木下直三郎	

々 一 一	一九二二	春日村信用組合創立 春日村青年団発足 岡本辻で銅矛九本出土 第八代村長 金堂辰次郎 郡制廃止。岡本に電灯ともる 福岡、久留米間に急行電車開通（現西鉄大牟田線） 春日原競技場開設。このころ電話が昇町にひかれる。 春日原競技場開業。このころ電話が昇町にひかれる。 春日原競技場開設、春日原遊園地化進む。 春日村主婦会結成（初代会長 白水百々代） 春日区に電話開通 春日原、福岡間電車賃（往復）三〇銭。 第九代村長 白水清助	閩東大震災 メートル法施行 衆議院議員（普通）選挙法公布。ラジオ放送開始。 一九二六（大正一五） 大正天皇崩御（二月二五日）摂政裕仁親王踐祚。 昭和と改元 一九二七（昭和二）金融恐慌、銀行休業続出。 一九二八（昭和三）第一回普通選挙 一九二九（昭和四）日本共產党員大検査 昭和恐慌激化。ロンドン海軍々縮条約調印。金解禁
々 四	一九二九	日拝塚盗掘さる 須玖、岡本遺跡発掘調査（京都帝大） 第十代村長 柴田勝次郎	
々 五	一九三〇	渡辺鉄工所、千代町より移転（雑餉隈）このころからラジオ普及。須玖、沖地区に競馬場、三方年開催	

昭和六	一九三一	春日原に巡查駐在所設置	満州事変
七	一九三二	春日原納涼花火大会閉鎖	上海事変。満州国建国。
〃		第十一代村長 松尾友吉	五一五事件
九	一九三四	日米陸上競技大会（春日原）	
〃		第十二代村長 大村重太郎	
〃		春日原競馬場開場	
一〇	一九三五		二、二六事件
一一	一九二七	第十三代村長 金堂益次郎	支那事変（日中戦争）
〃			一九三八（昭和一三） 国家
一四	一九三九	春日村国防婦人会発足（主婦会改め）。熊野神社再建（岡本）	総動員法
			ノモンハン事件

二十五、あとがき

本書は、さきに刊行された春日区編（昭和五十六年刊）、須玖区、岡本区編（同五十七年刊）、小倉区編（同五十八年刊）、上白水区編（同五十九年刊）、下白水区編（同六十年刊）を概括して春日市全体の民俗をとらえ、併せて各地区編にもれたものを補ったものである。

ただし、『信仰』の項における各神社、寺院の行事はそれぞれ特色があり、総括することは困難なので、各地区編を参照されたい。また『家族』の項は、各地区ほぼ類似しているので、あえて収録せず、「家族の呼称」のみにとどめた。思うに、戦後生活様式の変化と都市化により古い習俗は、急速に消滅しつつあるので、これが採録は焦眉の急を要するものであることだけは強調したい。

◎調査担当部門および調査員（春日市郷土史研究会）

春日市の沿革と地誌・村落の
たたずまい・村落共同体・村
落気質・妖怪の話・農作業と
農具
歴史的伝承と地名
農事暦・民間療法・家畜の
民間療法
住居
家族の呼称
衣生活・民謡

白水昇
寺崎直利
松永美吉
阿部好刀
篠原繁樹
平田善積
清永久仁子

食習
信仰

年中行事・産育の儀礼・厄年・
婚姻の儀礼・葬送の儀礼
春日市関係生活史年表
◎編集・執筆責任者
◎編集・編集委員長
委員

大矢部 尚一
黒木 康友
原口 健吾
松永 美吉
黒木 康友
松永 美吉
白永 美吉
篠原 繁樹
黒木 康友

◎挿し絵
◎写真

委
員

篠原 白水 黒木 清水 白木 松永 原口 清永 大矢部 阿部 平田 寺崎
繁樹 昇 康友 久仁子 昇 美吉 健吾 久仁子 尚一 好善 積利

むかしの生活誌

(総集・補遺編)

昭和六十二年三月十日

発行者 春日市郷土史研究会

(春日市文化会館内)

福岡県春日市大字小倉六七三番地の一

令和六年九月二日発行

復刻版 春日市協働推進部文化財課

発行者 (春日市奴国の丘歴史資料館内)

福岡県春日市岡本三十五七

印刷・製本 有限会社 成光社

福岡県福岡市南区大楠一―二十九―三三三